令和３年度第１回紀南地域高等学校活性化推進協議会

配　付　資　料

○ 令和３年度紀南地域高等学校活性化推進協議会委員名簿・・・・・・・・・・ Ｐ１

○ 紀南地域高等学校活性化推進協議会設置要綱・・・・・・・・・・・・・・・・ Ｐ２

○【資料１】令和２年度第２回
紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要・・・・・・・・・・・ Ｐ３

○【資料２】これからの県立高校のあり方について
第１回教育改革推進会議（5/20）資料（一部抜粋）と概要等・・・ Ｐ６

○【資料３】今後の県立高校活性化の基本となる考え方について・・・・・・ Ｐ19

○【資料４】小規模校における活性化の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・ Ｐ24

○【資料５】全国の全日制第１学年学級数別の学級規模の状況
第２回教育改革推進会議（７/20）資料（一部抜粋）と概要等・・・ Ｐ35

○【資料６】木本高校・紀南高校卒業者の進路状況 ・・・・・・・・・・・・ Ｐ42

○【資料７】木本高等学校の活性化について・・・・・・・・・・・・・・・・・ P46

○【資料８】紀南高等学校　活性化取組の総括的な検証・・・・・・・・・・・ P50

○【資料９】令和３年度紀南高校活性化プラン（第二次）に係る活動指標、
成果指標について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P59

○【資料 10】部活動の現状と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P60

○【資料 11】令和３年度の協議について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P62

○【資料 12】東紀州地域　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）・・・・ P64

○【資料 13】熊野市・南牟婁郡中学校卒業者（予測）と
木本・紀南両高等学校への入学者数・・・・・・・・・・・・・・ Ｐ65

○【資料 14】東紀州地域の高等学校への進学希望状況比較と入学者数・・・・ P66

○【参考資料】平成 28 年度協議のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ P69

令和３年度　紀南地域高等学校活性化推進協議会　委員名簿

Ｎｏ		所属及び名前	
1	学識経験者	三重大学教育学部　教授　　平山　大輔	継続
2	地域有識者	熊野商工会議所青年部 幹事　　森本　健一	継続
3		文恵丸水産　代表　　長山　行文	継続
4		紀宝町商工会　会長　　田尾　友児	継続
5	市町教育委員会	熊野市教育委員会　教育長　　倉本　勝也	継続
6		御浜町教育委員会　教育長　　辻本　誠一	新
7		紀宝町教育委員会　教育長　　西　　章	継続
8	小中学校ＰＴＡ代表	紀南ＰＴＡ連合会　会長　　高垣　裕人　（中学校代表）	継続
9		紀南ＰＴＡ連合会　進路研究副委員長　　森澤　和俊　（小学校代表）	新
10	高等学校ＰＴＡ代表	県立木本高等学校ＰＴＡ　会長　　道前　涼太	新
11		県立紀南高等学校ＰＴＡ　会長　　水谷　徹	継続
12	同窓会・地域代表	県立木本高等学校同窓会　会長　　久保　治也	継続
13		県立紀南高等学校学校運営協議会　会長　　廣畑　勝也	継続
14	小中学校長代表	御浜町立神志山小学校　校長　　濱田　充宏	新
15		御浜町立尾呂志学園中学校　校長　　髙田　有治	新
16	小中学校教員代表	熊野市立有馬小学校　教諭　　久保　範顕	新
17		御浜町立御浜中学校　教諭　　大﨑　重久	継続
18	県立高等学校長	県立木本高等学校　校長　　松本　徳一	継続
19		県立紀南高等学校　校長　　森　　典英	継続
20	県立高等学校教員代表	県立木本高等学校　教諭　　寺前　淑湖	継続

紀南地域高等学校活性化推進協議会設置要綱

（設　置）

第１条　少子化などの社会の変化が著しい中、紀南地域における高等学校の特色化、魅力化を図るとともに、生徒にとって魅力ある学習環境を整備するため、紀南地域高等学校活性化推進協議会（以下、「協議会」という。）を設置する。

（所掌事項）

第２条　協議会は、次に掲げる事項について具体的に検討し、協議する。

（１）今後の紀南地域全体における県立高等学校のあり方に関すること

（２）紀南地域の県立高等学校活性化の方策に関すること

（３）施設・設備に関すること

（４）その他検討を要すること

（組　織）

第３条　協議会は、学識経験者、地域有識者、小中学校ＰＴＡ関係者、高等学校ＰＴＡ関係者、関係市町教育委員会教育長、小中学校長代表、県立学校長代表、教職員代表等で組織する。

２　協議会に、会長、副会長を置く。

３　会長及び副会長は、委員の中から互選により決める。

４　会長は会務を総理し、副会長は会長を補佐し会長に事故ある時は職務を代行する。

５　協議会は、必要に応じて関係者の出席を求め、意見を聞くことができる。

（調査委員会）

第４条　協議会のもとに、必要に応じて調査委員会を設置する。

２　調査委員会は、テーマに応じて会長の指名する関係者で構成する。

（会　議）

第５条　協議会は、会長が招集し、会長が議事運営する。

２　協議会の庶務は県教育委員会事務局において処理する。

（その他）

第６条　この要綱に定めるもののほか、協議会の運営に関する事項は会長が定める。

附　則

この要綱は平成２４年　７月１８日から施行する。

この要綱は平成２９年　６月１２日から施行する。

資 料 1

令和2年度第2回紀南地域高等学校活性化推進協議会の概要

１　日時　　令和３年３月２４日(水)１９時００分から２１時０５分まで
２　場所　　熊野市文化交流センター　交流ホール
３　概要

木本・紀南両高等学校の活性化にかかる令和２年度の主な取組の成果と課題について、両校からの報告をもとに協議を行いました。さらに、中学校卒業者数の減少に伴い、令和７年度には、木本・紀南両高等学校への進学者が合わせて５学級程度になることが見込まれることをふまえ、その際の両校の配置や学びのあり方について協議をしました。

主な意見は次のとおりです。

≪両校の活性化にかかる令和２年度の主な取組の成果と課題について≫

○木本高校における地域での取組の成果、紀南高校における対外的発信について具体的に教えていただきたい。
→木本高校では七里御浜等の地域の清掃活動などの奉仕作業を通して、この地域の良さを再認識することにつながり、生徒たちが生まれ育った場所を大切にする想いが高まっている。また、高校生が小学校に英語を教えに行く取組により、生徒自身の英語の理解もさらに深まり、学習意欲の高まりにもつながっている。
→紀南高校では、インターンシップの体験を通じて学んだ大切なことを小・中学生に伝える等の活動などを、地域の新聞社やケーブルテレビ等に積極的に情報提供している。

○木本高校生による小学校での英語の授業は、今年度はコロナ禍のため実施出来なかったが、昨年度は２回実施し、とても良い活動であった。小学生は教えてもらうことで高校生にあこがれ、また顔つきが変わった小学生の変化を目の当たりにした高校生も自信を持つことにつながっている。

○紀南高校の「まごターン」の制度は、コロナ禍においてＰＲが難しい中で、同窓会からもＰＲしてもらっている。令和３年度入試では、この制度を使って受験をした中学生がいると聞いた。

≪紀南地域の県立高等学校の今後のあり方について≫

○令和３年度の入試において、尾鷲高校で１クラス３５人を導入したことについて、県としての考え方や今後の方針について説明が欲しい。
→すでに統合した学校のある地域において、さらに１学級を４０人として学級減を行うと当該地域の専門学科の学びが維持出来なくなることから、定員を３０人、３５人とした。高校標準法により、１学級４０人を標準としており、白山高校と尾鷲高校を合わせて４０人を減じた。こうすることで専門学科の学びは維持されるが、入学定員そのものは減り、教職員の数も減ることにともない、少ない教職員で以前と変わらない学級数に対応する授業を担わなくてはならなくなっている。

○後期選抜において、志願倍率が０．１倍を切っている学校の状況について説明して欲しい。
→現在の「県立高等学校活性化計画」（以下、「計画」という。）においては、小規模校の活性化に取り組み、地域と一体になった学びを推進するとともに、県内だけでなく県外からも入学できる入試制度を導入するなど、活性化に取り組んでいるものの、地元の中学生が入学する割合は高まっていないのが現状である。
○中学校卒業者数の減にともない、紀南地域全体で５学級の規模が見込まれる令和７年度がひとつの区切りであると思うが、現在和歌山県が取り組んでいるように、三重県でも具体的な再編を考えているのか。
→現計画においては、地方創生の流れもふまえ、小規模校であっても、地域と一体になって学んでいくことを柱としてやってきた。しかし、計画期間が残り１年となり、地域と一体となった学びをスタートさせた４年前とはフェーズが変わってきているという認識は持っている。次期計画の策定においては、地域協議会の意見や、県立高等学校みらいのあり方検討委員会での意見等を勘案して、再編に対する方向性は打ち出していかなくてはならないと感じているが、今の段階では具体的には決まっていない。
○２校を存続しても、両校でそれぞれ生徒数が減っていけば、校内での選択肢が減ってしまうことから、現在２割程度いる管外進学者がさらに増えてしまう可能性がある。両校のよいところを残して、校内の選択肢を増やすために統合することは有りうるのではないか。この地域から管外へ進学することは、通学費等、経済的な負担が大きい。学校の新たな魅力を高め、この地域の学びを充実させるという点で、統合は必要である。
○熊野市から遠方に位置する紀宝町にとっては、かつての中間地点に新校を設立する案には賛成したが、熊野市まで通学することは単純には受け入れがたい。仮に統合により一時的に５学級を維持したとしても、すぐに４学級、３学級となってしまう。紀南高校は小さな学校であるが、きちんと学べる環境があり、先生方は一生懸命取り組んでもらっている。さらなる魅力を打ち出して、存続を図ることも検討して欲しい。
○令和７年度の生徒減について協議しなければならないのも分かるが、御浜町や熊野市の昨年の出生数は驚くほど少ない。１５年先の少子化をふまえて学校のあり方を考えることによって、令和７年度のあり方の考え方も変わるのではないか。和歌山県と三重県との生徒の行き来も考慮するとともに、人口規模を保つための方策についてもあわせて検討すべきである。
○紀宝町内では、今後、学校へ入学してくる子どもたちは増々減っていく。県から具体的な案の提示をしてもらい、他府県等の好事例を参考にし、住民の声もしっかりと聞きながら、今後の長期的な学校のあり方を協議していくべきである。
○それぞれの学校において生徒減にともない存続が難しくなってきた部活動もある中、自身が種目やレベルを求めて管外へ進学する生徒も多い。両校で一体となって部活動を行ってはどうか。

→合同での出場が認められている競技や参加できる大会はある。また、校舎制の南伊勢高校では、両校舎で移動しあって合同練習をしている部も存在する。もし、当地域において同様な活動を行おうとすると、移動時間がかかるため練習時間が短縮されることが予測されるが、対応策として検討に値するのではないか。

〇統合について協議する際には、法的、財政的な制約があると思うが、子どものことを一番に考えて議論してほしい。誰一人取り残さない教育を目指し、どの地域に生まれても子どもたちの学びを保証してほしい。

〇子どもたちが自分の行きたいところで学べるようにしてほしい。また、保護者の意見も聞いて欲しい。

〇紀南ＰＴＡ連合会では、木本・紀南両高校の統合に関するアンケートを、約１５０人の保護者に応えてもらったところ、両校の存続に関して多様な意見を持っていることが分かった。引き続き調査を行っていきたい。

〇次年度の活性化協議会については、平成２８年度のように途中でゴールを見失うことのないよう、論点を焦点化して県の方向性を示し、子どもたちの学びがどうあるべきか協議して欲しい。また、この協議会での意見を教育改革推進会議にも届けてもらいたい。

→地域協議会でいただいたご意見は、教育警察常任委員会に報告するとともに、総合教育会議や教育改革推進会議にも報告している。特に次年度の教育改革推進会議は次期計画の策定に向けた審議が中心となることから、しっかりフィードバックしていく。次期計画期間は令和４年度からの５年間と考えており、今回議論していただいた令和７年度の当地域の高校のあり方については、この期間中のこととなるので、引き続きご意見をいただきたい。

資料２－１

【第１回教育改革推進会議（5/20）資料】

これからの県立高校のあり方について

現行の「県立高校活性化計画」の計画期間が令和３年度で終了することから、令和３年度においては、教育を取り巻く社会情勢の変化等をふまえ、これからの時代を生きていくために必要となる力を育んでいくことのできる県立高等学校のあり方等について「三重県教育改革推進会議」でご審議いただき、次期「県立高等学校活性化計画」を策定していきたいと考えています。

１　教育を取り巻く社会情勢の変化

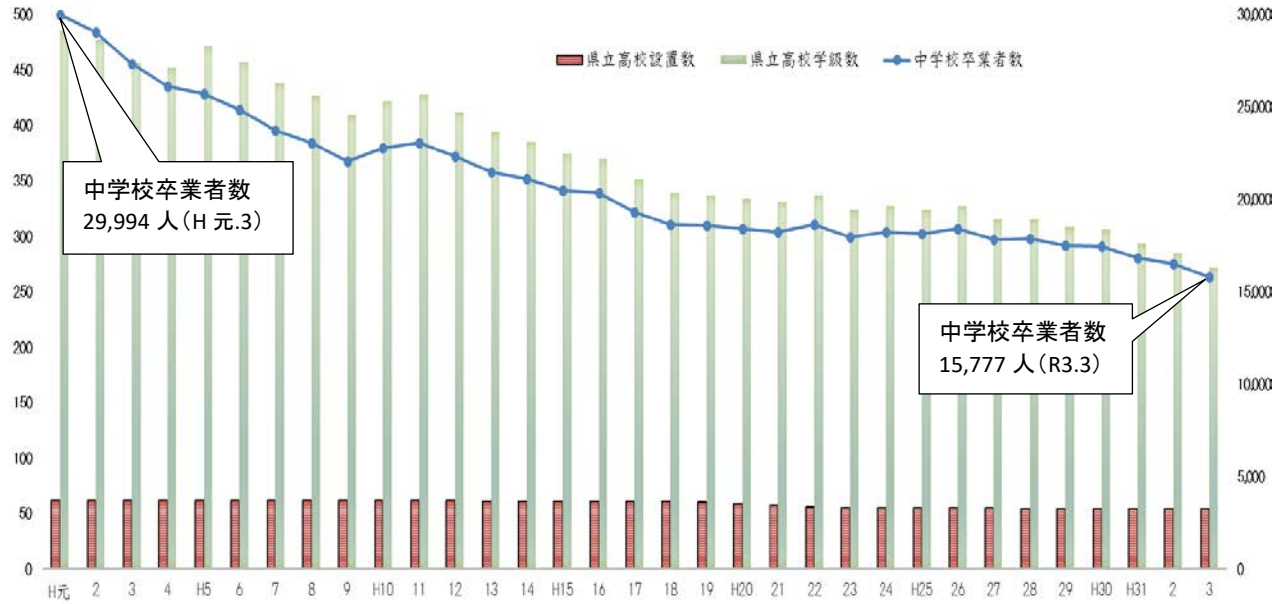
【参考】本県における少子化の状況

○　本県の人口は平成 19 年をピークに減少局面に入っており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、令和 7 年には 171 万人に、令和 27 年には 143 万人にまで減少することが見込まれています。

○　県内の中学校卒業者数も年々減少を続けており、平成元年から令和３年を見ると、29,994 人から 15,777 人と約 47.4%の減となっています。

○　全日制課程を置く県立高校の設置数については 62 校から 54 校へ８校の減少となる一方で、全日制課程を置く県立高校の学級数は 485 学級から 271 学級と約 44.1%の減、１校あたりの平均学級数は 7.82 学級から 5.02 学級に減少しています。

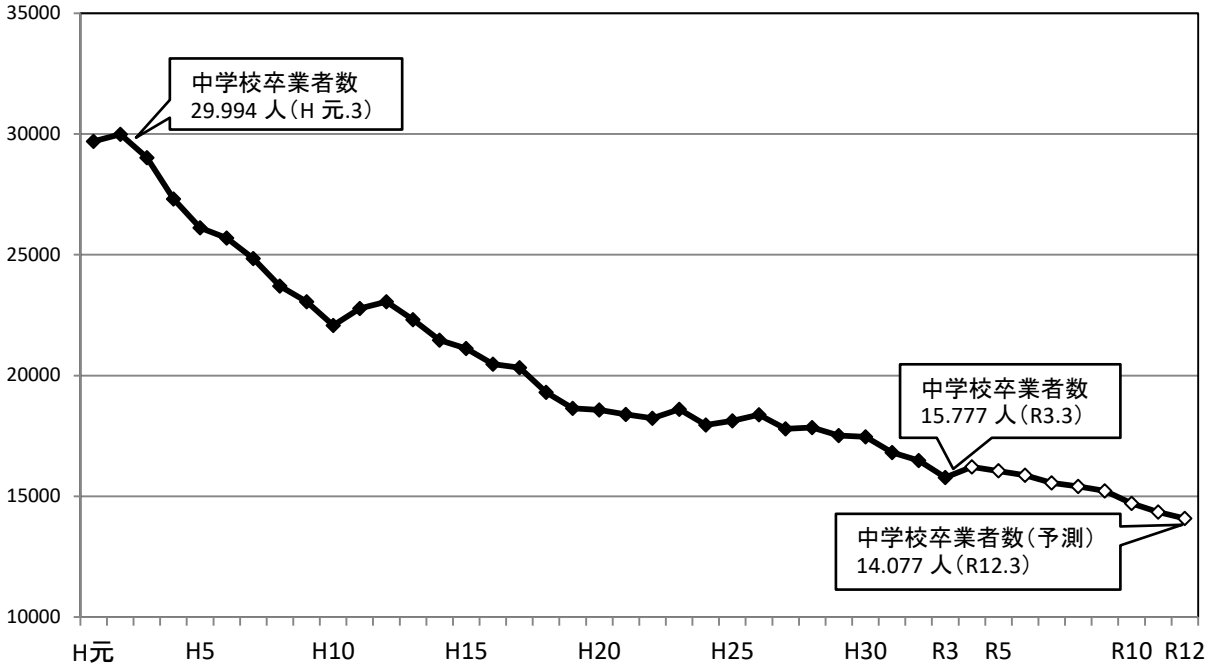
【H1～R3 中学校卒業者数/全日制県立高等学校(含校舎)設置数/全日制県立高等学校(含校舎)学級数】



	H元	H2	H3	H4	H5	H6	H7	H8	H9	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	H31	R2	R3
県立高校学級数	485	477	456	452	471	457	438	427	410	422	428	412	394	385	374	370	351	339	337	334	331	337	324	327	324	327	315	315	308	306	293	285	271
県立高校設置数	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	62	61	61	61	61	61	61	60	59	57	56	55	55	55	55	55	54	54	54	54	54	54

【中学校卒業者数の推移・将来推計】

中学校卒業者数は、令和４年３月に前年度を上回るものの、令和５年３月以降の５年間で 1,000 人程度減少することが見込まれています。



２　これからの時代に必要とされる力について

（１）　豊かな未来を創っていく力の育成

「三重県教育ビジョン」においては、これからの時代に必要となる力を「豊かな未来を創っていく力」とし、「確かな学力」「豊かな心」、「健やかな身体」を身に付けることで、自分のよさや可能性を認識するとともに、他者に対する理解や思いやり・優しさを育み、それらを基礎として、失敗を恐れずさまざまなことに積極的に挑戦し、他者とつながり、協働しながら困難な課題を乗り越えていく力を育んでいく、としています。

【参考】教育ビジョンに込める想い（「三重県教育ビジョン」11～12 ページ）
　　１　誰一人取り残さない教育の推進
　　２　子どもたちの豊かな未来を創っていく力の育成
　　３「オール三重」による教育の推進

（２）主体的・対話的で深い学びと個別最適な学び

令和４年度から年次進行で実施されることとなっている高等学校学習指導要領においては、育成をめざす資質・能力について、

・「生きて働く『知識・技能』の習得」
・「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」
・「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」

の三つの柱で整理するとともに、生徒一人ひとりに社会で求められる資質・能力を育み、生涯にわたって探究を深める未来の創り手を送り出していくことが重要であるとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていくことを示しています。

一人ひとりの子どもの能力を最大限に引き出すための ICT 等の活用も含めた多様な学びの提供、地域課題の解決に実践的に取り組む学びなど実社会とつながった学びの推進、生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学びの推進などの実現が求められています。

３　「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」での議論の概要

地域産業界や教育・文化等の分野、県立高等学校ＯＢなどさまざまなバックボーンや経験を持つ方々から、これまでのご自身の経験をふまえ多様な観点・角度から議論することを目的に設置した「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」において、これからの時代を生きていく高校生にどのような学びが必要か、そのために高等学校はどのようにあるべきかなどについて、計７回にわたって議論を行いました。

【参考：協議テーマ**】**

開催日	テーマ
第１回(10 月 13 日)	・新たな時代における本県の高等学校教育のあり方について
第２回(12 月 1 日)	・県立高等学校の課題と協議テーマ ・新たな時代に対応した高等学校教育の推進①
第３回（1 月 5 日）	・新たな時代に対応した高等学校教育の推進② ・全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり
第４回（2 月 4 日）	・これからの学びに対応した学科・課程のあり方
第５回（3 月 15 日）	・これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成 ・県立高等学校の規模と配置①
第６回（3 月 26 日）	・県立高等学校の規模と配置②
第７回（4 月 26 日）	・協議のまとめ

４　県立高等学校生徒を対象としたアンケートの実施

「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」では、本県の高校生の現状を把握するため、令和２年度に県立高等学校に入学した生徒（アンケート時に高校１年生）を対象に、高校での学びに対する期待や興味・関心、これから受けたい授業等について、インターネットを活用したアンケートを実施しました。

【アンケートの実施概要】

○ 調査期間　令和２年 12 月７日（月）～令和３年１月 11 日（日）

○ 調査対象　学科（普通科、専門学科、総合学科）課程（全日制、定時制、通信制）別に抽出

○ 回答者数　3,373 名

（学科別内訳）普通科、普通科系専門学科　1,695 名
職業系専門学科　1,395 名
総合学科　283 名

（課程別内訳）全日制　3,146 名
定時制・通信制　227 名

【参考】アンケート項目

質問番号	項目
1	高校に入学する前、高校に対して期待していたことは何ですか。
2	現在通っている高校を選んだ理由は何ですか。
3	高校を選ぶとき、参考にしたことは何ですか。
4	どんなときに、現在通っている高校に入学出来てよかったと実感できますか。
5	現在通っている高校での生活について満足していますか。
6	質問 5 でそのように回答した理由は何ですか。
7	あなたは普段、授業の予習・復習や受験勉強、資格取得のための学習などを、授業以外（家や塾、放課後の学校等）でどれくらいしていますか。
8	あなたは普段、学校の授業時間以外に一日あたり平均でどれくらいの時間、読書をしますか。
9	あなたは普段、学校の図書館をどれくらい利用しますか。
10	地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか。
11	これからの時代に向けて高校時代に身につけておくことが必要だと思うものはどれですか。
12	質問 11 で選んだ項目について、あなた自身は、それらを身につけることができていると思いますか。
13	学校だけはなく普段の生活も含めて、これから学びたいと思っていることや、興味・関心を持っていることについて一言で表現してください。
14	今後、どのような形の授業を受けたいですか。
15	現在通っている高校をよりよくするためには、どんなことをしたらよいと思いますか。
16	これからの社会には、どんな高校があったらいいと思いますか。

５　地域活性化協議会での議論の概要

中学校卒業者の大幅な減少が予想されている伊賀・伊勢志摩・紀南の各地域に設置した地域協議会において、地域の声を丁寧に聞き取るとともに、教育に関する国の動向やみらい委員会の協議内容を共有しながら、今後の地域の高等学校教育や県立高等学校のあり方等についての協議を継続しています。

資料２－２

県立高等学校みらいのあり方検討委員会
協議の概要（骨子）

令和3年5月

（三重県）県立高等学校みらいのあり方検討委員会

1. はじめに

本県においては、平成 29 年3月に「県立高等学校活性化計画」（以下、「計画」という。）が策定され、生徒一人ひとりに応じた多様な教育や地域で学び地域を活かす教育が推進されてきた。

現行計画は令和3年度末に計画期間が終了することから、次期計画の策定に向けて、学校や PTA、教育委員会などの学校関係者だけではなく、地域産業界や教育・文化等の分野、県立高校 OB など、様々なバックボーンや経験を持つ委員が、既存の高校教育の枠にとらわれない幅広で多様な観点・角度から調査し考察していくことを目的とする、県立高等学校みらいのあり方検討委員会（以下、「委員会」という。）が設置された。

この協議の概要には、中長期的に検討すべき内容の意見もあれば、早急に実施に移すことが望ましい内容の意見もある。また、対立する意見もそのまま記載し、今後の検討に委ねた部分もある。

2. 協議の流れと検討テーマの設定

本委員会では、まず、これからの時代を生きる子どもたちに必要な学びや、そのために高等学校はどうあるべきかという大きな視点から協議を行い、以降の本委員会で特に幅広く検討するテーマを設定した。

【第1回委員会における意見の概要】

○ 自ら物事を考えて課題を解決する方法を体験的に学ぶことが必要
○ 実際の経験を積むことを重視し、失敗しても何度でもチャレンジできるようにする
○ 多様な他者と関わり、様々な生き方を学ぶことが必要
○ 学ぶ楽しみや生きる喜びを感じられるようにする
○ 多文化共生の教育や外国人生徒への学習支援をする
○ 教員はこれまでの指導方法等にこだわらず、一人ひとりの生徒の状況に応じた学びを工夫して実現することが必要
○ グループワークやディスカッションで、生徒が建設的に議論できるよう導ける教員の養成が必要
○ 学校は、一人ひとりが様々な面で誰からも肯定され、自身を肯定する力が自分でも他者からも育てられる場であるべき
○ 生徒が高等学校を選択しやすいよう、各学校で目指すところを明確にする

【検討テーマ】

・ 新たな時代に対応した高等学校教育の推進
・ 全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり
・ これからの学びに対応した学科・課程のあり方
・ これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成
・ 県立高等学校の規模と配置

3. 協議の概要

（1）新たな時代に対応した高等学校教育の推進

＜実社会とつながった学びの推進について＞

実社会とつながった学びを推進するにあたり、どのような取組や視点が必要であるかについて協議した。

【概要】

- 全ての高校で、インターンや探究活動による企業等との連携、県外地域の先進的な取組を行っている高校との連携などを進めていけるとよい
- 子どもたちにとって、社会の一員として活躍していることを実感できる場や経験が重要であるため、アルバイトを推奨することも考えられるが、一方で、部活動への影響等による学校の活力の喪失が懸念される
- 教職員は、生徒に実社会での学びと学校での学びのつながりを実感させる指導力や学校と外部とをコーディネートする調整力、自らも学び続ける意欲が必要
- これからの時代に必要な学びを実現していくためには、働き方改革を通して教職員の勤務環境や意識を変えていくことが必要
- 生徒は自ら企画を立案し、外部とアポイントメントを取るなど、自分達の学ぶ場を自分たちで作っていくことが望ましい
- 教育関係者は、高校生は「小さな大人」であり、「大きな子ども」のままにしておかないという意識を持って、生徒を主語にした学校づくりを心がけることが大切

＜個別最適な学びの推進について＞

個別最適な学びを推進していくにあたり、どのような取組や視点が必要であるかについて協議した。

【概要】

- 中学校の段階から、自分の興味・関心に基づいて能動的に学ぶ楽しさを体験することが必要
- 生徒の興味と学ぶ目的をつなげていくことで、生徒が自ら学習を進めていけるように導くことが教員には求められる
- 教員が生徒に教えるだけでなく、生徒同士で教え合うという仕組みを取り入れることで、生徒にとっては学びの定着が図られるとともに、教員の生徒理解も促進される
- 学校においては、子ども一人ひとりを主語にしながらカリキュラムを柔軟にすることで多様な学び方を可能にし、そこに軸を通していくことが求められる

（2）全ての高校生を誰一人取り残さない教育環境づくり

＜外国人生徒への支援について＞

外国人生徒が社会の一員として自立するための力を育んでいくため、県立高等学校において必要となる視点や取組の方向性、学びのあり方について協議した。

【概要】

- 日本語での概念理解が難しい教科などは母語で開講するとともに、オンラインで受講できるようにするなどして、母語での単位修得を広げていってはどうか
- 将来、日本で大学進学や就職を目指すのであれば、社会に出るまでに日本語を習得できるように徹底するべき
- 生徒が学校を休んでしまう背景について分析し、授業に出席できるよう、教職員や学校でサポートしていける体制があるとよい
- あるアメリカのコミュニティ・カレッジでは、生徒が集まって得意分野を互いに教えあえる「ラボ」という場が校内にある。こうした例を参考に、日本人と外国人が共に学び、教え、サポートし合えるような仕組みや場所を作り、誰でも好きなときに行けるようにするとよい
- 外国人生徒を対象とした入試枠がある高校は少なく、進学の選択肢が定時制高校のみとなってしまう状況があるため、こうした入試枠を各地域で増やすことが必要
- 単位修得や修業年限などについて、生徒の状況に合わせた柔軟な制度としていくことが必要
- オンライン等を使ってどこの地域・学校でも同じような支援を受けられる環境の整備や、生徒の相談に対応できる支援員を確保していくなど福祉的な視点も含めたサービスを充実していくことが必要

＜不登校生徒への支援について＞

不登校生徒が自身と社会とのつながりを途切れさせることなく、社会性や自立心を育み、安心して学んでいくために必要となる視点や取組の方向性、それらをふまえた高等学校のあり方について協議した。

【概要】

- 生徒一人ひとりが多様な価値観を認められることで、自分はここに居てもよいと感じられるようにすることが大切
- 様々な背景の子どもたちに対応できるよう、授業への出席や他校への転学のしやすさ等について、フレキシブルな仕組みを考えていくことが重要
- 不登校や退学によって将来の選択肢が狭まらない仕組みを整備することが必要
- 転入学・進級時の不適応を減らし、そう感じた時に対応できるよう、柔軟に進路変更ができる仕組みなどについて、生徒や保護者に伝えていくことが必要

(3)これからの学びに対応した学科・課程のあり方

これからの時代に必要とされる人材を育成するとともに、多様な生徒の可能性及び能力を最大限に伸長していくために、本県の学科・課程における学びの内容や方法をどうしていくべきかについて協議した。

【概要】

- 新たな学科や学校を考える際は、そこで育てたい生徒の姿などが生徒や保護者、地域に理解され、学校の特色として続いていけるよう、教職員を中心に、地域や中高生も含めて議論していくことが大切
- 普通科においては、必要に応じて様々な特色ある学科・コースを新たに考えていくべきだろう
- これからの専門学科においては、状況に応じて必要な学びを柔軟にとり入れたり、複数の学科を統合することなどにより、専門性は確保しつつ、分野横断的な学びについても考えていくべきではないか
- 専門学科の学びにおいては、基本を確実に身につけ、これからの技術の進歩に対応するとともに、応用していける考え方を学ぶことが必要
- 望ましい学びの実現には一定の学校規模が必要であることをふまえると、普通科等を統合し、学びの多様性があって子どもたちのニーズに応えていきやすい総合学科を拡充していくとよいのではないか
- 定時制と通信制を組み合わせた通信サテライト校を整備するなど、定時制と通信制が連携したフレキシブルな仕組みを作っていくべき
- ICTを活用して他校の授業を受けられる環境の整備や、授業手法や指導実績を学校間で共有する仕組み、地域の大人や大学・企業が高校教育に参画する仕組みをつくっていくことが必要だろう
- 教員を育成する体制づくりがより進むよう、必要に応じて同一校での勤務年数を長期化したり、子どもたちにより良い学びを提供するため、教員の意欲や経験、能力をふまえた配置とするなど、教員の人事についても考えていく必要があるだろう
- 他県の特色ある事例を安易に目指すのではなく、三重県の現状をしっかりと認識した上で、どのような高校教育を実現していくかについて議論すべき

(4)これからの社会の変化と県立高等学校の学びに対応した社会性・人間性の育成

選挙権年齢や成年年齢の引き下げといった制度改革、少子化による学校の小規模化、新型コロナウイルス感染症の影響等により、高等学校と生徒を取り巻く状況は大きく変化してきており、学校生活のあり方もこれまでどおりではなくなりつつある中、学校生活を通して生徒に社会性・人間性を育んでいくために、今後どのようなことが必要と考えられるかについて協議した。

また、高校生へのアンケート調査の結果をもとに、読書や学校図書室の利用促進についても協議した。

【概要】

- 教員は、授業の中で育てたい生徒の姿を実現していくために、知識を教え込むだけではない授業のあり方を考えていくことが必要
- 外部の大人に教えてもらうことなど外部人材を活用することは生徒にとって新しい刺激になると同時に、教員の多忙化を解消する手段にもなる
- 生徒の主体性を育むための仕組みを整備し、教員は生徒に「べき」論を押し付けるのではなく、生徒に任せられるようになることが必要
- 理想の学校のあり方や当たり前になっている学校のルールを見直すことについて、対話する場を設けるとよい
- 小規模化が進む中、学校の垣根を越えて授業や部活動を行える仕組みを構築したり、生徒会同士の連携を進めるなど、より広いつながりの中で、生徒の学びや学校生活を保障していけるとよい
- SNS等での情報の真偽を判断する力を、情報教育などと一緒に進めていくことが必要
- 授業や課題の中に読書をとり入れるなどして、本を読むための時間を確保するとともに、生徒に読書の楽しさや有用性などを体験できるようにすることが大切

(5)県立高等学校の規模と配置

今後の少子化の進行や県立高等学校の現状、子どもたちの進学希望の状況をふまえ、社会性の育成、ニーズに応じた幅広い教科・科目の開設、学校行事や部活動の充実等を保障していくことのできる高等学校の規模について協議した。

また、1学年4学級規模となった専門学科高校では学科の多様性や専門性を維持することが困難となったり、一部の高等学校では集団での部活動が困難となったりするなど、全県的に県立高等学校の小規模化が進む中で、これらの学校の今後のあり方を検討していく上で、どのような方向性が考えられるかについて協議した。

【概要】

- 小規模校は個別最適な学びを実現しやすいが、一方で、同年代の多様な人間関係の中で社会性を育んでいくという点などは担保しにくい
- 高校の志願状況を踏まえると、地域の子どもを同一地域の学校に進学させようとすることは、地域の子どもや保護者の教育要求に必ずしも適合していないと考えられるため、施策の方向性を変えていくべきではないか。一方で、都市部の学校にあっては、その周辺地域も自分たちの地域であるという観点で、都市部から周辺地域の活性化に貢献していくことも検討すべきではないか
- 子どもたちの進学希望を実現できるコースが地域の学校にあるとよい
- 小規模校においては、子どもたちのニーズに沿った多様な学びや高校生活を提供していけるよう、これまでの取組を検証した上で、存続か統合かを考える時期に来ているのではないか
- 小規模校を活性化していくためには、限られた財政的・人的リソースをどのように確保していくかが重要であり、都市部の大規模校の定員数を減らして、その分を小規模校に配分していくことも考えられるのではないか
- 今後、一つひとつの学校がさらに小規模化していく中で、複数の学科を併設することのよさを考えると、専門学科の統合を考えていく時期に来ているのではないか
- 高校に通えない地域が出ないようにしていくことが統合にあたっての前提であり、併せて、生徒の過度な通学負担等をサポートする方策を考えていく必要がある
- 既存の学校の枠にとらわれない、新しい形の学校についても検討する必要がある

資料２－３

令和３年度第１回教育改革推進会議概要

日時　令和３年５月 20 日(木)　18 時 00 分～20 時 00 分

【これからの県立高校のあり方について】

○　中学校においては地域の商店等での職場体験などキャリア教育の取組が進んでいるが、高校、特に進学校においては、そうした地域との学びを継続的に行うことが難しいと感じる。今後、高校においては、例えば高校所在地の中学校区の地域の方々と複数年にわたって連携し、関わり続けられるような取組があれば、地域と連携した子どもたちの学びがより深まるのではないかと考える。

○　地域内に２つの高校しかない紀南地域においては、今後も生徒数の減少が続き、推計によると令和７年度に地域内で１学級減が避けられない状況にある。高校は活性化にがんばって取り組んでいるが、子どもたちの減少が進む中でもう限界にきていると感じている。今後は、県教委にも方向性を示してもらいながら、協議会において具体的な検討を進めたいと思っている。

○　伊勢志摩地域における本年度の入試状況を振り返ると、小規模高校の存続を前提として都市部の中規模高校の定員数を減じたことに伴って都市部の私立高校への入学者が増加する結果となり、必ずしも子どもや保護者のニーズをふまえた調整となっていなかったのではないかという印象を持っている。

○　新型コロナウイルス感染症を背景に不登校児童生徒が増えているとともに、Ｎ高などの広域通信制高校に転学する生徒も増加している。こうしたことをふまえ、本県において　もインターネットを活用して高校卒業資格を取得できる通信制高校について検討していく必要があるのではないか。

○　外国人生徒の受け入れを充実させていくとしても、日本語しか話せない教員が様々な言語・国語を持つ生徒を指導していくのは現実的に難しい。まずは、外国人生徒を受け入れている学校の教員から実情を聞き取り、現状を把握したうえで、どのようなカリキュラムとすべきか、どういった教員を配置しなければいけないかを考えていく必要がある。

○　個別最適な学習を進めていくためには、子どもたちが関心を持って学んでいけるよう、一人一台タブレットの活用や周りの大人のサポートを通して、子どもたちが自分の興味や身近にある課題の解決と学びを結びつけられるようにすること、また、こうした学びが小中高を通して行えるようにしていくことが大切である。

○　高校入試についても、子どもたちの様々な個性・能力や学びを評価できるような入試制度への改善を図っていくことが必要である。

○　子どもの高校受験の際に開催された各高校の説明会では、小規模高校においては教員が一人の生徒に対して熱心に指導してもらえ、その結果として、子どもの望む進路の実現に向けて子どもと一緒になって取り組んでくれるという印象を持った。小規模校の今後を検討するにあたっては、地域の子どもの人数が減っていくなどの状況もあるが、小規模校の良いところを大事にしていけるよう考えていくことも必要ではないか。

○　三重県の県立高校の規模と配置の問題は、これまでの対応の結果として高校の規模が小さくなった現状についてこのままで良いのかということであり、これまでの方針を転換することを前提に、人間形成の場としての学校における生徒の学びや教育の質をどのようにしたら維持・向上させていけるのかという観点から、今後のあるべき形を考えていく必要がある。

○　今後の議論に際しては、学校の小規模化にともなって何が起こってきたのか、こどもたちの学習や人間形成にどのような影響が生じているのかといったことをふまえ、今後どのようなことが起こりうるのかをできる限り考えていくことが必要である。さらに、人的・財政的な効率性という面も考える必要がある。今後、必要なところに必要な資源を充てていくためには現状のデータを押さえておく必要がある。

○　今後、県立高校における特色ある学科・コースを考える際には、私立高校が建学の精神にもとづく特色ある教育を実践していることもふまえ、私立高校と県立高校の棲み分けを考慮して検討する必要があるのではないか。

○　県境にある高校の統合を考えるにあたっては、当該地区の日常の生活圏もふまえた上で、例えば和歌山県や奈良県の高校との統合などを考えても良いのではないか。

○　若手教員が小規模校に赴任した場合に相談できる同僚が少なく人材育成がなかなかうまくいかないといった状況は小中学校教員の例として聞くことがある。教員の苦しい状況は生徒にも影響が及ぶことから、同じ教科の教員が複数人いて互いに相談しあえ校務も分担できる、教員に過度な負担がかからないような学校規模を考えていく必要がある。

○　これからの県立高校活性化の進めていく上での基礎になるものとして教員の働き方改革を進めていくことが必要である。部活動の指導やICT化への対応などもある中で、現場の教員が疲弊しないようにする方策についてもこれからの学校のあり方とあわせて考えていかなければならない。

資料３

【第 2 回教育改革推進会議（7/20）資料】

今後の県立高校活性化の基本となる考え方について

１　これからの県立高等学校活性化の基本的な考え方について

第 1 回教育改革推進会議で各委員からいただいたご意見をふまえ、これからの県立高校活性化の柱となる「基本的な考え方」を以下のとおり整理しました。

今後、次期計画骨子案の策定に向け、「基本的な考え方」に沿った具体的な取組について検討を進めていきたいと考えています。

（１）新しい時代を生き抜いていく力の育成

ア）人生 100 年時代の中で、自立した学習者として学び続けることのできる力の育成

イ）さまざまな変化に主体的に向きあいながら、新たなことを学び、挑戦する意欲の育成

ウ）自らの生き方や働き方について考えを深め、学ぶことと自己の将来とのつながりを見出していくことのできる力の育成

エ）多様な選択肢の中から進路を決定する能力や人間関係を築く力の育成

オ）諸課題の解決に向けて自分の意見や考えを伝えあい、他者と協働してより良い社会を形成しようとする力の育成

（２）新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進

ア）全ての生徒における主体的・対話的で深い学びにつながる授業改善

イ）生徒一人ひとりの状況に応じた指導と個々の生徒に応じた学習活動の提供などの個別最適な学び

ウ）文系・理系を問わず、教科横断的な視点で物事をとらえ、実社会での課題解決に向けて創造的思考力や論理的思考を育む学び

エ）地域の方々や職業人など多様な人々と関わりながら、地域の特色や産業を題材に地域の魅力や課題を知り、自分たちに何ができるのかを主体的に考えて行動する課題解決型の学び

オ）異なる文化に対する理解や郷土への愛着、語学力やコミュニケーション能力などを高め、将来、世界にあっても地域にあっても活躍できる力の育成に向けた学び

カ）ICT をはじめとした先端技術を手段として積極的に活用しながら実社会の課題等の解決をめざし、人間ならではの考え方で新たな価値を創造できる力の育成に向けた学び

（３）多様な生徒が学べる環境の整備

義務教育段階の学び直しが必要な生徒、日本語指導が必要な生徒、特別

な支援を必要とする生徒、不登校の状況にある生徒、経済的困難な状況にある生徒等の個別の学習ニーズに応え、将来のキャリアや職業等に希望を持ち、安心して学びを続けることのできる環境の整備

（４）少子化の中での学校や学びの特色化・魅力化の推進

ア）生徒の多様な進路志望に対応するとともに、これからの時代に求められる力を備えた人材を育成できる普通科、専門学科、総合学科、定時制、通信制における学び

イ）小規模高校の総括的な検証をふまえ、全ての県立高校に通う生徒に部活動も含めた教育活動の中で社会性・人間性を育むとともに、生徒の学習ニーズに対応した幅広い科目の開設や専門性が維持できる学校の規模やあり方

ウ）生徒の学びのニーズを基本としながら、通学環境、地域における高校の役割をふまえた学校の配置

（５）特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上

ア）多様な主体との連携・協働など、学校内外の教育資源を最大限に活用した教育の推進

イ）校長のリーダーシップのもと、学校内外の人材との連携と分担を通して様々な課題に対応できる学校マネジメントの推進

ウ）各学校において育成をめざす資質・能力等に係る教育活動の指針の明確化とカリキュラム・マネジメントを通じた教育活動の改善

エ）生徒の可能性を引き出すための個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けた教職員の資質の向上

オ）中学生や保護者、中学校教員をはじめ広く県民の皆さんに向けた各学校における特色・魅力ある教育の情報発信

２　県立高校の規模と配置について

（１）平成元年から令和３年の状況

県内の中学校卒業者数は、平成元年から令和３年の間に 29,994 人から 15,777 人と約 47.4％の減となっています。同様の期間における全日制課程を置く県立高校の設置数は、62 校から 54 校へ８校の減少となっているとともに、学級数は 485 学級から 271 学級と約 44.1％の減少、１校あたりの平均学級数は 7.82 学級から 5.02 学級に減少しています。

（２）現行計画における規模と配置の考え方と小規模校の取組

① 基本的な考え方

○　高等学校においては、生徒が集団の中で多様な考えに触れ切磋琢磨することで、思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付けることが重要である。

○　生徒の希望等に応じた多様な選択科目の開設が求められており、専門性などでバランスの取れた教員配置を行うためには一定の教員数が必要である。

○　高等学校の配置については、学校の規模だけでなく、地域の担い手育成など地方創生の取組が進められていること、生徒の通学など教育機会の保障への配慮等をふまえる必要がある。

○　高等学校の規模や配置、学科のあり方については、地域の状況や学校の果たす役割、学校・学科の特色等に配慮するとともに、地域活性化協議会等の場で地域の方々の声を聴きながら総合的に判断する。

○　高校の活性化については、生徒はもとより、県民の方々が学校の特色や果たす役割等に積極的な意義を感じ、「行きたい学校」、「誇りに思う学校」となることを目指し、学校、地域、行政など全ての関係者が当事者意識を持って行動していく必要がある。

② 望ましい学校規模

○　高等学校は社会性の育成、幅広い教科・科目の開設、学校行事や部活動充実のために一定の規模が必要となること、多くの県で１学年４学級から８学級を適正規模としている中で本県の地理的な特徴や地域により状況が異なることを考慮して、望ましい学校規模を１学年３～８学級としています。

③ １学年２学級以下の学校（小規模校）における活性化の取組

１学年２学級以下の高等学校（３学級規模の学校もこれに準じる）においては、学校ごとに市町関係者や地元産業界、小中学校および高等学校の保護者や教員等で構成する協議会を設置し、学校は「地域でどのような役割を担い地域に貢献するか」という視点で、地域や産業界は「子どもたちのために学校とともに取り組む」という視点で、地域の状況、学校・学科の特色等をふまえた活性化に取り組んできました。

現行計画の最終年度である令和３年度においては、活性化の取組や生徒の進路実現の状況、入学者の状況など、その活動と成果の総括的な検証を行い、その後のあり方を検討することとしています。

（詳細は資料4「小規模校における活性化の取組」等）

（３）現行計画期間における県立高校の変化

① 全国の全日制第１学年学級数別の学級規模の状況（資料 5-1）

平成 28 年から令和３年の５年間における本県の全日制高校１校あたりの平均学級数を見ると、全国平均では 5.61 から 5.23 へ減少する中、本県においては 5.83 から 5.02 へ減少しています。

（参考）　県立高等学校（全日制）における学級数の状況（資料5-2）

② 学科・コースの新設・改編

生徒数の減少や地域のニーズ等、高校教育を取り巻く社会情勢の変化に対応するため、以下の学科・コース等の新設、改編を行いました。

	高 校	改 編 前	改 編 後
平成 29 年度	稲生高校	普通科モータースポーツ類型	普通科自動車工業類型
平成 30 年度	四日市工業高校	（新設）	ものづくり創造専攻科
平成 31 年度	伊賀白鳳高校	工芸デザイン科	建築デザイン科
	明野高校	流通科学科募集停止	農業に関する学習は生産科学科と食品科学科の教育内容に引継ぎ
令和2年度	志摩高校	普通科国際コース募集停止	国際コースの学びは普通科の類型に引継ぎ
	稲生高校	普通科情報コース募集停止	情報コースの学びは普通科の類型に引継ぎ
令和3年度	四日市農芸高校	生産科学科　食品科学科 環境造園科　園芸科学科	農業科学科　食品科学科 環境造園科

③ 普通科・普通科系専門学科

○ 平成 29 年度に９学級規模であった３校は令和３年度にはいずれも８学級となり望ましい学校規模の上限を超える学校はなくなるとともに、８学級規模であった９校のうち６校が７学級、１校が６学級となりました。

○ 望ましい学校規模の下限を下回る学校は、平成 29 年度の５校から令和３年度は８校（９校舎）となりました。

④ 職業系専門学科

○ これまで、募集定員の策定においては、職業系専門学科における小学科（工業学科の機械科、電気科など）の多様な学びを維持する観点から、複数の学級規模のある小学科を減じてきました。その結果、志願者の多い機械科を含め、多くの小学科が１学級規模となりました。こうした中、地域で唯一の職業系専門学科を設置する高校や１学年３学級以下の高校のうち職業系専門学科を設置する学校においては、定員を減じる中においても専門教育を保障し、生徒が多様な選択肢の中から進学先を選ぶことができるよう、一学級 35 人もしくは 30 人の学級編成を行いました。

⑤ 総合学科

○ 多岐にわたる進路希望を有する生徒が普通科系教科や専門系教科の中から主体的に学習内容を選択することができる総合学科は、生徒における幅広い選択を可能とする教育課程の編成が必要となります。

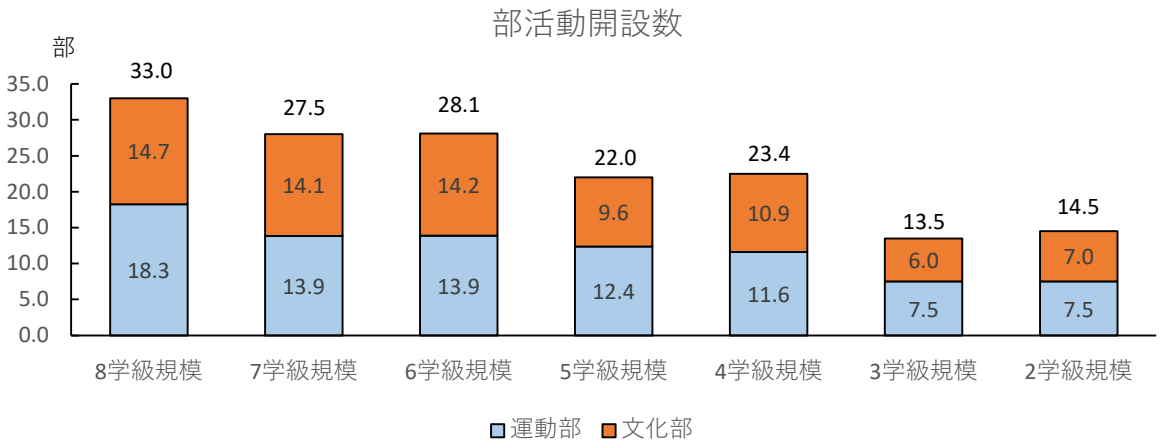
○ ７学級規模・５学級規模の総合学科における普通科系教科の科目数は平均

67 科目、専門系教科の科目数は平均 59 科目、２学級規模・１学級規模の総合学科における普通科系教科の科目数は平均 37 科目、専門系教科の科目数は平均 25 科目となっています。

⑥ 特別活動等

○ 学校の規模が小さくなることに伴い、学校行事等の特別活動や部活動において、生徒が集団の中で多様な考えに触れ切磋琢磨することで、思考力や表現力、判断力、問題解決能力などを育み、社会性や規範意識を身に付ける機会を維持することが困難となります。

○ 学級数別の部活動開設数は、６学級規模の学校では平均 28.1 部（運動部 13.9 部、文化部 14.2 部）、５学級規模の学校では平均 22.0 部（運動部 12.4 部、文化部 9.6 部）となっています。



資料４

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

小規模校における活性化の取組

現「県立高等学校活性化計画」において、人口減少や生徒数の大幅な減少が見込まれる中、地方創生、地域の担い手育成の視点を大切にしながら、地域との協働による魅力ある教育と学校づくりを進めてきました。

１学年３学級以下の小規模な高等学校においては、学校ごとに活性化協議会を設置して、市町関係者、地元産業界の地域関係者と学校の魅力向上とそれに伴う入学者の増加をめざして具体的方策を協議し、地域の状況、学校・学科の特色などをふまえ、「活性化プラン」を策定して、地域と一体となった活性化の取組を推進してきました。

【学校別協議会を設置している高校：9 校 10 校舎】

白山高校（津市）、飯南高校（松阪市）、昴学園高校（大台町）
南伊勢高校南勢校舎（南伊勢町）、南伊勢高校度会校舎（度会町）
鳥羽高校（鳥羽市）、志摩高校（志摩市）、水産高校（志摩市）
あけぼの学園高校（伊賀市）、紀南高校（御浜町）

１　活性化の取組

（１）地域と連携した教育の充実

（地域課題解決型キャリア教育モデル構築事業等：Ｒ１～３年度）

地域の小規模校を実践パイロット校に指定し、高校生が地域の課題や産業を題材に、地域住民や職業人と関わりながら探究的に学ぶ地域課題解決型キャリア教育に取り組んでいます。取組を通じて生徒が地域への愛着や誇りを高め、その地域で活躍できる将来像をイメージすることや将来にわたって学び続けることのできる能力・資質の育成もめざしています。

各パイロット校には、地域と学校をつなぐコーディネーターが巡回し、各校の学習活動の支援、地域の方々や職業人とより深く関わる学習環境の整備等をサポートしています。

各パイロット校は学校の実情に応じて育てたい生徒の力を明確にし、教育課程に位置づけて実施しています。生徒は、個人またはグループで、地域産業、観光、地域学など、テーマを設定し、

・地域のプロフェッショナルからの講義
・実際の現場において業務を体験
・市場調査・先進地調査の実施／それらに基づいた商品開発
・長期休業期間を利用した業務の体験や実験販売
・県内外の先進地において同様のテーマに取り組む高校生と交流

などの学習や活動を通じて地域の課題解決に取り組んできました。

○　特徴的なカリキュラムの設定

・　新しく設置した「地域創生アドバンスコース」での「地域探究」「地域課題研究」などの科目において、地元企業の方々や町長をはじめとする行政関係者からの講話や対話などから地域を学び、探究活動につなげています。（南伊勢高校南勢校舎）

・　文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の指定をうけて、カリキュラム開発に取り組んでいます。「産業社会と人間（１年生）」で、地域産業や観光資源のフィールドワーク等を通じて地域を知り、課題を見つけ解決策を考察し、「キャリアデザイン（２年生）」で、地元企業でのインターンシップ等を通じて、過疎地域での企業経営等の工夫や努力、展望等について学び、３年生の「いいなんゼミ」では、さらに研究を深めてレポートをまとめ、「いいなんゼミ発表会」において地域の方々等に学習の成果を発信します。（飯南高校）

・　志摩市や地域の協力を得ながら、「総合的な探究の時間」を活用し、生徒全員が３年間にわたってフィールドワークやインターンシップ等で地域を知り、地域で体験し、地域課題の解決策について考える「志摩学」での探究活動に取り組んでいます。（志摩高校）

・　学校設定科目「鳥羽学」では、毎時間鳥羽市のサポートを得ながら、海女文化の学習・魅力発信や中心市街地活性化等について考える授業を展開しています。（鳥羽高校）

・　学校設定科目「地域産業とみかん」では、地域の協力を得ながら、地域の特産品みかんの栽培から流通までの過程や、関連する産業について、体験活動を通じて体系的に学ぶとともに、課題解決力やコミュニケーション力を育む探究的な学びに取り組んでいます。（紀南高校）

・　カリキュラムの設置時に比べて取組に魅力を感じる生徒が減ってきたことなどから、選択する生徒が少なくなる事例もあり、課題となっています。

○　他校や他県の先進校との交流等

地域の特産物を利用した他県の先進的な取組をしている学校を訪問し、意見交換など生徒同士の交流をしたり（紀南高校）、三重テラスにおいて、生徒が開発に取り組んだ新商品のＰＲ活動や販売実習を行ったりしました（あけぼの学園高校）。コロナ禍の中で、オンラインも活用し、先進的な地域活性化取組を行っている他県の高校と交流・協働してＰＲポスターを作成するなどＪＲ名松線の活性化をめざす取組もはじめています（白山高校）。

また、夏季休業中に開催されている全国高校生 SBP 交流フェア（Social Business Project：伊勢市で開催）に生徒が参加し、地域資源を生かした課題解決型のプロジェクト学習に意欲的に取り組む全国の高校生と交流しました。

※ 参加校：南伊勢高校南勢校舎、同高度会校舎、飯南高校、白山高校、あけぼの学園高校、紀南高校、昴学園高校

○　各地域での成果発表会の開催

各校は、年度末に地域の方々を招いて成果発表会を開催し、学習の成果を発信・ＰＲをするとともに、次年度の取組の改善につなげています。コロナ禍の中、より多くの地域の方々に参加いただくことが課題となっています。

（２）課外活動

○　授業等で地域学習や地域課題の解決に興味・関心を持った生徒たちが、課外活動として地域に貢献する活動をはじめており、地域でのボランティア活動への参加や地域イベントで自分たちが作成したプロジェクションマッピングの上映など活動は広がりを見せています。(南伊勢高校南勢校舎、同高度会校舎、昴学園高校、紀南高校等)

○　地域研究サークル「とばっこくらぶ」では、鳥羽市観光課や定期船課と連携した地域活性化の取組を行ったり、観光甲子園全国大会での入賞や他府県高校との交流等の活動を続けています。(鳥羽高校)

○　「道の駅コラボプロジェクト」として連携中学校と一緒に活動したり、地域を盛り上げることを目的に活動している学校のサークル活動(應援團活動)において地域の企業とコラボレーションした「木の手帳」の開発に取り組んだり、地域の大きな課題である空き家問題の解決に取り組んだりするなど、地域のさまざまな団体と連携した活動を実施しています。(飯南高校)

（３）高校生地域創造サミットの開催

高校生が地方創生や地域活性化の重要性について理解し、地域のことを主体的に考え行動する意欲や地域とともに課題解決に取り組む姿勢を身につけられるよう、平成 29 年度から高校生地域創造サミットを開催しています。サミットでは、高校生が地域の課題を題材として、フィールドワークや他県・他地域の高校生とのディスカッションを行い、高校生ならではの発想による「地域を活かした」解決策を多様な考えに触れながら検討します。

これまでに、南伊勢町（H29)、鳥羽市（H30)、紀北町（R1）で開催し、県内の県立や私立高校および県外高校生に加え、大学生サポーター等も参加しました。今年度は、松阪市飯南飯高地域での開催を予定しています（令和 2 年度は新型コロナウィルス感染症拡大のため中止)。

（４）市町からの小規模校支援策

各学校が活性化に取り組む中、地元の市町から小規模校への様々な支援が実施されています。

町内から南勢校舎に通学する生徒への町内バスの無料化や下校バスの増便、南勢校舎から大学等への進学者への給付奨学金の設立（南伊勢町：南伊勢高校南勢校舎)、海外研修参加者への経済的支援等（志摩市：志摩高校、水産高校)、内閣府事業「高校生の地域留学推進のための高校魅力化支援事業」への参画、県外生や地域留学生のための保証人の確保等（大台町：昴学園高校)、

学校活性化に向けたコンソーシアムの結成やフィールドワークでの支援等（松阪市：飯南高校）、「鳥羽学」の授業支援等（鳥羽市：鳥羽高校）、通学の利便性向上のためのコミュニティバス整備（津市：白山高校）など、各地域において小規模校の学習活動等を支援する体制が構築されました。

（５）学校の情報発信・ＰＲ活動

全ての小規模校において、学校の活性化の取り組みを地域住民、地域の小中学生やその保護者へＰＲするために、地域の広報誌等への定期的な記事掲載、地域への学校通信やコミュニティ通信等の配布、学校ホームページの更新やＳＮＳでの情報発信、生徒や教員による小学校への出前講座や交流活動等、さまざまな広報活動に取り組みました。

地域における学校への理解は進み、評価は上がってきたものの、入学者の増加にはつながりにくい状況です。

（６）県外からの生徒募集活動

○　県外からの入学者の増加をめざして、全ての小規模校において「保護者の転住を伴わない県外からの志願者の受入制度」を設けましたが、県外からの入学につながったのは以下の学校になります。

学　校　名	入学者数		
	平成 31 年度	令和２年度	令和３年度
白山高校	6	6	2
昴学園高校	－	3	9
あけぼの学園高校	1	－	－
紀南高校	1	5	2

○　地域の小規模校で学ぶ全国で魅力を紹介するイベント「地域みらい留学フェスタ」（一般社団法人 地域・教育魅力化プラットフォーム主催）に、昴学園高等学校（令和元年度～）と飯南高等学校（令和２年度～）が参画し、県外からの生徒募集活動を行いました。

※「地域みらい留学」を活用した県外からの入学生
　昴学園高校：令和２年度入学生３人、令和３年度入学生９人
　飯南高校：令和３年度入学生０人

○　全国的な動きの中、より魅力的な教育活動を進める必要があるとともに、下宿などのハード面の整備に課題があります。

２　生徒の進路実現の状況

（１）基礎学力の定着に対する取組・状況

○　基礎学力の定着に向けて、国･英等の授業での習熟度別の丁寧な学習指導、ＳＨＲ等での学習タイム、基礎力診断テスト結果に応じた課外授業での個々への丁寧な指導等により、特に基礎・基本養成レベル（Ｄ３）の生徒を中心に多くの学校で基礎学力診断テストの結果が向上しました（志摩高校、あけ

ぼの学園高校、昴学園高校、南伊勢高校度会校舎、白山高校等)。また、水産高校ではＡＩドリルを活用し、生徒の学力や速度に応じた個別最適化学習を数学と英語の授業で導入しました。

○　専門性を高めて知識や技術を身につけるとともに生徒の自己肯定感を高め、希望する進路が実現できるよう､資格取得に向けた学習活動を進めています。（水産高校、あけぼの学園高校）

（２）就職支援に対する取組・状況

○　地域学習やインターンシップ等の取組により、生徒の地域や地域産業等への理解は進みましたが、多くの学校で地元企業への就職状況等に目立った変化は見られませんでした。

○　南伊勢高校南勢校舎では、町の支援により就職活動支援員が配置され、就職者のうち町内企業への就職者の割合は増えています。水産高校では、全就職者に占める水産・海洋分野への就職者の割合は上昇傾向にあり、全寮制の昴学園高校では、地元大台町出身者以外の生徒で、卒業後に大台町内の企業に就職する事例もみられました。

（３）進学支援に対する取組・状況

○　地域の協力による看護体験実習や医療看護講座等により、毎年一定数、医療分野の上級学校への進学者がいます。また、進学グループの設置により校内で進学意識が高まり、地元の小学校教員を目指す生徒が地域推薦入試にて三重大学教育学部に進学しました。(志摩高校)

○　町の支援による進学課外授業や大学進学給付型奨学金の補助制度を活用することで大学への進学者が増加しました。その中には地元の教員を目指して地域推薦入試にて三重大学教育学部に進学した生徒もいました。(南伊勢高校南勢校舎)

○　「いいなんゼミ」で生徒が研究した地域での学び　テーマをより深く学ぶために大学等へ進学する実例が増えています。(飯南高校)

・空き家片付けプロジェクトに取り組んだ生徒が、地域の活性化を学ぶために地域創生学部の大学へ進学
・理想の介護施設を研究した生徒が、生活科学科の短大へ進学
・児童分野に関心がある生徒が「箱庭療法」を研究し、社会福祉学部の大学へ進学

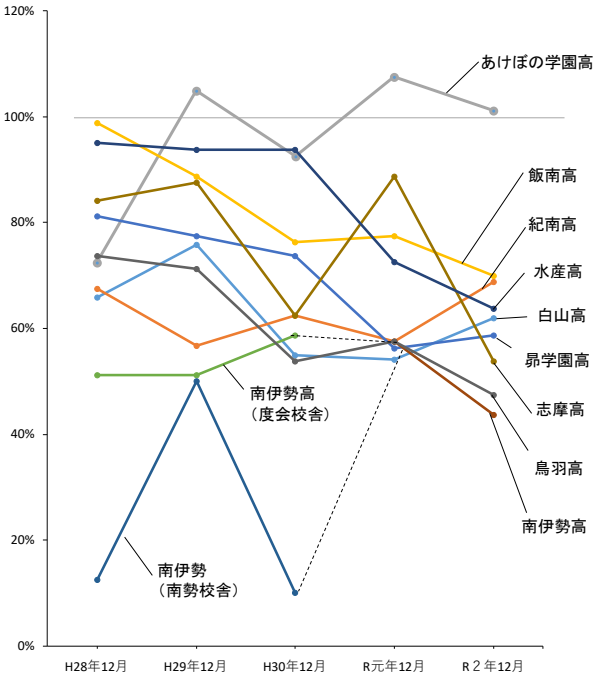
３　入学者の状況

○　県内の全ての中学３年生に対して毎年 12 月に実施している進路希望調査（12 月調査）の結果を見ると、希望者が定員を上回っているのは１校のみにとどまり、他の小規模校への進学希望者は減少傾向にあります。

○　入学者の状況（令和３年度）を見ると、定員充足率が 100%を超えているのは１校のみとなっています。

小規模校の進路希望状況（１２月調査）の推移（最近５ヶ年）

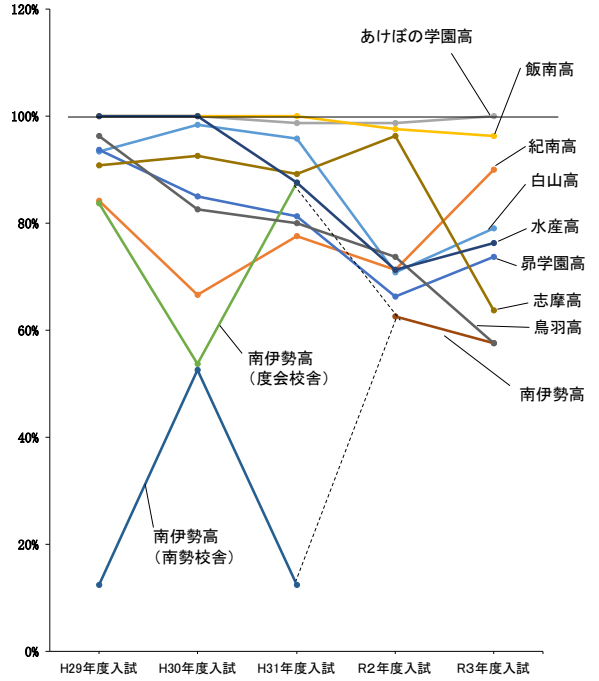
充足率（希望者数／入学定員）の推移グラフ　　県内中学生のみ



		H28年12月	H29年12月	H30年12月	R元年12月	R2年12月
白山高	充足率	65.8%	75.8%	55.0%	54.2%	61.9%
	希望者数／定員	79 ／ 120	91 ／ 120	66 ／ 120	65 ／ 120	65 ／ 105
あけぼの学園高	充足率	72.5%	105.0%	92.5%	107.5%	101.3%
	希望者数／定員	58 ／ 80	84 ／ 80	74 ／ 80	86 ／ 80	81 ／ 80
飯南高	充足率	98.8%	88.8%	76.3%	77.5%	70.0%
	希望者数／定員	79 ／ 80	71 ／ 80	61 ／ 80	62 ／ 80	56 ／ 80
昴学園高	充足率	81.3%	77.5%	73.8%	56.3%	58.8%
	希望者数／定員	65 ／ 80	62 ／ 80	59 ／ 80	45 ／ 80	47 ／ 80
南伊勢高（度会校舎）	充足率	51.3%	51.3%	58.8%		
	希望者数／定員	41 ／ 80	41 ／ 80	47 ／ 80		
南伊勢高（南勢校舎）	充足率	12.5%	50.0%	10.0%		
	希望者数／定員	5 ／ 40	20 ／ 40	4 ／ 40		
南伊勢高	充足率				57.5%	43.8%
	希望者数／定員				46 ／ 80	35 ／ 80
鳥羽高	充足率	73.8%	71.3%	53.8%	57.5%	47.5%
	希望者数／定員	59 ／ 80	57 ／ 80	43 ／ 80	46 ／ 80	38 ／ 80
志摩高	充足率	84.2%	87.5%	62.5%	88.8%	53.8%
	希望者数／定員	101 ／ 120	105 ／ 120	75 ／ 120	71 ／ 80	43 ／ 80
水産高	充足率	95.0%	93.8%	93.8%	72.5%	63.8%
	希望者数／定員	76 ／ 80	75 ／ 80	75 ／ 80	58 ／ 80	51 ／ 80
紀南高	充足率	67.5%	56.7%	62.5%	57.5%	68.8%
	希望者数／定員	81 ／ 120	68 ／ 120	50 ／ 80	46 ／ 80	55 ／ 80

小規模校の入学者状況の推移（最近５ヶ年）

充足率（入学者数／入学定員）の推移グラフ



		H29年度入試	H30年度入試	H31年度入試	R2年度入試	R3年度入試
白山高	充足率	93.3%	98.3%	95.8%	70.8%	79.0%
	入学者数／定員	112 ／ 120	118 ／ 120	115 ／ 120	85 ／ 120	83 ／ 105
あけぼの学園高	充足率	100.0%	100.0%	98.8%	98.8%	100.0%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	79 ／ 80	79 ／ 80	80 ／ 80
飯南高	充足率	100.0%	100.0%	100.0%	97.5%	96.3%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	80 ／ 80	78 ／ 80	77 ／ 80
昴学園高	充足率	93.8%	85.0%	81.3%	66.3%	73.8%
	入学者数／定員	75 ／ 80	68 ／ 80	65 ／ 80	53 ／ 80	59 ／ 80
南伊勢高（度会校舎）	充足率	83.8%	53.8%	87.5%		
	入学者数／定員	67 ／ 80	43 ／ 80	70 ／ 80		
南伊勢高（南勢校舎）	充足率	12.5%	52.5%	12.5%		
	入学者数／定員	5 ／ 40	21 ／ 40	5 ／ 40		
南伊勢高	充足率				62.5%	57.5%
	入学者数／定員				50 ／ 80	45 ／ 80
鳥羽高	充足率	96.3%	82.5%	80.0%	73.8%	57.5%
	入学者数／定員	77 ／ 80	66 ／ 80	64 ／ 80	59 ／ 80	46 ／ 80
志摩高	充足率	90.8%	92.5%	89.2%	96.3%	63.8%
	入学者数／定員	109 ／ 120	111 ／ 120	107 ／ 120	77 ／ 80	51 ／ 80
水産高	充足率	100.0%	100.0%	87.5%	71.3%	76.3%
	入学者数／定員	80 ／ 80	80 ／ 80	70 ／ 80	57 ／ 80	61 ／ 80
紀南高	充足率	84.2%	66.7%	77.5%	71.3%	90.0%
	入学者数／定員	101 ／ 120	80 ／ 120	62 ／ 80	57 ／ 80	72 ／ 80

４　小規模校活性化の総括的な検証

現計画の最終年度である令和３年度に小規模校の活性化に係る総括的な検証を行い、その後のあり方を検討することとしています。

総括的な検証は、活性化の取組状況、生徒の進路実現状況、入学者の状況の３つの項目について、現在、学校別活性化協議会において進めています。

○　各項目についての検証をより効果的に行うとともに、より多くの地域の学校関係者の方々に参画いただけるようにするため、学校別活性化協議会を２回に分けて開催し、検証を進めています。現時点の各協議会における検証内容の概観は次のとおりです。

（活性化の取組について）

・　各地域の支援を得ながら、地域や産業の担い手育成や若者の地域への定着につながるよう、地域を学びの場とした課題解決型学習に取り組むなど、地域と高校の連携・協働体制を構築することができ、生徒の学習環境の向上に繋がっている。

・　広報誌への記事掲載、ＨＰやＳＮＳでの情報発信、小学校への出前講座や交流活動等、さまざまな広報活動に加え、生徒による地域でのボランティア活動や地域イベント等での地域活性化に貢献する課外活動により、地域における小規模校への理解は少しずつ進んでいる。

・　様々な取組の中には、生徒のニーズと必ずしもマッチしないものもあり、継続的な取組とするための改善が必要な取組もある。

（生徒の進路実現について）

・　多くの学校では継続的な学び直しの取組による基礎学力の定着等により生徒の進路実現につなげているものの、地元企業への就職状況等に目立った変化はなかった。

・　小規模校では、希望者が少ないために大学進学のための専門性が高い授業が開設しにくく、また、教員数が少ないために専門性が高い教員を配置しにくい状況にある。そのような状況下でも生徒の個別の希望に対応する補習等によって、自らの将来に対する目的意識を持ちながら大学へ進学する生徒の進路が実現された。

（入学者の状況について）

・　地域の中学校卒業者の大幅な減少の影響もあり、入学者の状況については、活性化に取り組む前よりも厳しい状況となっている。令和３年度に定員を満たしている小規模校は１校のみであり、活性化期間前の平成29 年度と令和３年度を比較すると、平成 29 年度の小規模校の総募集定員 880 人に対して総入学者 786 人で募集定員数に対する入学者数の充足率は約89.3%であったが、令和３年度では定員745人に対して入学者574人で充足率は約 77.0%に低下しており、ほとんどの地域において、活性化の取組が志願者の増加にはつながっていない状況となっている。

・　また、各地域の地元中学校からの進学率の推移をみると、広範囲から生徒が集まる昴学園高校、白山高校、水産高校、鳥羽高校では進学率は多少下降傾向である。通学地域が限られる地域の高校は、あけぼの学園高校は令和３年度唯一欠員がない小規模校で、伊賀市内からの進学率も上昇傾向であり、飯南高校も地元からの進学率は上昇傾向にある。一方、志摩高校は志摩市内からの進学率は大きく下降し、南伊勢高校南勢校舎、度会校舎は年度により大きく変動しており、上昇傾向とは言えない。また、紀南高校も地元からの進学率は下降傾向にある。

・　県外生の入学をめざして、全ての小規模校において「保護者の転住を伴わない県外からの志願者の受入制度」を設けたが、この制度を含めて県外からの入学が実現したのは、白山高校、水産高校、紀南高校、昴学園高校、あけぼの学園高校である。県外生の募集に関しては、下宿等の環境整備、市町の支援状況等の受け入れ態勢が課題である。

（その他　学校の状況について）

・　小規模校では教員数は少ないが、生徒数も少ないこともあって、きめ細かな指導や個々の生徒にあった丁寧な対応ができる。一方で、教科指導では専門性が限られて開設できない科目があったり、部活動の開設数も１校平均 13.5～14.5 部と少なく､団体種目の活動を多く設けることが難しくなったりするなど、生徒にとって高校の魅力が低下する原因の一つになっている。

　また、学級減に伴って教員配置数が減少する中、他校では複数で担当する校務分掌を一人の教員が担当したり、複数の係を兼務したりするなど、教員一人が担う業務の種類が多くなっている。また、一教科の担当教員が一人となるなど、特に若い教員にとっては研修機会の確保が十分に取れない状況となっている。

　今後さらなる少子化に伴って学校の小規模化が進むと、生徒の希望に沿った選択科目の設置や幅広い部活動ができないなど、現在の教育内容を維持することは困難となることが想定される。

【小規模校（9 校 10 校舎）全体の入学者の状況】

	H28 年度	H29 年度	H30 年度	H31 年度	R2 年度	R3 年度
総募集定員数(人)	880	880	880	840	760	745
総入学者数(人)	782	786	747	717	595	574
総欠員数(人)	98	94	133	123	165	171
充足率	88.9%	89.3%	84.9%	85.4%	78.3%	77.0%

【小規模校　地元中学からの進学と県外からの入学生の状況】

入学年度	白山高校(地元中学:一志、白山、美杉、嬉野)			白山高校県外入学生
	4中学出身者		4中学卒業者数	
H29	26	6.6%	393	4
H30	27	6.7%	405	2
H31	15	4.0%	376	7
R2	19	4.7%	406	8
R3	22	5.7%	383	2

入学年度	飯南高校(地元中学:飯南、飯高)			飯南高校県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	20	28.2%	71	0
H30	15	25.9%	58	0
H31	16	29.1%	55	0
R2	19	33.9%	56	0
R3	17	31.5%	54	0

入学年度	昴学園高校(地元中学:大台、宮川)			昴学園高校県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	10	13.2%	76	0
H30	9	10.8%	83	0
H31	11	16.2%	68	0
R2	10	13.9%	72	3
R3	8	13.3%	60	9

入学年度	南伊勢高南勢(地元中学:南勢、南島)			南勢校舎県外入学生
	2中学出身者		2中学卒業者数	
H29	5	5.6%	89	0
H30	20	25.3%	79	0
H31	4	6.3%	64	0
R2	13	25.5%	51	0
R3	7	11.9%	59	0

入学年度	南伊勢高度会(地元中学:度会)			度会校舎県外入学生
	度会中学出身者		度会中学卒業者数	
H29	19	24.7%	77	0
H30	6	7.6%	79	0
H31	21	24.4%	86	0
R2	9	12.9%	70	0
R3	8	14.5%	55	0

入学年度	鳥羽高校(地元中学:鳥羽市内中学)			鳥羽高校県外入学生
	鳥羽市内中学出身者		鳥羽市内中学卒業者数	
H29	23	12.8%	180	0
H30	25	13.8%	181	0
H31	9	6.4%	140	0
R2	18	13.6%	132	1
R3	14	9.4%	149	0

入学年度	志摩高校(地元中学:志摩市内中学)			志摩高校県外入学生
	志摩市内中学出身者		志摩市内中学卒業者数	
H29	99	22.0%	449	0
H30	98	22.7%	432	0
H31	90	22.5%	400	0
R2	72	18.5%	389	0
R3	47	15.0%	313	0

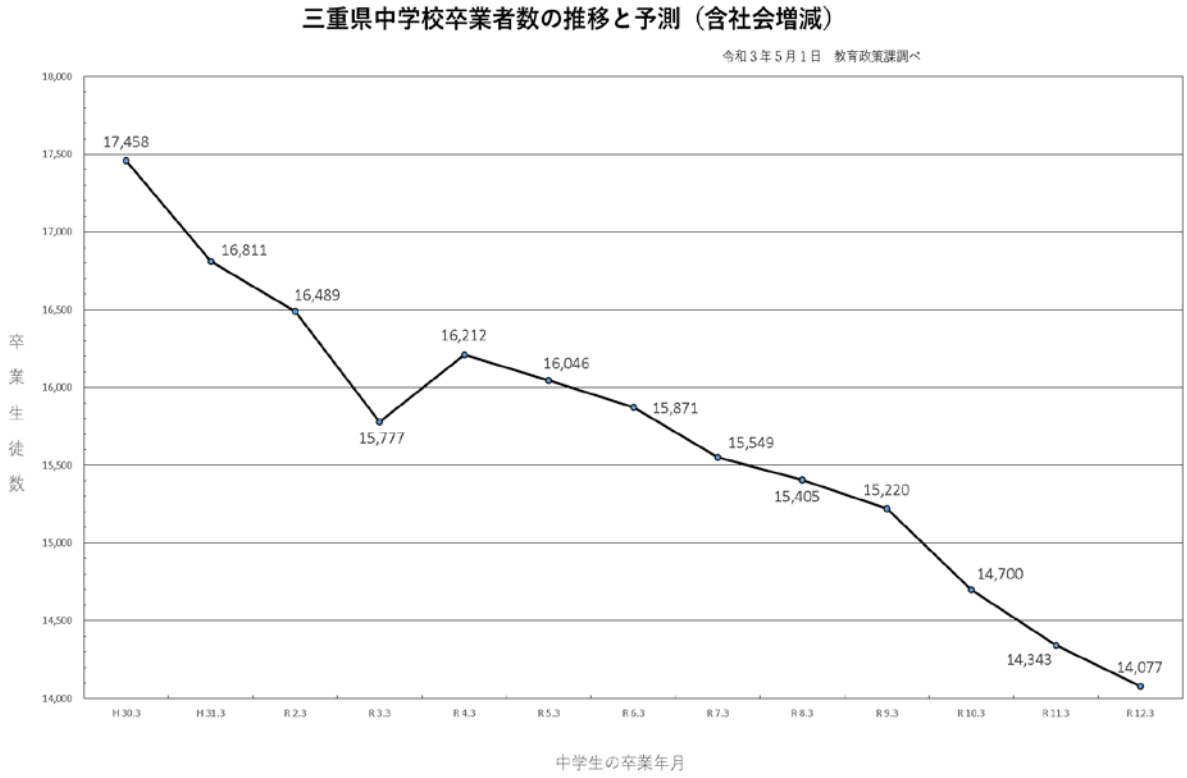
入学年度	水産高校(地元中学:志摩市内中学)			水産高校県外入学生
	志摩市内中学出身者		志摩市内中学卒業者数	
H29	67	14.9%	449	3
H30	54	12.5%	432	4
H31	48	12.0%	400	4
R2	40	10.3%	389	2
R3	37	11.8%	313	8

入学年度	あけぼの学園高校(地元中学:伊賀市内中学)			あけぼの学園高校県外入学生
	伊賀市内中学出身者		伊賀市内中学卒業者数	
H29	31	4.1%	761	0
H30	36	4.8%	748	0
H31	41	5.5%	743	1
R2	50	6.8%	735	1
R3	44	6.1%	724	0

入学年度	紀南高校(地元中学:南牟婁郡内中学)			紀南高校県外入学生
	南牟婁郡内中学出身者		南牟婁郡内中学卒業者数	
H29	68	32.7%	208	5
H30	56	30.1%	186	2
H31	34	19.8%	172	1
R2	35	24.5%	143	5
R3	42	26.8%	157	2

○　それぞれの学校別活性化協議会の検証結果については、今年度８月から９月にかけて開催予定の地域別活性化協議会（伊賀、伊勢志摩、紀南）において共有し、そこでの議論もふまえながら地域における今後の高校のあり方について検討を進めていきます。

○　また、地域協議会や県立高等学校みらいのあり方検討委員会でも意見が出されているように、中学校卒業予定者数が今後さらに減少していく中で、それぞれの小規模校がこれまで地道に取り組み根付かせてきた、地域を題材とした探究的な学習活動をいかにして継承・発展させていくのかという点についても、今後の高校のあり方とあわせて検討していく必要があります。



【三重県　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）】　　令和３年５月１日　教育政策課調べ

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
桑名	卒業者数	2,021	2,048	1,986	1,941	1,968	1,983	1,951	1,979	1,918	1,920	1,868	1,844	1,808
	前年度対比		27	-62	-45	27	15	-32	28	-61	2	-52	-24	-36
	R3.3対比					27	42	10	38	-23	-21	-73	-97	-133
四日市	卒業者数	3,844	3,637	3,578	3,418	3,636	3,442	3,433	3,418	3,503	3,373	3,335	3,248	3,110
	前年度対比		-207	-59	-160	218	-194	-9	-15	85	-130	-38	-87	-138
	R3.3対比					218	24	15	0	85	-45	-83	-170	-308
小計	卒業者数	5,865	5,685	5,564	5,359	5,604	5,425	5,384	5,397	5,421	5,293	5,203	5,092	4,918
	前年度対比		-180	-121	-205	245	-179	-41	13	24	-128	-90	-111	-174
	R3.3対比					245	66	25	38	62	-66	-156	-267	-441
鈴鹿	卒業者数	2,553	2,458	2,416	2,259	2,413	2,219	2,427	2,253	2,221	2,207	2,071	2,103	2,087
	前年度対比		-95	-42	-157	154	-194	208	-174	-32	-14	-136	32	-16
	R3.3対比					154	-40	168	-6	-38	-52	-188	-156	-172
津	卒業者数	2,684	2,614	2,686	2,586	2,516	2,666	2,615	2,496	2,503	2,443	2,399	2,360	2,314
	前年度対比		-70	72	-100	-70	150	-51	-119	7	-60	-44	-39	-46
	R3.3対比					-70	80	29	-90	-83	-143	-187	-226	-272
伊賀	卒業者数	1,549	1,503	1,449	1,429	1,440	1,398	1,385	1,356	1,315	1,332	1,285	1,237	1,192
	前年度対比		-46	-54	-20	11	-42	-13	-29	-41	17	-47	-48	-45
	R3.3対比					11	-31	-44	-73	-114	-97	-144	-192	-237
小計	卒業者数	6,786	6,575	6,551	6,274	6,369	6,283	6,427	6,105	6,039	5,982	5,755	5,700	5,593
	前年度対比		-211	-24	-277	95	-86	144	-322	-66	-57	-227	-55	-107
	R3.3対比					95	9	153	-169	-235	-292	-519	-574	-681
松阪	卒業者数	2,003	1,931	1,924	1,801	1,842	1,931	1,847	1,856	1,791	1,772	1,742	1,560	1,607
	前年度対比		-72	-7	-123	41	89	-84	9	-65	-19	-30	-182	47
	R3.3対比					41	130	46	55	-10	-29	-59	-241	-194
伊勢	卒業者数	2,192	2,079	1,966	1,827	1,879	1,927	1,737	1,768	1,723	1,737	1,598	1,563	1,612
	前年度対比		-113	-113	-139	52	48	-190	31	-45	14	-139	-35	49
	R3.3対比					52	100	-90	-59	-104	-90	-229	-264	-215
尾鷲	卒業者数	281	237	228	242	248	218	212	192	192	203	162	170	143
	前年度対比		-44	-9	14	6	-30	-6	-20	0	11	-41	8	-27
	R3.3対比					6	-24	-30	-50	-50	-39	-80	-72	-99
熊野	卒業者数	331	304	256	274	270	262	264	231	239	233	240	258	204
	前年度対比		-27	-48	18	-4	-8	2	-33	8	-6	7	18	-54
	R3.3対比					-4	-12	-10	-43	-35	-41	-34	-16	-70
小計	卒業者数	4,807	4,551	4,374	4,144	4,239	4,338	4,060	4,047	3,945	3,945	3,742	3,551	3,566
	前年度対比		-256	-177	-230	95	99	-278	-13	-102	0	-203	-191	15
	R3.3対比					95	194	-84	-97	-199	-199	-402	-593	-578
県内合計	卒業者数	17,458	16,811	16,489	15,777	16,212	16,046	15,871	15,549	15,405	15,220	14,700	14,343	14,077
	前年度対比		-647	-322	-712	435	-166	-175	-322	-144	-185	-520	-357	-266
	R3.3対比					435	269	94	-228	-372	-557	-1,077	-1,434	-1,700

全国の全日制第1学年学級数別の学級規模の状況　【第２回教育改革推進会議(7/20)資料】

資料5-1

都道府県	学校規模（学級数）　※上段が令和3年度、下段が平成28年度														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11～	全学校数	全クラス数	1校平均	
北海道	44	31	21	27	19	18	18	11				189	694	3.67	▲ 0.23
	43	34	14	36	14	21	14	22	1			199	776	3.90	
青森	2	5	6	5	8	17						43	192	4.47	0.10
	2	11	2	12	7	12	6					52	227	4.37	
岩手	9	14	6	11	11	7	4					62	224	3.61	▲ 0.44
	4	13	10	6	14	11	5					63	255	4.05	
宮城		4	11	10	8	15	11	4	1			64	329	5.14	▲ 0.14
		5	11	6	10	12	16	4		1		65	343	5.28	
秋田		6	7	7	9	12	1					42	185	4.40	▲ 0.07
		6	8	7	8	15	1					45	201	4.47	
山形	3	4	10	5	12	6		1				41	165	4.02	▲ 0.37
	1	3	10	6	14	2	4		1			41	180	4.39	
福島	6	16	5	15	13	15	7					77	317	4.12	▲ 0.47
		22	6	9	12	13	13	5				80	367	4.59	
茨城		3	15	14	13	26	10	8				89	462	5.19	▲ 0.22
		1	10	19	17	22	14	10				93	503	5.41	
栃木		1	3	25	14	8	5	3				59	288	4.88	▲ 0.41
				16	22	12	6	3				59	312	5.29	
群馬		9	6	13	13	8	8	1				58	265	4.57	▲ 0.30
		9	7	12	10	10	7	7				62	302	4.87	
埼玉		3	4	17	25	18	19	24	23		1	134	870	6.49	▲ 0.50
		1	3	7	14	36	19	23	26	4	1	134	936	6.99	
千葉		1	11	23	12	20	14	34	3		1	119	722	6.07	▲ 0.51
		1	8	18	11	21	11	29	21		1	121	796	6.58	
東京	3	2	4	18	48	38	33	29	2			177	1,040	5.88	▲ 0.43
	3	2	1	11	27	57	28	44	5			178	1,124	6.31	
神奈川				7	14	26	33	29	19	6		134	948	7.07	▲ 0.21
				5	6	28	46	27	19	10		141	1,027	7.28	
新潟	6	15	12	17	12	5	5	4	3			79	324	4.10	▲ 0.76
	1	12	8	20	11	7	10	7	3	1		80	389	4.86	
富山			4	11	7	5	5	1				33	164	4.97	0.08
			7	11	6	6	6	1				37	181	4.89	
石川		7	8	9	2	4	2	3	1	2		38	175	4.61	▲ 0.55
		7	3	6	9	2	3	3	3	2		38	196	5.16	
福井			1	7	4	2	2	7	1			24	142	5.92	▲ 0.00
				7	8	2	2	3	4			26	154	5.92	
山梨			1	4	6	8	4	2				25	141	5.64	▲ 0.14
			3	2	5	8	6	3				27	156	5.78	
長野		12	11	11	18	11	9	3				75	344	4.59	▲ 0.48
		4	14	12	11	18	12	5				76	385	5.07	
岐阜		2	7	12	12	13	5	4	6			61	332	5.44	▲ 0.43
		1	7	11	8	11	9	7	4	3		61	358	5.87	
静岡		6	6	9	29	9	15	6	3			83	445	5.36	▲ 0.63
	1	2	4	9	15	24	12	11	5	2		85	509	5.99	
愛知		7	5	9	16	36	20	31	18	3		145	941	6.49	▲ 0.52
		3	4	7	12	32	22	29	30	7		146	1,024	7.01	
三重	2	7	2	8	13	7	10	5				54	271	5.02	▲ 0.81
	1	6	3	3	6	14	5	12	4			54	315	5.83	
滋賀		1	10	5	9	8	4	3	4			44	233	5.30	▲ 0.61
		1	7	5	3	13	5	5	2	2	1	44	260	5.91	
京都			6	4	8	8	11	3	4			44	259	5.89	▲ 0.33
			7	1	9	7	9	6	7			46	286	6.22	
大阪					20	61	24	18	6			129	832	6.45	▲ 1.09
		1			6	30	29	34	19	16		135	1,018	7.54	
兵庫	5	11	10	12	29	25	22	11	1			126	651	5.17	▲ 0.71
	4	6	11	5	19	27	26	22	7	0		127	747	5.88	
奈良		2	1		7	4	3	4	7			28	182	6.50	0.00
		1	4	1	2	9	2	7	4	2		32	208	6.50	
和歌山			4	6	7	4	6		1	1		29	156	5.38	▲ 0.69
			2	5	5	7	3	5		1	1	29	176	6.07	
鳥取		1	5	6	5	1	4					22	100	4.55	▲ 0.22
		1	5	4	7		3	2				22	105	4.77	
島根	1	8	7	10	3	2	2	1				34	127	3.74	▲ 0.11
	1	8	7	9	2	3	3	1				34	131	3.85	
岡山			10	10	6	7	6	11	1			51	281	5.51	▲ 0.47
			1	16	8	3	8	11	4			51	305	5.98	
広島	13	13	4	12	11	11	10	4				78	322	4.13	▲ 0.40
	10	11	5	9	14	11	10	8				78	353	4.53	
山口		2	12	17	4	7	3	1				46	199	4.33	0.09
		5	10	20	4	4	4	2				49	208	4.24	
徳島		2	1	5	8	3	7				1	27	145	5.37	▲ 0.06
		5	1	3	6	6	3	5			1	30	163	5.43	
香川			2	7	6	4	7	3				29	161	5.55	▲ 0.03
			3	8	4	5	6	5				31	173	5.58	
愛媛	1	5	10	9	4	4	6	3	5			47	232	4.94	0.19
	1	10	10	8	4	3	7	4	5			52	247	4.75	
高知		12	2	5	3	3	4	1				30	119	3.97	▲ 0.13
		10	2	8	3	3	4	1				31	127	4.10	
福岡			5	27	18	11	9	6	8	6	1	91	533	5.86	▲ 0.43
			1	20	23	13	8	11	7	8	2	93	585	6.29	
佐賀		4	8	7	4	8	1					32	135	4.22	▲ 0.25
		2	10	7	6	8	3					36	161	4.47	
長崎	6	9	11	8	3	9	5	3				54	217	4.02	▲ 0.26
	4	9	9	10	4	7	8	3				54	231	4.28	
熊本		2	5	7	8	7	8	1	5	4		47	278	5.91	▲ 0.07
		2	5	5	10	7	9	1	5	4		48	287	5.98	
大分	2	2	1	12	11	7	1	2				38	177	4.66	▲ 0.51
		2	1	11	8	6	5	3				36	186	5.17	
宮崎	1		6	5	7	7	5	1	3			35	186	5.31	0.07
	1		7	7	6	8	4	1		3		37	194	5.24	
鹿児島		17	16	7	2	5	3	10	1			61	260	4.26	▲ 0.20
		12	16	11	3	5	2	11	1			61	272	4.46	
沖縄		2	5	5	9	10	7	11	7	2		58	364	6.28	▲ 0.08
	1	3	4	4	9	9	9	9	5	5	1	59	375	6.36	
計	104	248	307	480	530	550	398	307	133	24	4	3,085	16,129	**5.23**	▲ 0.38
	78	231	271	435	442	590	447	412	192	71	8	3,177	17,812	**5.61**	

※ 本県の令和3年度の数値について、校舎制を採用している南伊勢高校は、南勢校舎と度会校舎をそれぞれ1学級規模として計上。
※ 本県の平成28年度の数値について、校舎制を採用している南伊勢高校は、南勢校舎を1学級規模、度会校舎を2学級規模として計上。
※「全国公立高等学校第1学年定員等状況（学級数別学校数：本校））」（富山県教育委員会まとめ）を基礎に加工

資料 5-2

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

県立高等学校（全日制）における学級数の状況

【平成 29 年度入学生】

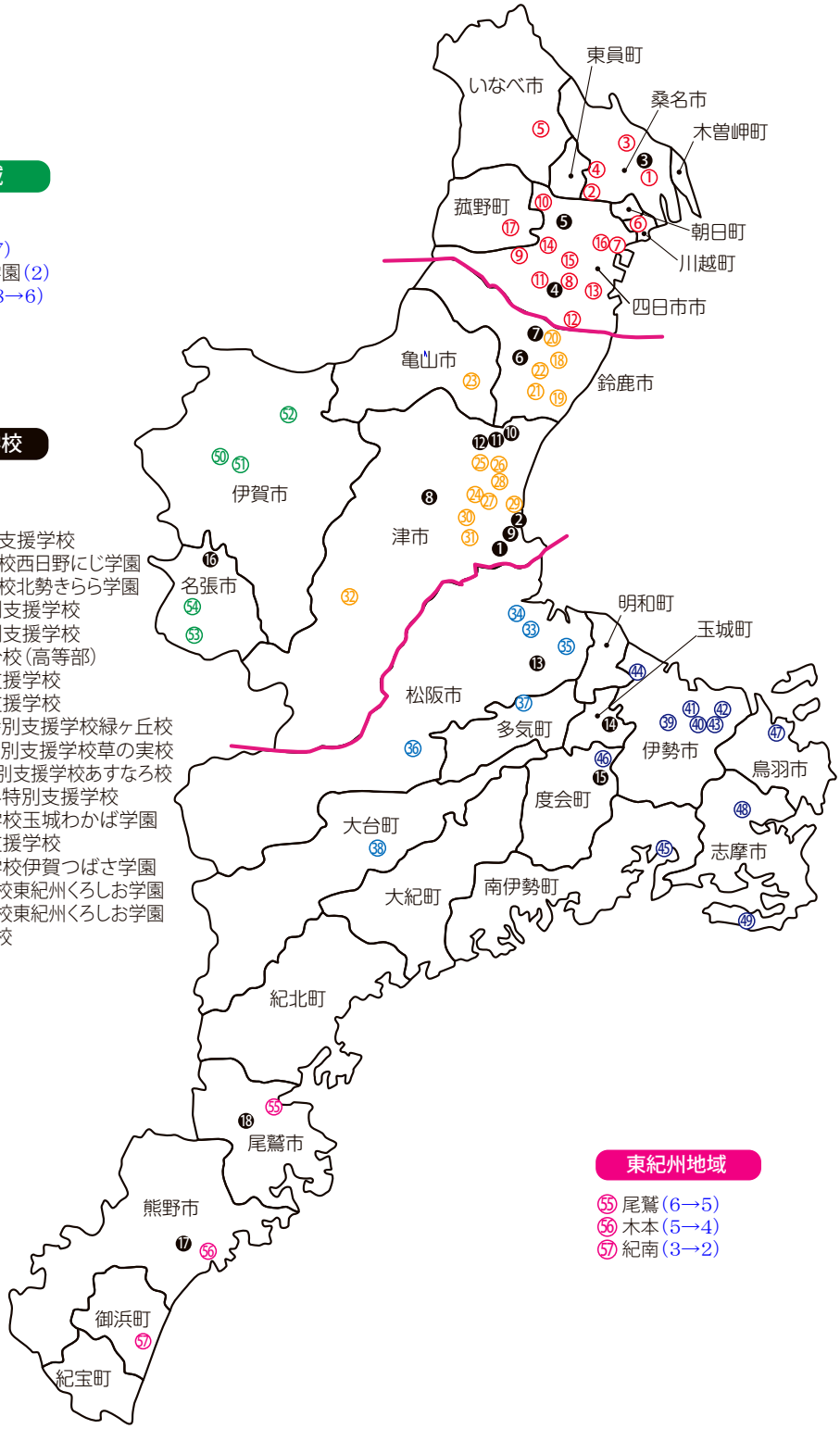
地域名	２学級	３学級	４学級	５学級	６学級	７学級	８学級	９学級	学校数
桑員			桑名工業(工)		桑名北(普)		桑名西（普） いなべ総合学園(総)	桑名(普･理･看)	5
四日市			菰野(普)		朝明(普・福) 四日市四郷(普) 四日市農芸(農･家) 四日市中央工業(工)	四日市西(普) 四日市商業(商)	川越（普・英） 四日市南(普) 四日市工業(工)	四日市(普)	11
鈴鹿・亀山			石薬師(普) 飯野(他･英)		白子(普･家) 稲生(普･体) 亀山(普･情･家)		神戸(普･理)		6
津		白山(普･商)			津工業(工) 久居(普) 久居農林(農･家)	津商業(商)	津西(普･国) 津東(普)	津(普)	8
松阪	飯南(総) 昴学園(総)			松阪商業(商･国)	松阪工業（工） 相可(普･農･家)		松阪(普･理)		6
伊勢志摩	鳥羽(総) 水産(水)	南伊勢(普) 志摩(普)		伊勢工業(工) 宇治山田商業(商) 明野(農･家･福)	宇治山田(普)		伊勢(普)		9
伊賀	あけぼの学園(総)			名張(総)		上野（普・理） 伊賀白鳳 (工･商･農･福)	名張青峰（普）		5
東紀州		紀南(普)		木本(普･総)	尾鷲(普･商･工)				3
学校数	5	4	4	6	15	5	11	3	53

【令和３年度入学生】

地域名	２学級	３学級	４学級	５学級	６学級	７学級	８学級	９学級	学校数
桑員			桑名工業(工)	桑名北(普)		桑名西（普） いなべ総合学園(総)	桑名(普･理･看)		5
四日市			菰野(普)	四日市中央工業(工) 朝明(普･福) 四日市四郷(普) 四日市農芸(農･家)	四日市西(普) 四日市商業(商)	川越（普･英） 四日市工業(工)	四日市(普) 四日市南(普)		11
鈴鹿・亀山		石薬師(普)	飯野(他･英)	稲生(普･体) 亀山(普･情･家)	白子(普･家)	神戸(普･理)			6
津		白山(普･商)		久居(普)	津工業(工) 津商業(商) 久居農林(農･家)	津東(普)	津(普) 津西(普･国)		8
松阪	飯南(総) 昴学園(総)		松阪商業(商･国)	松阪工業（工） 相可(普･農･家)		松阪(普･理)			6
伊勢志摩	南伊勢(普) 鳥羽(総) 志摩(普) 水産(水)		伊勢工業(工) 宇治山田商業(商) 明野(農･家･福)	宇治山田(普)		伊勢(普)			9
伊賀	あけぼの学園(総)			名張(総)	名張青峰（普）	上野（普･理） 伊賀白鳳 (工･商･農･福)			5
東紀州	紀南(普)		木本(普･総)	尾鷲(普･商･工)					3
学校数	8	2	8	13	7	10	5	0	53

三重県立学校の所在地

【第2回教育改革推進会議（7/20）資料】



北勢地域

①桑名(9→8)
②桑名西(8→7)
③桑名北(6→5)
④桑名工業(4)
⑤いなべ総合学園(8→7)
⑥川越(8→7)
⑦四日市(9→8)
⑧四日市南(8)
⑨四日市西(7→6)
⑩朝明(6→5)
⑪四日市四郷(6→5)
⑫四日市農芸(6→5)
⑬四日市工業(8→7)
⑭四日市中央工業(6→5)
⑮四日市商業(7→6)
⑯北星
⑰菰野(4)

中勢地域

⑱神戸(8→7)
⑲白子(6)
⑳石薬師(4→3)
㉑稲生(6→5)
㉒飯野(4)
㉓亀山(6→5)
㉔津(9→8)
㉕津西(8)
㉖津東(8→7)
㉗津工業(6)
㉘津商業(7→6)
㉙みえ夢学園
㉚久居(6→5)
㉛久居農林(6)
㉜白山(3)

松阪地域

㉝松阪(8→7)
㉞松阪工業(6→5)
㉟松阪商業(5→4)
㊱飯南(2)
㊲相可(6→5)
㊳昴学園(2)

南勢志摩地域

㊴宇治山田(6→5)
㊵伊勢(8→7)
㊶伊勢工業(5→4)
㊷宇治山田商業(5→4)
㊸伊勢まなび
㊹明野(5→4)
㊺南伊勢(南勢校舎)
㊻南伊勢(度会校舎)
(1→2, 2→2)
㊼鳥羽(2)
㊽志摩(3→2)
㊾水産(2)

東紀州地域

㊺尾鷲(6→5)
㊻木本(5→4)
㊼紀南(3→2)

伊賀地域

㊿上野(7)
(51)伊賀白鳳(7)
(52)あけぼの学園(2)
(53)名張青峰(8→6)
(54)名張(5)

特別支援学校

❶盲学校
❷聾学校
❸くわな特別支援学校
❹特別支援学校西日野にじ学園
❺特別支援学校北勢きらら学園
❻杉の子特別支援学校
❼杉の子特別支援学校
　石薬師分校(高等部)
❽稲葉特別支援学校
❾城山特別支援学校
❿かがやき特別支援学校緑ヶ丘校
⓫かがやき特別支援学校草の実校
⓬かがやき特別支援学校あすなろ校
⓭松阪あゆみ特別支援学校
⓮特別支援学校玉城わかば学園
⓯度会特別支援学校
⓰特別支援学校伊賀つばさ学園
⓱特別支援学校東紀州くろしお学園
⓲特別支援学校東紀州くろしお学園
　おわせ分校

※ 全日制高校の校名の右に記載した括弧書きの数字は、1学年当たり学級数（平成29年度→令和3年度）を表す。

資料5―4

県立高等学校の教育課程による分類　【令和３年４月入学生】

全日制課程

※【単】は単位制

普通科		桑名、桑名西、桑名北、川越、四日市、四日市南、四日市西、朝明、四日市四郷、菰野、神戸、白子、石薬師、稲生、亀山、津、津西【単】、津東【単】、久居【単】、白山、松阪、相可【単】、宇治山田、伊勢、南伊勢（南勢、度会校舎）、志摩、上野、名張青峰【単】、尾鷲【単】、木本、紀南【単】
	コース制	四日市（国際科学）、四日市南（数理科学）、四日市西（比較文化・歴史、数理情報）、四日市四郷（スポーツ科学）、白子（文化教養）、久居（スポーツ科学）【単】、伊勢（国際科学）、名張青峰（文理探究）【単】、尾鷲（プログレッシブ）【単】
専門学科	農業	四日市農芸、久居農林、相可、明野、伊賀白鳳（生物資源・フードシステム）【単】
	工業	桑名工業、四日市工業、四日市中央工業、津工業、松阪工業、伊勢工業、伊賀白鳳（機械・電子機械・建築デザイン）【単】、尾鷲（システム工学）【単】
	商業	四日市商業、津商業、白山（情報コミュニケーション）、宇治山田商業、松阪商業【単】、伊賀白鳳（経営）【単】、尾鷲（情報ビジネス）【単】
	水産	水産（海洋・機関、水産資源）
	家庭	四日市農芸（生活文化）、白子（生活創造）、亀山（総合生活）、久居農林（生活デザイン）、相可（食物調理）、明野（生活教養）
	看護	桑名（衛生看護）
	情報	亀山（システムメディア）
		朝明（ふくし）、明野（福祉）、伊賀白鳳（ヒューマンサービス）【単】
		桑名（理数）、川越（国際文理）、神戸（理数）、稲生（体育）、飯野（英語コミュニケーション・応用デザイン）、津西（国際科学）【単】、松阪（理数）、松阪商業（国際教養）【単】、上野（理数）
総合学科		いなべ総合学園、飯南、昴学園、鳥羽、あけぼの学園、名張、木本　【すべて単位制】

定時制課程

普通科	桑名、北星【単】、飯野【単】松阪工業【単】、伊勢まなび（昼間部）【単】、上野、名張【単】、尾鷲【単】、木本【単】
専門学科	北星（情報ビジネス）【単】、四日市工業【単】、伊勢まなび（夜間部：ものづくり工学）【単】
総合学科	みえ夢学園【単】

通信制課程

普通科	北星【単】松阪【単】

資料 5-5

【第２回教育改革推進会議（7/20）資料】

令和３年度第２回教育改革推進会議概要

日時　令和３年７月 20 日(火)　14 時 00 分～16 時 00 分

【これからの県立高等学校活性化の基本的な考え方について】

○　「(１)新しい時代を生き抜いていく力の育成」と「（２)新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進」について、(１)には今後の高校教育で育んでいきたい力といった大きな方向性について書かれ、(２)では具体的にどのように進めていくのかが書かれている。(１)と(２)いずれも目指しているのは新しい時代を生きていく力を育成することである点をふまえて、両項目の関係性が分かりやすくなるよう記述を整理すべきではないか。

○　学校教育は「生徒一人ひとりの個別最適な学び」と「生徒同士の協働的な学び」がセットになってはじめて成立するものである。この点、「(２)　新たな時代に対応するために必要な力を育むための学びの推進」のア)の記述「全ての生徒における」について、「生徒同士の、生徒間の」といったニュアンスが弱いことから表現を工夫すべきではないか。

○　「(５)特色・魅力ある教育の実現に向けた学校経営と教職員の資質向上」について、学校では校長や教頭といった少数の管理職が大勢の教職員をマネジメントしているが、組織としての指揮命令をより徹底するためには、学校内での役割分担をしっかり行っていくという視点が必要ではないか。

○　「基本的な考え方」は総花的に記述されているが、これをふまえて具体的な取組を検討する段階にあっては、次期計画の計画期間において重点的あるいは優先的に取り組むことは何かといった整理が必要である。

【県立高校の規模と配置について】

○　これまで学校別活性化協議会を中心に高校活性化に向けた議論を積み重ねてきた中で、それぞれの協議会では、子どもたちの学びを維持していくには現状のままでは困難だといった意見が徐々に増えてきている。紀南高校協議会でも意見が出されているが、そろそろ県教委から今後の案を出して、それをもとに学校・地域で議論を進めていくフェーズに入ってきたのではないか。

○　高校統合も含めた今後の高校のあり方を検討するにあたっては、一校一校を個別に見て判断するのではなく、地域の中での各校の関係性等をふまえた地域一体での議論が必要ではないか。

○　子どもたちの学びにとって一定の学校規模は必要であるが、望ましい学校規模であるかどうかについては、「１学年３学級から８学級」よりもう少し大きな規模が良いのではないかといった検討も必要ではないか。

○　その高校が地域になくてはならないものかどうかを考えるにあたっては、どれだけの卒業生が高校卒業後に地域に残り、あるいは大学卒業後に地域に戻って地域を支える人材となっているか、また、その高校が地元の子どもたちから選ばれ、地元からの入学率が一定あるかという２つの視点で見ていくことが必要だと考える。

○　昨年度実施した高校生を対象としたアンケートの結果を見ても、多様な価値観の中でより良い人間関係を築けているということが子どもたちが高校生活に満足感を得る大きな要素となっていることがわかる。こうしたことをふまえると、子どもたちが一定の人数の中で学んでいけるようにしてあげたいと感じる。

○　小規模校は生徒一人ひとりに手厚くできる一方で、教職員が少ないために校務分担の負担が大きく研修機会も確保しにくい、部活動も制限されてくるといった面がある。高校だけでなく小中学校においても、集団の中で人間性や社会性を育むといった学校の機能を果たしにくい状況が出てきている中で、子どもたちの真の学びを考えた場合、学校に一定の規模は必要であると考える。ただし、地域における今後の高校のあり方を検討するにあたっては、山間部等通学困難な地域の子どもたちのこともしっかり考えていく必要がある。

○　子どもたちにとって、人との関りの中で切磋琢磨して力を付けていくということはとても大事なことであるので、高校には一定以上の規模が必要である。
　小規模校におけるきめ細かい指導等に魅力を感じて入学してくる子どもたちが一定数いると考えられる中、小規模校を他校と統合して一定規模の新たな学校を作る場合においては、こうした小規模校の学びを求める子どもたちのニーズに応える必要がある。こうした視点も考慮しながら、統合の判断にあたっては十分な検討を重ね、慎重に行われるべきである。

○　新しい時代を生きていくための力の育成やそのための学びの推進のためには、望ましい学校規模とあわせて学級規模についても検討していくことが必要ではないか。

○　10 年、20 年先を考えると都市部の高校の小規模化についても考えていく必要があることから、都市部の高校も含め三重県全体でこれからの高校がどうあるべきか、中学校卒業者数の減少にどのように対応していくのか今後も継続的に議論していく必要がある。

○　小学生や中学生の保護者の中からは、子どもたちにはドッジボールやソフトボールをさせたやりたい、そうしたことができるように学校には一定の規模が必要であると思う一方で、学校の統合は地元の方々からはなかなか受け入れならないものだとの声も聞く。地域に学校は必要であるが、しかし、そのために子どもたちの学びが阻害されてしまうことはあってはならないことだと思っている。

○　本日の議論をふまえると、子どもたちの学びにとっては一定の学校規模が必要であり、そのためには、高校統合もやむを得ないと感じる。こうした方向での検討が地域協議会等の場で今後必要であるが、その際には、県教委から当該地域の高校のあり方についてのたたき台を示すなど、地域の方々が議論しやすくなるようなやり方が求められるのではないか。

　また、県教委においては、地元中学校からの進学希望や定員充足の状況、通学困難な地域への配慮など統合を検討していくための考え方を考えていく必要があるのではないか。

○　それぞれの小規模校にあってはこれまで活性化に一生懸命に取り組んできていただいた。しかしながら、入学状況を見るとほとんどの高校が地元の子どもたちから選んでもらえる状況にはなっていないのが現状である。がんばって取り組んできたのになぜこのような結果となっているのか。地域に学校を残したいと考えている地元の方々と、子どもが志望校の選択に迫られている親・保護者との間の考え方の相違、世代間の意見の相違があるのではないか。こうしたことについても、当該地域の高校のあり方について今後検討を進めていくにあたって考慮すべきことである。

○　高校統合の方向は致し方ないと思うが、保護者は例えば子どもの送迎など様々な負担も見込んでいるので、統合に際しては丁寧に保護者へ説明されるよう進めてほしい。同様に、毎年度の県立高校募集定数についても、子どもたちの進路選択に大きな影響を及ぼすものであることから丁寧な説明が必要である。

○　三重県の未来のために、一人ひとりの子どもたちに高校での学びを通してこれからの時代に必要な力を育むこと、また、そうした学びができる学校のあるべき姿を考え実現していくことが県立高校活性化の本来の目的であることを忘れずに今後の議論を進めていくことが求められる。

木本高校・紀南高校卒業者の進路状況

資料６①

１ａ　木本高校普通科

卒業年度	卒業者数		四年制大学	うち国公立	短期大学等	専修学校	各種学校	就職	東紀州地域（含近隣県外）	県内他地域	県外（除近隣県外）	その他	看護大高看准看
令和２年度	110	人数	65	(11)	6	33	3	3	(1)	(1)	(1)	0	(17)
		(%)	59.1	(10.0)	5.5	30.0	2.7	2.7	(0.9)	(0.9)	(0.9)	0.0	(15.5)
令和元年度	114	人数	70	(20)	8	22	2	10	(3)	(1)	(6)	2	(17)
		(%)	61.4	(17.5)	7.0	19.3	1.8	8.8	(2.6)	(0.9)	(5.3)	1.8	(14.9)
平成30年度	120	人数	69	(20)	13	24	0	11	(5)	(3)	(3)	3	(12)
		(%)	57.5	(16.7)	10.8	20.0	0.0	9.2	(4.2)	(2.5)	(2.5)	2.5	(10.0)
平成29年度	105	人数	65	(16)	3	24	2	8	(2)	(1)	(5)	3	(17)
		(%)	61.9	(15.2)	2.9	22.9	1.9	7.6	(1.9)	(1.0)	(4.8)	2.9	(16.2)
平成28年度	118	人数	81	(9)	12	18	4	3	(0)	(0)	(3)	0	(19)
		(%)	68.6	(7.6)	10.2	15.3	3.4	2.5	(0.0)	(0.0)	(2.5)	0.0	(16.1)

１ｂ　木本高校総合学科

卒業年度	卒業者数		四年制大学	うち国公立	短期大学等	専修学校	各種学校	就職	東紀州地域（含近隣県外）	県内他地域	県外（除近隣県外）	その他	看護大高看准看
令和２年度	78	人数	11	(0)	9	34	0	23	(6)	(6)	(11)	1	(9)
		(%)	14.1	(0.0)	11.5	43.6	0.0	29.5	(7.7)	(7.7)	(14.1)	1.3	(11.5)
令和元年度	76	人数	7	(0)	5	33	1	28	(3)	(5)	(20)	2	(4)
		(%)	9.2	(0.0)	6.6	43.4	1.3	36.8	(3.9)	(6.6)	(26.3)	2.6	(5.3)
平成30年度	80	人数	19	(0)	1	32	0	24	(7)	(10)	(7)	4	(9)
		(%)	23.8	(0.0)	1.3	40.0	0.0	30.0	8.8	12.5	8.8	5.0	(11.3)
平成29年度	80	人数	21	(0)	6	22	3	26	(12)	(2)	(12)	2	(5)
		(%)	26.3	(0.0)	7.5	27.5	3.8	32.5	(15.0)	(2.5)	(15.0)	2.5	(6.3)
平成28年度	77	人数	10	(0)	4	35	0	27	(5)	(7)	(15)	1	(8)
		(%)	13.0	(0.0)	5.2	45.5	0.0	35.1	(6.5)	(9.1)	(19.5)	1.3	(10.4)

２　紀南高校

卒業年度	卒業者数		四年制大学	うち国公立	短期大学等	専修学校	各種学校	就職	東紀州地域（含近隣県外）	県内他地域	県外（除近隣県外）	その他	看護大高看准看
令和２年度	75	人数	1	(0)	7	15	0	45	(18)	(14)	(13)	7	(4)
		(%)	1.3	0.0	9.3	20.0	0.0	60.0	24.0	18.7	17.3	9.3	5.3
令和元年度	93	人数	7	(0)	13	22	0	44	(19)	(10)	(15)	7	(7)
		(%)	7.5	(0.0)	14.0	23.7	0.0	47.3	(20.4)	(10.8)	(16.1)	7.5	(7.5)
平成30年度	103	人数	7	(1)	5	29	0	58	(14)	(13)	(31)	4	(10)
		(%)	6.8	(1.0)	4.9	28.2	0.0	56.3	(13.6)	(12.6)	(30.1)	3.9	(9.7)
平成29年度	96	人数	6	(0)	7	29	0	48	(20)	(9)	(19)	6	(11)
		(%)	6.3	(0.0)	7.3	30.2	0.0	50.0	(20.8)	(9.4)	(19.8)	6.3	(11.5)
平成28年度	113	人数	7	(0)	7	25	0	71	(35)	(10)	(26)	3	(8)
		(%)	6.2	(0.0)	6.2	22.1	0.0	62.8	(31.0)	(8.8)	(23.0)	2.7	(7.1)

注）「短期大学等」の等は高等専門学校への編入を含む。「各種学校」は、大学等への進学のための「予備校」。

就職の「東紀州地域」には、新宮市等の近隣県外地域を含む。

「その他」には、「公共職業能力開発施設等入学者」、「一時的な仕事に就いた者」のほか、未定者等も含む。

資料6 ②

進路合格・内定先一覧（木本高校）

大学	R1	R2
（国）愛知教育大学	1	
（国）愛媛大学		1
（国）岡山大学		1
（国）金沢大学	2	
（国）京都教育大学	1	
（国）高知大学	1	
（国）信州大学	1	
（国）東京海洋大学		1
（国）東北大学		1
（国）徳島大学		1
（国）鳥取大学	1	
（国）富山大学	1	
（国）名古屋大学	3	
（国）名古屋工業大学		1
（国）広島大学		1
（国）福井大学	1	1
（国）三重大学	6	2
（国）山梨大学	1	
（国）和歌山大学	1	
（公）滋賀県立大学	1	
（公）名古屋市立大学	1	
（公）三重県立看護大学	1	
（公）横浜市立大学	1	1
愛知学院大学	4	1
愛知工業大学	2	1
愛知淑徳大学	1	
藍野大学		1
青山学院大学		2
大阪大谷大学		1
大阪音楽大学	1	
大阪経済大学	1	
大阪芸術大学	1	
大阪樟蔭女子大学	1	
大阪商業大学	1	
大阪女学院大学	1	
大阪成蹊大学	1	
大阪体育大学	1	
大阪人間科学大学	1	
大阪保健医療大学		1
大谷大学		1
大手前大学		1
岡山理科大学	1	1
関西大学	2	1
関西外国語大学	3	1
関西学院大学	2	1
京都産業大学	5	2
京都女子大学		1
京都精華大学		1
京都橘大学		1
近畿大学	1	1
金城学院大学	1	1
国立音楽大学	1	
工学院大学		1
皇學館大学	3	8
神戸学院大学		1
駒澤大学		2
駒沢女子大学		1
至学館大学	1	1
四国大学		1
自治医科大学		1
鈴鹿医療科学大学	10	10
星城大学	1	
成城大学		1
摂南大学	1	2
相愛大学	2	
大同大学	1	3
中京大学	5	2
中部大学	1	
帝塚山大学	1	3
天理大学	1	
東海学園大学	3	3
同志社女子大学		1
同志社大学	1	2
同朋大学		2
東洋大学	1	
名古屋音楽大学		1
名古屋外国語大学	2	5
名古屋学院大学	2	1
名古屋学芸大学		1
名古屋女子大学	2	
奈良大学	1	
奈良学園大学	1	
南山大学	2	1
日本大学	1	
日本赤十字豊田看護大学	1	1
日本福祉大学	3	2
人間環境大学		1
広島国際大学		1
藤田医科大学	1	1
武庫川女子大学	1	
名城大学	7	5
桃山学院大学		1
大和大学	1	
四日市大学	1	1
四日市看護医療大学	2	1
立命館大学	4	6
龍谷大学	4	6
計	124	111

短期大学	R1	R2
津市立三重短期大学	5	2
愛知学泉短期大学		1
愛知文教女子短期大学		1
大阪城南女子短期大学		1
大阪成蹊短期大学	1	1
大阪夕陽丘学園短期大学		1
関西外国語大学短期大学部	2	
関西女子短期大学		1
実践女子大学短期大学部	1	
修文大学短期大学部	2	1
高田短期大学	1	2
豊橋創造大学短期大学部		1
名古屋短期大学	1	
平成医療短期大学	1	2
武庫川女子大学短期大学部		1
計	14	15

専修学校（看護・準看）	R1	R2
国立三重中央看護	3	3
和歌山県立なぎ看護	3	4
愛仁会看護助産	1	
愛知県厚生連加茂看護	1	1
愛知県厚生連更生看護	1	1
伊勢保健衛生	1	
岡波看護	1	1
京都中央看護保健大学校		1
桑名医師会看護		1
新宮市医師会准看護学院		1
聖十字看護	1	4
中部労災看護	2	
津看護	1	2
松阪看護	1	2
三重看護	2	2
ユマニテク看護助産		2
計	18	25

専修学校	R1	R2
三重県立津高等技術学校	1	
ＡＷＳ動物病院		1
ＥＬＩＣビジネス＆公務員	1	
あいち造形デザイン		1
あいちビジネス		4
あいち福祉医療	1	1
愛知文化服装	1	
愛知ペット		2
旭理容美容		1
伊勢志摩リハビリテーション		1
伊勢調理師	1	
伊勢保健衛生		3
伊勢理容美容	1	
ヴェールルージュ美容		1
大阪医専		1
大阪医療福祉	1	
大阪観光	1	

大阪ダンス＆アクターズ	1	
大阪ホテル		1
大原法律公務員　津校	2	1
大原法律公務員＆スポーツ	1	
関西医科	1	
関西外語	1	
京都外国語		1
高津理容美容		1
国際医学技術		1
駿台観光＆外語ビジネス	1	
セントラルトリミングアカデミー	1	1
中部美容	1	
東海医療科学	2	1
東海医療工学		1
東海工業　金山校	2	1
東京ＩＴ会計　名古屋校		2
東京美容	1	
トヨタ名古屋自動車大学校	1	
トライデントコンピュータ	1	
トライデント外国語・ホテル・ブライダル	1	
名古屋医健スポーツ		1
名古屋医専	1	
名古屋医療秘書福祉	2	2
名古屋ECO動物海洋	1	
名古屋工学院		2
名古屋こども	1	
名古屋歯科医療		1
名古屋情報メディア		2
名古屋スクールオブミュージック＆ダンス		1
名古屋ユマニテク歯科製菓		1
名古屋リゾート＆スポーツ	2	1
日本外国語		1
日本工学院八王子		1
日本デザイナー芸術学院		1
ヒューマンアカデミー	1	
ミエ・ヘア・アーチストアカデミー	2	
ユマニテク医療福祉大学校	1	
履正社医療スポーツ	1	
和歌山コンピュータビジネス	2	
計	39	41

各種学校	R1	R2
ヒューマンアカデミー	1	
計	1	0

就職（公務員）	R1	R2
紀宝町役場		1
熊野消防	1	1
三重県警察	2	
自衛官候補生		1
計	3	3

就職（東紀州地域）	R1	R2
ＳＷＳ西日本(株)		1
カーコン車検（株）紀州工場	1	
熊野精工(株)	1	1
北越紀州製紙(株)	1	
吉田水道	1	
計	4	2

就職（県内他地域）	R1	R2
伊賀リハビリライフサポート株式会社		1
伊勢農業共同組合	1	
(株)エクセディ	2	1
長島観光開発株式会社		1
株式会社ナガシマゴルフ		1
日東電工株式会社亀山事業所	1	1
ニプロファーマ(株)		1
株式会社百五銀行		1
ホテル季の座	1	
計	5	7

就職（県外）	R1	R2
アイシン・エイ・ダブリュ株式会社	1	
アイシン精機株式会社	1	
ウォルナットファーマシーズ株式会社	1	
太田商事株式会社	2	1
株式会社グリーンズ		1
黒崎播磨株式会社名古屋支店	1	
大阪歯科学院		
大阪情報コンピュータ		3
株式会社興和工業所	2	1
株式会社札幌かに本家	1	
医療法人山翔会　歯科山崎	1	

下野塗装店		1
大昌総業株式会社		1
大同テクニカ株式会社	1	
ダイハツ工業株式会社	1	1
地建興業株式会社		1
株式会社デンソー	1	
東海旅客鉄道株式会社	1	1
トヨタ自動車株式会社	1	
奈良交通株式会社	1	
西日本旅客鉄道株式会社	1	1
株式会社にし家		1
日建株式会社		2
株式会社ビューティサロンモリワキ	1	
富士岐工産株式会社名古屋支店		1
フジパン株式会社	3	
有限会社フリースタイル		1
株式会社美スギ	1	
三菱自動車工業株式会社	3	
山崎製パン株式会社	1	
吉田設備	1	
計	27	17

進路合格・内定先一覧（紀南高校）

大学	R1	R2
皇學館大学	1	0
鈴鹿医療科学大学	1	0
愛知学院大学	1	0
日本福祉大学	1	0
中部学院大学	1	0
神戸学院大学	1	0
大阪芸術大学	1	0
京都ノートルダム女子大学	2	0
宝塚医療大学	0	1
計	9	1

短期大学	R1	R2
(公)三重短期大学	5	2
高田短期大学	1	2
ユマニテク短期大学	1	0
愛知文教女子短期大学	2	1
愛知みずほ短期大学	1	0
岐阜保健短期大学	2	0
修文大学短期大学部	1	0
大阪芸術大学短期大学部	1	0
大阪成蹊短期大学	1	0
豊岡短期大学	0	1
和歌山信愛女子短期大学	0	1
計	15	7

専修学校（看護・准看）	R1	R2
(公)和歌山県立なぎ看護学校	4	1
伊勢保健衛生専門学校（看護学科）	1	0
新宮市医師会准看護学院	1	1
宝塚三田病院付属准看護学校	1	0
関西看護専門学校	0	1
津看護学校	0	1
計	7	4

専修学校	R1	R2
関西社会福祉専門学校	1	0
三重調理専門学校	1	0
大阪調理製菓専門学校	1	0
トヨタ名古屋自動車大学校	3	0
東海工業専門学校金山高校	1	0
名古屋情報メディア専門学校	1	0
大阪ハイテクノロジー専門学校	1	0
旭美容専門学校	2	0
京都理美容専修学校	1	0
専門学校セントラルトリミングアカデミー	2	0
国際観光専門学校名古屋校	1	0
HAL大阪	1	0
東海医療技術専門学校	0	1
阪奈中央リハビリテーション専門学校	0	1
近畿コンピュータ電子専門学校	0	1
和歌山コンピュータビジネス専門学校	0	1
東海工業専門学校金山校	0	1
名古屋調理師専門学校	0	1
広島酔心調理製菓専門学校	0	1
大阪ビューティーアート専門学校	0	1
関西美容専門学校	0	1
アミューズメディア総合学院	0	1
京都芸術デザイン専門学校	0	1
計	16	11

就職（公務員）	R1	R2
陸上自衛隊	2	1
大阪府警	1	0
計	3	1

就職（東紀州地域）	R1	R2
北越コーポレーション(株)(旧北越紀州製紙紀州工場)	3	0
(株)北越ペーパーテック紀州(旧紀州紙精選/紀南産業/北越エンジニアリング)	1	0
熊野精工(株)	1	1
パナソニックライフソリューソンズ紀南電工(株)	1	3
ＳＷＳ西日本(株)	2	1
日本郵便(株)東海支社	1	1
特別養護老人ホームたちばな園	1	1
ケアビレッジ和	1	0
紀南特別養護老人ホーム組合亀楽園	1	0
(株)ケイオープラン	2	3
海洋ゴム(株)	1	0
伊勢農業協同組合	1	1
三重くまの森林組合	1	0
カーコン車検(株)紀州整備工場	1	0
(有)産王商会熊野サービスセンター	1	0
新宮信用金庫	0	1
（株）フジデン	0	1
ユウテック（株）	0	1
岩田電気（有）	0	1
有限会社紀南石油販売所	0	1
紀南病院組合きなん苑	0	1
計	19	17

就職（県内他地域）	R1	R2
(株)エクセディ上野事業所	3	5
社会福祉法人あけあい会	1	1
長島観光開発(株)	1	1
ホテル季の座	1	1
(株)ベストロジ三重	1	0
三重交通商事(株)	1	0
日本梱包運輸倉庫（株）	0	1
中日本ビルテクノサービス（株）	0	1
マルアイユニティー（株）亀山事業所	0	1
（株）キナン	0	1
（株）ホンダ四輪販売三重北	0	1
計	8	13

就職（県外）	R1	R2
アイシン精機（株）	1	0
アイシン・エィ・ダブリュ(株)	1	0
ダイハツ工業(株)	1	0
日鉄物流名古屋(株)	1	0
大同テクニカ(株)	1	0
吉川工業(株)名古屋支店	1	0
ビューテック(株)西日本事業所	1	0
フジパン(株)	1	1
社会福祉法人サン・ビジョン	2	0
(株)アオキスーパー	1	0
大和串Planning(株)	1	0
西日本電気テック	1	0
大阪水産運輸(株)	1	0
ユニチカ（株）岡崎事業所	0	1
日鉄テックスエンジ（株）名古屋支社	0	1
キムラユニティー（株）	0	1
（株）コジマプラスチックス	0	1
由良アイテック（株）	0	1
（株）ヨシヅヤストアー	0	1
太田商事（株）	0	1
（株）菅原設備	0	1
（医）並木会並木病院	0	1
（株）エフベーカリーコーポレーション	0	2
（株）ENEOSウイング関西支店	0	1
計	14	13

資料７

木本高等学校の活性化について

【木本高等学校の活性化にかかる現状と課題】

地域における本校の大きな役割として、「地域で学んで自己実現できる学校」であり、進学や就職等の希望を実現できうることが本校の魅力化・活性化に直結するものと考えています。普通科・総合学科ともに、進学希望者の割合が増加する中で、大学進学希望者の中には、安易に指定校推薦で進学先を決定する傾向が見られるため、本当に自分が目指したいものや学びたいものを早い段階から見据えて、最後まで挑戦し続ける進路指導を充実させる必要があります。

令和４年度には、普通科３クラス、総合学科１クラスの４クラス規模が３学年揃うことになります。それに伴う教員定数の減によって、教科指導や部活動指導等が従来の規模や質を維持していくことが非常に難しくなってきており、生徒たちの学習活動等において、選択肢を減少せざるを得ない状況となっています。また、部活動数の削減や新教育課程を見据えたカリキュラムの編成等に取り組んでいるものの、教員一人ひとりの負担は確実に増加しています。このような状況の中で、本校の更なる魅力化・活性化をどう具体化していくかが、今後の大きな課題となります。

１　生徒の進路実現につながる「学力の向上」の取組

１　自主的・主体的な学習への支援【改革】

＜令和２年度までの成果＞

・自主学習力を高める支援として、外部による Web を利用した学習環境を提供している。まず、1 年生では、全クラス（普通科・総合学科）を対象として、ベネッセの「classi」を利用して、動画学習を行っている。主に基礎固めとして中学の学習内容の動画を配信しており、担任と教科担当が連携して、授業の復習として利用している。2 年生では普通科全員を対象にスタディサプリの動画を受講させている。この動画学習を利用して、難関大学コースや授業の定着コース等のメニューを用意し、生徒に学ぶ環境を整えている。3 年生では、希望生徒に動画学習に取り組ませている。

＜課題＞

・一部の生徒はこの動画学習に熱心に取り組み、成績を上げている一方で、全体として動画の利用者が月を追うごとに減少している傾向にある。動画学習を定着させるために、一層の工夫と仕掛けが必要である。

２　学力向上と進路希望実現に向けた課外授業、補習授業、個別指導の実施【改善】

＜令和２年度までの成果＞

・進路希望実現にむけて、３年生対象の補習授業を授業日に 5 教科実施し、長期休業中に 9 日間行い、多くの生徒が参加した。参加した生徒は積極的に取り組んだ。

・基礎学力定着に向けて、1 年生では classi 動画学習を行い、国語では 36 講座、英語は 30 講座、数学は 25 講座を取り入れた。継続して取り組み成績を伸ばした生徒もいる。

＜課題＞

・生徒が動画学習を習慣化するためには、担任と教科担当の継続した指導・支援が必要である。

３　目標達成のための振り返り（「計画（Plan）」→「実行（Do）」→「評価（Check）」→「改善（Action）」）の徹底指導

＜令和２年度までの成果＞

・実施計画や目標を各定期考査や模試前に生徒に立てさせ、「頑張ったこと」「できた・できなかったこと」（評価・課題・反省点）、「次回からこうしていく」（目標・改善点）等について

は、各試験や各行事、各学期後に振り返りをさせた。事前に「ＰＤＣＡサイクル」の重要性やポイントなどを説明し、繰り返し続けることで、自分の目標達成、そのための「習慣」の定着、改善していく姿をイメージさせることを大切にした。

・しっかり振り返りができた生徒は、計画習慣が身に付き、定期考査の成績も向上し、自分の希望進路の実現を果たすことができた。また、学校行事においても、主体的に行動出来る生徒も出てきた。

＜課題＞

・プリントに計画、目標を立て、振り返りをして提出することに、意義を見出せない生徒に対して、「振り返り」指導の重要性や意義を丁寧に伝えるとともに、違う手段で「振り返り」をさせることも考えていく。

・「振り返り」の提出・確認はＩＣＴを活用し、アドバイスの時間を充実させるなど効率化を図ることができるとよい。

４　進路希望先決定のための個別指導、面談の実施

＜令和２年度までの成果＞

・総合的な学習の時間やＬＨＲを使って、自分の進路について考えさせる取り組みを丁寧に実施した。中でも、自分の進路志望先をクラスでプレゼンテーションする企画は、自分の進路志望先を早期に考えさせ、明確に思いを作り、「志望動機」を考えさせることやプレゼンテーション能力の向上などに効果的であった。

・面談週間以外にも、随時丁寧に面談を行い、生徒は志望校に行くためには何が必要かを考え、早めに対策をとることができた。また、自分の意思で決めた志望校先に行くことができた生徒の満足度はとても高い。

＜課題＞

・目標が決まらない生徒や、自分の実力より明らかに高い志望先を考えている生徒に対して、本人の希望も考慮し、モチベーションを下げないように、どの段階で志望先を迫っていくのか、模試などを利用してきっちり見極めさせることをするのか、個々に対応していく必要があった。

＝令和３年度に注力すること＝

・３年生に対しては大学入学共通テストまで見据えた指導を行い、模試の活用や模試分析等を行い、生徒の志望校合格に向けて効果的な指導を行う。また、塾に通っていない生徒には「スタディサプリ」を活用した個別指導を実施する。

・１，２年生には、「Classi」を活用した学年全体での指導と個別指導を実施する。そのために、スタディサポートや総合学力テストの結果から生徒の学力状況を把握し、対策等について協議する「学力検討委員会」等を実施する。

◎令和３年度の実践・計画

【３年生について】

３学年については、自主学習力を高める支援としてスタディサプリの動画を希望者に受講させることになっていますが、面談時などを利用してひとりひとりと丁寧なやりとりをしながら、大学を志望する生徒には極力受講するよう指導しており、特に選抜コースについては７割以上の生徒が受講しています。既習事項の復習や苦手分野の補強など、生徒それぞれのニーズに合わせて利用しています。

昨年度は新型コロナの関係で中止となった、２泊３日の夏季学習合宿を実施し、選抜コースの生徒を中心に総合学科の生徒も含めて３２名が参加しました。規則正しい生活習慣の確立も目指しながら朝６時に起床、ラジオ体操や掃除をした後、８時から２２時まで、食事と入浴の時間以外は勉強をするという過酷なプログラムをやり抜きました。

スマホを預けなければならないため、依存症ぎみであった生徒はこれをきっかけにして、スマホなしでなんとかやっていける自信がついたようです。また、事後アンケートから、「自分の限界がどこまでいけるのかを知ることができた」「ここまでできるんだと知って自信がついた」などといった声が聞かれました。

今後の計画としては、面談週間以外でも随時面談をおこない、生徒の不安に寄り添ったり、学習方法の指導をしたりと個々の対応を丁寧にしていく予定です。

【1、2年生について】

４月実施のスタディサポートの報告会を５月１４日に実施した後、担任による面談において、結果の報告と今後の取り組み方について指導を行いました。次回の報告会は９月２２日に実施予定であり、１月に７月から１１月の変化分析と課題の把握のため、学力検討委員会を実施します。

２　生徒の進路実現につながる「キャリア教育」の取組

１　進路や将来について考える機会づくり

＜令和２年度までの成果＞

・どの学年においても、１度は小論文指導を通して、生徒が自分の考えを客観的に述べる力を身につけさせるという取組を続けており、２年次においては、「総合的な探究の時間」において「将来どんな分野で働きたいと思っているか。またそれはなぜか」というテーマで４００字書いた。業者による添削がなされた後、返送されてきた真っ赤な答案をもとに再度同じテーマで書かせたところ､生徒たちは具体的な改善箇所を確認しながら意欲的に取り組んだ。

・「総合的な探究の時間」において、業者（リクルート）の資料と、生徒自身が取り寄せた大学等のパンフレットをもとに、各自が目標とする学校の志望動機について、ワークシートにまとめる取組を行った。丁寧に調べて具体的に文字にしていくことで新たな気づきがあり、自分の考えをきちんと整理することができたという感想が聞かれた。

＜課題＞

・小論文指導においては､回数を増やしたい考えもあるが費用がかさんでくる点が問題である。

２　三重大学との連携強化

＜令和２年度までの成果＞

・オンラインによる三重大学の説明会において、生徒が希望する上での課題に対する回答を聞くことが出来、進学に対する意欲につながった。また、三重大学で学ぶ本校卒業生が、オンラインではあるが直接本校生徒に学生生活を語ることにより、三重大学をより身近に捉えることができ、学習のモチベーションアップになっている。

※三重大学教育学部への進学希望アンケート調査（地域推薦入試について）

	ぜひ受験したい	受験したい	できれば受験したい
1年生	17	16	32
2年生	9	3	17

＜課題＞・ 三重大学教育学部の地域推薦入試は小学校課程なので、中学校課程志望者に対して今後どのような進路希望の実現が図れるかが課題である。

＝令和３年度に注力すること＝

・今年度三重大学との連携が不十分であったので、来年度は三重大学の各学部・学科との個別の連携を強化し、卒業生徒の協力を仰ぎながら「〇〇学部の進路研究セミナー」等の web を利用した進路説明会を複数実施したい。

◎令和３年度の実践・計画

・夏季集中セミナー（夏季休業中１・２年生選抜クラス等　５日間）において、三重大学との連携強化や大学進学に関するモチベーション向上を目指し、三重大学によるオンライン説明会を卒業生１名が参加する形で実施しました（事前に、三重大学学部紹介のパンフレット、三重大学広報誌三重大Ｘを配布）。
・本校オープンスクール（８月２４日実施予定）において、中学生に対して、三重大学サテライト学舎の見学・三重大学の概要説明を行うことにより、本校入学後三重大学への進学意識の向上を図ります。

３　「生徒活動のＰＲ・地域への情報発信」の取組

１　中学生と保護者対象の進学説明会

＜令和２年度までの成果＞

・大学進学を目指して本校を志望する中学生とその保護者が対象に行い、生徒の目的意識を高めることや保護者の大学に対する理解を深めることができた。

	生徒	保護者
中学3年生	19	28
中学2年生	2	6
中学1年生	1	2
計	22	36

※令和２年度進学説明会参加者内訳

２　地域での取組

＜成果＞・奉仕活動として、七里御浜の清掃、熊野古道の清掃、近隣河川の清掃を行っている。

＝令和３年度に注力すること＝

・　地元小学校との連携強化として、総合学科３年生の国際英語を履修している生徒が、木本小学校を年２回訪問し、児童とともに外国語活動を行うという取組があり、小学生・高校生ともに、実施後アンケートでは「やりがいがあった」「またやりたい」という声が多く、今年度は新型コロナの関係で、実施することができなかったものの、今後も継続して行っていきたい。

◎令和３年度の実践・計画

・中学生と保護者対象の進学説明会（１１月１日実施予定）を実施します。
　（進学説明会：本校入学後大学進学を目指す生徒を対象）
・昨年度より参加人数を増やす目的で、進学説明会の実施要項の配布を本校オープンスクールの時に行います（中学生の意識付けを早期に行い、保護者の予定を立てやすくするため）。
・地元小学校との連携強化については、新型コロナの状況が昨年度とくらべて大幅に改善されれば、一昨年と同様の取組をする予定です。

資料８

紀南高等学校　活性化取組の総括的な検証

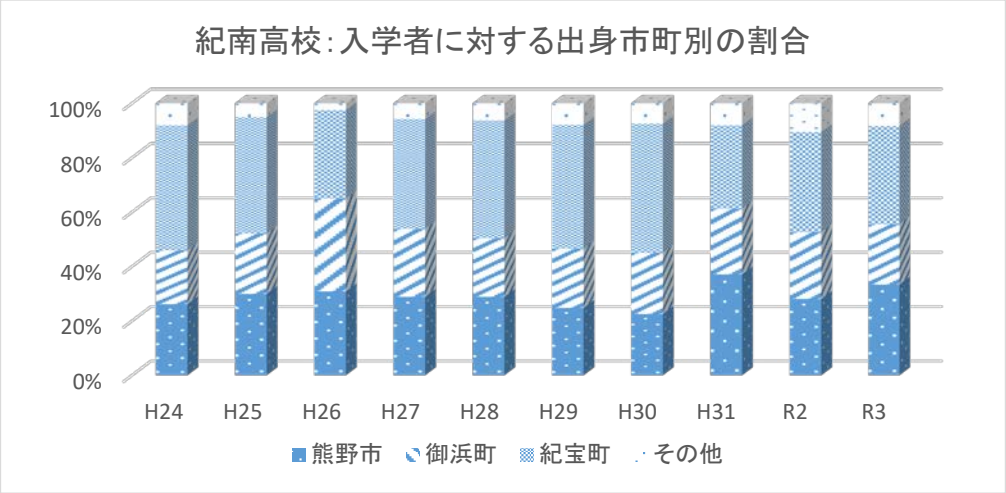
紀南地域では中学校卒業者数の減少が進む中、紀南高校と木本高校の２校ともに小規模化が進んでおり、地域の高校のあり方が議論されています。両校は活性化を進めて生徒や地域の学習ニーズに対応していますが、和歌山県をはじめとして地域外へ進学する中学生が多いことも課題となっています。

紀南高校の生徒は、約６割が南牟婁郡、約３割が熊野市から通学しており、高校への入学者の増加を図るためには、高校の特色を活かして魅力化をすすめ、所在する御浜町をはじめとする南牟婁郡の中学生をより多く地元で学べるようにすること、および熊野市から通学する中学生の進学率をあげることが必要となります。特に熊野市よりも人口規模が大きい南牟婁郡中学生の紀南高校への進学率（H24～28：平均 36.1%）を維持していくことが重要でした。

このような状況の中で紀南高校は、コミュニティ・スクールとして

（１）地域を学びの場とした学習の推進
（２）幅広い学力層の生徒の進路希望実現に向けた個に応じた指導
（３）地域への理解を深める学習の推進
（４）学校の魅力を広く発信

という方向性のもと、地域を学び場とした学習を通じて将来の地域の担い手を育成する取組、看護系福祉系をはじめとした上級学校への進学希望や基礎学力を定着させて地元企業を中心とした就職希望を実現する取組を進めて、高校の魅力向上を図ってきました。



活性化の取組

○　特色ある地域課題解決型学習として、学校設定科目「地域産業とみかん」では、地域の支援により、みかん関連産業での実体験を通じ、地域産業の現状や課題を学び探究する学習が取り組まれています。取組に魅力を感じる生徒が減ってきたことなどから、現在、選択する生徒が少ない状況にあります。また「東紀州学」は、地域でフィールドワークを行い地域社会の理解を深めています。

（選択人数・地域の講師による授業回数）

	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
地域産業とみかん	１７名	２１名	３名	５名
東紀州学	１６名	１２名	１３名	９名
地域の講師による授業回数	のべ 56 回	10 回以上	15 回	目標 15 回

○　学校設定科目「就労体験」は年間を通したインターンシップで、その体験により、職業や地元への社会貢献についての理解につなげています。

（選択人数・希望職種での就労体験割合）

	H30 年度	R1 年度	R2 年度	R3 年度
就労体験	４２名	４２名	１７名	１２名
希望職種での就労体験割合	100%	100%	84%	83%

○　ＳＢＰ（ソーシャルビジネスプロジェクト）活動の展開について、他校生徒との交流など新たな企画に挑戦をしています。生徒から積極的な取組活動が見られるようサポートする必要があります。

（参加人数）

	R1 年度	R2 年度
ＳＢＰ参加者	３名	４名

○　地域医療･福祉を主体として進学を目指すための教育課程の類型化（コース制）や様々な学習活動は、体系化されて構築されており、基礎学力向上の取組にもつなげています。また、個に応じた指導として、進学希望者の課外補講を令和２年度は 220 時間実施するなど、授業理解度を向上させるため取組も進めています。

（生徒アンケート（2 年 40 名）より）

生徒アンケート	H30 年度	R1 年度	R2 年度
［授業がよくわかる］ 肯定的評価割合	85.3%	80.0%	87.2%
［この地域が好き］ 肯定的評価割合	―	100%	67.3%

○　成果発表会の実施、道の駅の空き店舗の活用、「きなん俳句コンクール」などの企画を実施し、学校の活動をＰＲしています。

進路実現の状況

紀南高校の進路状況

卒業年度	卒業者数		四年制大学	うち国公立	短期大学等	専修学校	各種学校	就職	東紀州地域（含近隣県外）	県内他地域	県外（除近隣県外）	その他	看護大高看准看
平成27年度	106	人数	8	(0)	10	26	0	56	(31)	(8)	(17)	6	(7)
		(%)	7.5	(0.0)	9.4	24.5	0.0	52.8	(29.2)	(7.5)	(16.0)	5.7	(6.6)
平成28年度	113	人数	7	(0)	7	25	0	71	(35)	(10)	(26)	3	(8)
		(%)	6.2	(0.0)	6.2	22.1	0.0	62.8	(31.0)	(8.8)	(23.0)	2.7	(7.1)
平成29年度	96	人数	6	(0)	7	29	0	48	(20)	(9)	(19)	6	(11)
		(%)	6.3	(0.0)	7.3	30.2	0.0	50.0	(20.8)	(9.4)	(19.8)	6.3	(11.5)
平成30年度	103	人数	7	(1)	5	29	0	58	(14)	(13)	(31)	4	(10)
		(%)	6.8	(1.0)	4.9	28.2	0.0	56.3	(13.6)	(12.6)	(30.1)	3.9	(9.7)
令和元年度	93	人数	7	(0)	13	22	0	44	(19)	(10)	(15)	7	(7)
		(%)	7.5	(0.0)	14.0	23.7	0.0	47.3	(20.4)	(10.8)	(16.1)	7.5	(7.5)
令和２年度	75	人数	1	(0)	7	15	0	45	(18)	(14)	(13)	7	(4)
		(%)	1.3	0.0	9.3	20.0	0.0	60.0	24.0	18.7	17.3	9.3	5.3

注）「短期大学等」の等は高等専門学校への編入を含む。

「各種学校」は、大学等への進学のための「予備校」。

就職の「東紀州地域」には、新宮市等の近隣県外地域を含む。

「その他」には、「公共職業能力開発施設等入学者」、「一時的な仕事に就いた者」のほか、未定者等も含む。

○　最近の進学者の状況については、公立大学への進学をはじめ、地域医療を志す生徒の看護学校への進学、地域について学習した生徒が将来Ｕターンを目指した大学への進学を実現するなど、個々の希望を実現しています。

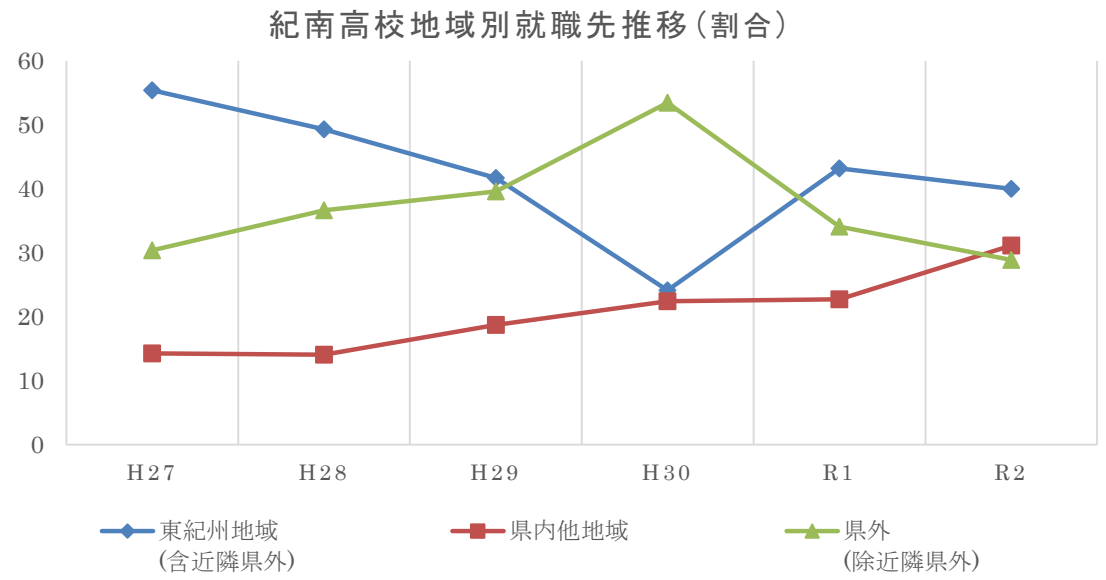
○　地域のことを学んだ生徒のうち、将来、地元の教員を目指したいと四年制大学に進学した生徒が３名（Ｈ２８～３０年度）、地域のことを学んだ生徒のうち、大学卒業後、地域に戻って貢献したいと考えている生徒が２名いました。

紀南高校　就職内定　実績推移

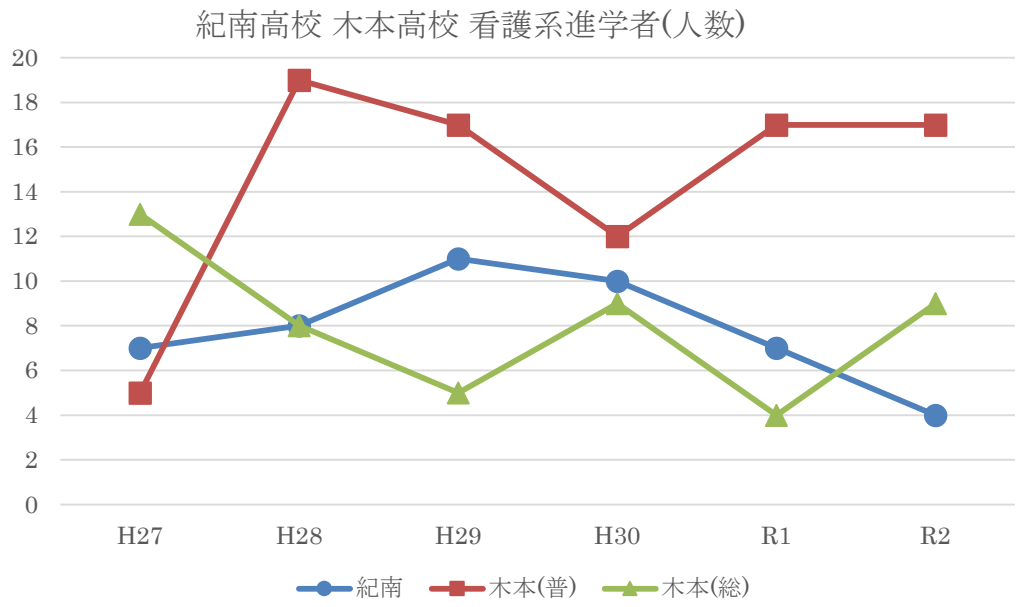
		就職	東紀州地域 (含近隣県外)	県内他地域	県外 (除近隣県外)	卒業 者数
H27年度	人数 地域別割合(%)	56	31 55.4	8 14.3	17 30.4	106
H28年度	人数 地域別割合(%)	71	35 49.3	10 14.1	26 36.6	113
H29年度	人数 地域別割合(%)	48	20 41.7	9 18.8	19 39.6	96
H30年度	人数 地域別割合(%)	58	14 24.1	13 22.4	31 53.4	103
R1年度	人数 地域別割合(%)	44	19 43.2	10 22.7	15 34.1	93
R2年度	人数 地域別割合(%)	45	18 40.0	14 31.1	13 28.9	75

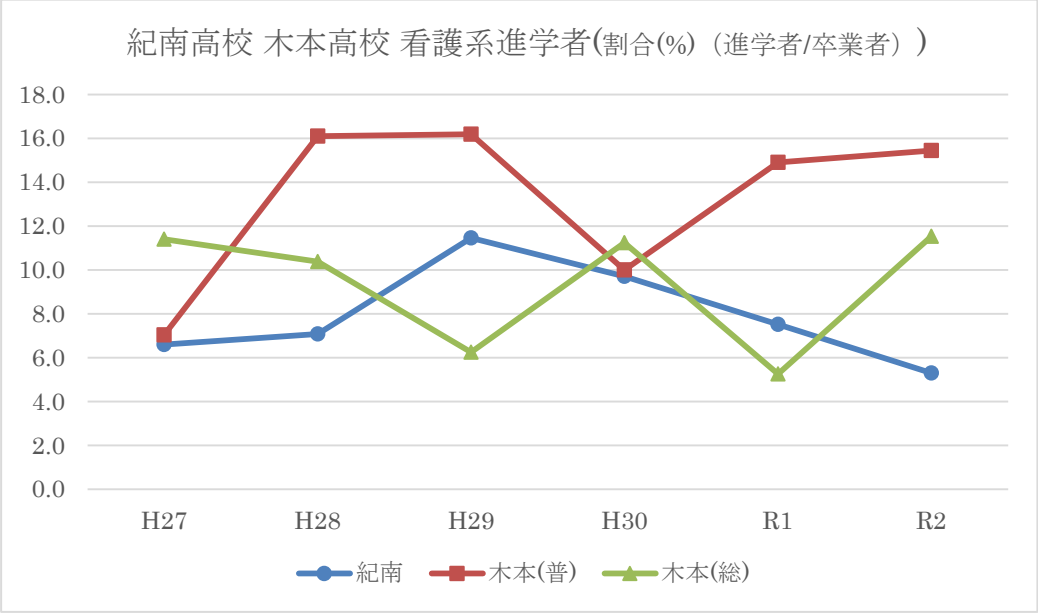
○　学校斡旋就職は 10 年連続 100%を達成しています。令和２年度は男子 10 名、女子６名の合計 16 名が地元で社会貢献したいという思いから、地元の東紀州地域(含近隣県外）への就職を志望し、金融機関、製造業、販売業、介護施設など他業種から内定を得ることができました。

○　東紀州地域の企業への就職内定者について、下記資料のように、地元就職者割合は減少傾向にあります。



○　将来、地元の医療に貢献したいと志望している生徒が毎年一定数おり、そのほとんどが看護学校に進学していますが、志望者・進学者が平成 27 年以降、減少傾向にあります。

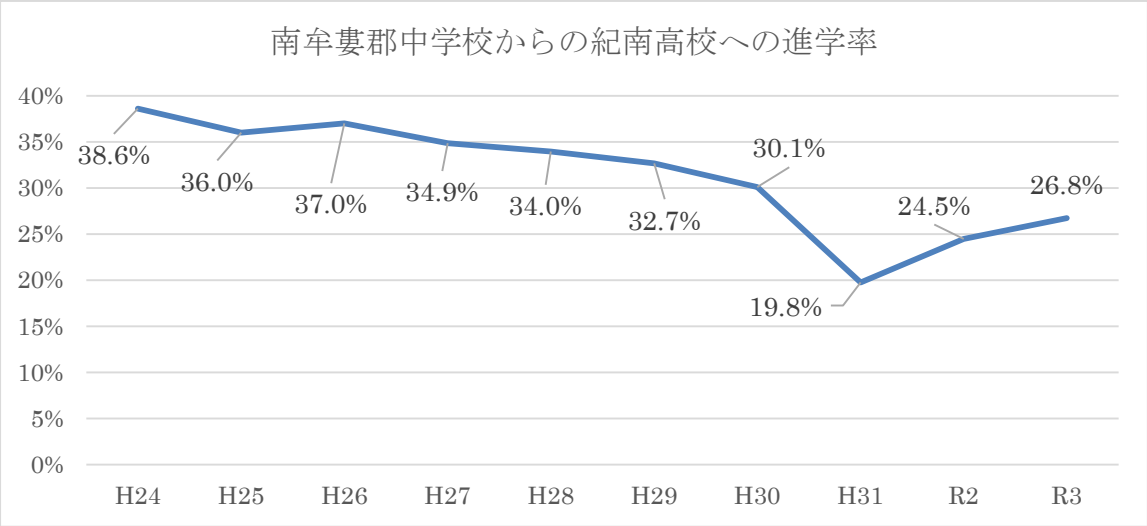




入学者の状況

入学年度	入学定員	12月調査	入学者選抜（志願者/募集定員）			入学者数	※うち県外中学出身者	欠員
			前期選抜	後期選抜	再募集			
H29	120	81	61/36	52/80	16/33	101	5	19
H30	120	68	56/36	42/84	2/42	80	2	40
H31	80	50	37/24	33/56	10/27	62	1	18
R2	80	46	45/24	26/53	7/28	57	5	23
R3	80	55	45/24	39/53	8/16	72	2	8

○　南牟婁郡中学校から紀南高校への進学率は、平成 24 年度から下降傾向であり、平成 31 年度から 30%台を下回っています。

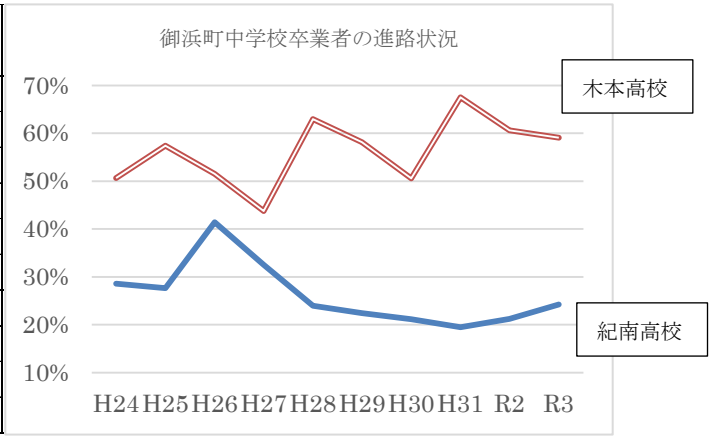


入学年度	紀南高校		木本高校		県外高専		南牟婁郡中学卒業者数
	南牟婁郡中学卒業者		南牟婁郡中学卒業者		全日高校		
H24	73	38.6%	78	41.3%	22	11.6%	189
H25	76	36.0%	92	43.6%	29	13.7%	211
H26	80	37.0%	100	46.3%	18	8.3%	216
H27	68	34.9%	77	39.5%	29	14.9%	195
H28	72	34.0%	107	50.5%	16	7.5%	212
H29	68	32.7%	97	46.6%	23	11.1%	208
H30	56	30.1%	81	43.5%	29	15.6%	186
H31	34	19.8%	104	60.5%	14	8.1%	172
R2	35	24.5%	74	51.7%	24	16.8%	143
R3	42	26.8%	79	50.3%	20	12.7%	157

○　現活性化期間前と比べ、熊野市からの紀南高校への進学率はほぼ横ばいですが、御浜町からの紀南高校への進学率は下降傾向です。また、紀宝町からの紀南高校への進学率は下降傾向が強く、平成 31 年度からは紀南高校よりも木本高校への進学率が高くなっています。

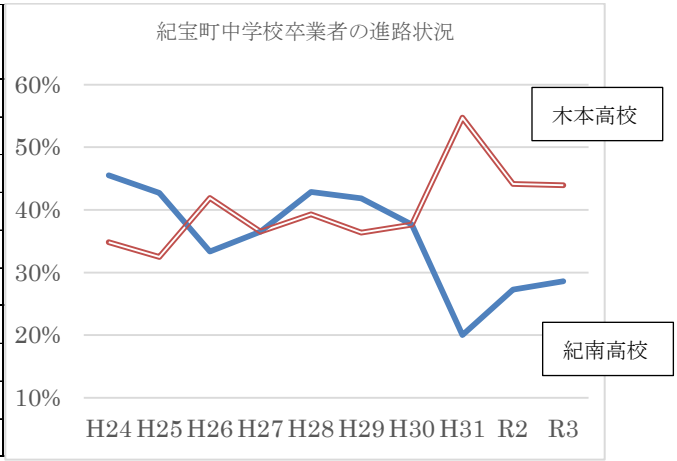
（御浜町中学校卒業者の進路状況）

入学年度	紀南高校		木本高校		県外高専		御浜町中学校卒業者数
	御浜町中学卒業者		御浜町中学卒業者		全日高校		
H24	22	28.6%	39	50.6%	9	11.7%	77
H25	26	27.7%	54	57.4%	9	9.6%	94
H26	41	41.4%	51	51.5%	1	1.0%	99
H27	26	32.5%	35	43.8%	11	13.8%	80
H28	24	24.0%	63	63.0%	6	6.0%	100
H29	22	22.4%	57	58.2%	4	4.1%	98
H30	18	21.2%	43	50.6%	15	17.6%	85
H31	15	19.5%	52	67.5%	2	2.6%	77
R2	14	21.2%	40	60.6%	9	13.6%	66
R3	16	24.2%	39	59.1%	6	9.1%	66



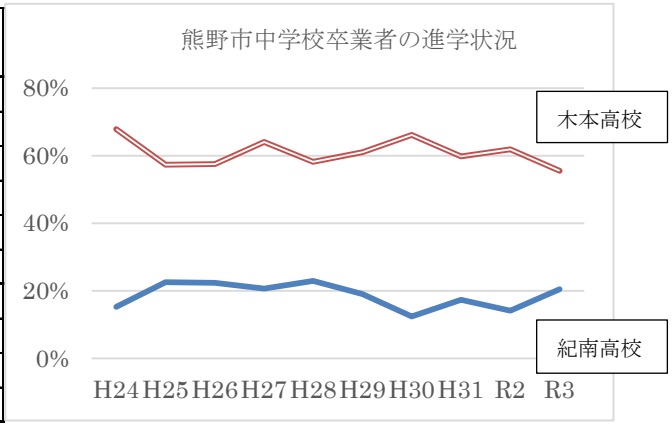
（紀宝町中学校卒業者の進路状況）

入学年度	紀南高校		木本高校		県外高専		紀宝町中学卒業者数
	紀宝町中学卒業者		紀宝町中学卒業者		全日高校		
H24	51	45.5%	39	34.8%	13	11.6%	112
H25	50	42.7%	38	32.5%	20	17.1%	117
H26	39	33.3%	49	41.9%	17	14.5%	117
H27	42	36.5%	42	36.5%	18	15.7%	115
H28	48	42.9%	44	39.3%	10	8.9%	112
H29	46	41.8%	40	36.4%	19	17.3%	110
H30	38	37.6%	38	37.6%	14	13.9%	101
H31	19	20.0%	52	54.7%	12	12.6%	95
R2	21	27.3%	34	44.2%	15	19.5%	77
R3	26	28.6%	40	44.0%	14	15.4%	91



（熊野市中学校卒業者の進路状況）

入学年度	紀南高校		木本高校		県外高専		熊野市中学卒業者数
	熊野市中学卒業者		熊野市中学卒業者		全日高校		
H24	29	15.3%	129	67.9%	12	6.3%	190
H25	35	22.6%	89	57.4%	12	7.7%	155
H26	37	22.4%	95	57.6%	15	9.1%	165
H27	30	20.7%	93	64.1%	11	7.6%	145
H28	32	23.0%	81	58.3%	7	5.0%	139
H29	25	19.1%	80	61.1%	8	6.1%	131
H30	18	12.4%	96	66.2%	10	6.9%	145
H31	23	17.4%	79	59.8%	9	6.8%	132
R2	16	14.2%	70	61.9%	9	8.0%	113
R3	24	20.5%	65	55.6%	11	9.4%	117



東紀州地域　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）

令和３年５月１日教育政策課調べ

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
尾鷲市	卒業者数	128	122	118	130	127	120	119	114	99	123	89	85	69
	前年度対比		-6	-4	12	-3	-7	-1	-5	-15	24	-34	-4	-16
	R3.3対比					-3	-10	-11	-16	-31	-7	-41	-45	-61
北牟婁郡	卒業者数	153	115	110	112	121	98	93	78	93	80	73	85	74
	前年度対比		-38	-5	2	9	-23	-5	-15	15	-13	-7	12	-11
	R3.3対比					9	-14	-19	-34	-19	-32	-39	-27	-38
小計	卒業者数	281	237	228	242	248	218	212	192	192	203	162	170	143
	前年度対比		-44	-9	14	6	-30	-6	-20	0	11	-41	8	-27
	R3.3対比					6	-24	-30	-50	-50	-39	-80	-72	-99
熊野市	卒業者数	145	132	113	117	120	102	111	97	101	105	106	123	98
	前年度対比		-13	-19	4	3	-18	9	-14	4	4	1	17	-25
	R3.3対比					3	-15	-6	-20	-16	-12	-11	6	-19
南牟婁郡	卒業者数	186	172	143	157	150	160	153	134	138	128	134	135	106
	前年度対比		-14	-29	14	-7	10	-7	-19	4	-10	6	1	-29
	R3.3対比					-7	3	-4	-23	-19	-29	-23	-22	-51
小計	卒業者数	331	304	256	274	270	262	264	231	239	233	240	258	204
	前年度対比		-27	-48	18	-4	-8	2	-33	8	-6	7	18	-54
	R3.3対比					-4	-12	-10	-43	-35	-41	-34	-16	-70
東紀州合計	卒業者数	612	541	484	516	518	480	476	423	431	436	402	428	347
	前年度対比		-71	-57	32	2	-38	-4	-53	8	5	-34	26	-81
	R2.3対比					2	-36	-40	-93	-85	-80	-114	-88	-169

《参考》

木本高校	募集定員	200	200	160	160	160
	欠　員	10	0	2	0	―
紀南高校	募集定員	120	80	80	80	80
	欠　員	40	18	23	8	―
学級数	木本・紀南	５・３	５・２	４・２	４・２	４・２

○　地域の中学卒業者数が減少傾向にあるなかで、毎年一割程度の県外全日制高校および高専への流出があります。

入学年度	県外全日制高校および高専		紀南地域中学卒業者数
H29	31	9.1%	339
H30	39	11.8%	331
H31	24	7.9%	304
R2	33	12.9%	256
R3	31	11.3%	274

○　平成 31 年度入試から「保護者の転住を伴わない県外からの入学志願」制度を導入しました。これを利用し和歌山県の生徒が、平成 31 年度１名、令和２年度５名、令和３年度１名入学しています。また、令和３年度入試からはこの制度を学校独自に「まごターン入学」と名づけ、地域に案内をしたところ、愛知県から１名の入学者がありました。

協議のまとめ

紀南高校は、平成１９年に高校では三重県初、全国でも２番目（３校目）にコミュニティ・スクールに指定され、紀南地域の方々の支援を得ながら、年間を通じたインターンシップを教育課程に導入するとともに、特色ある授業として「東紀州学」や「地域産業とみかん」を実施するなど地域と連携した取組を進めてきました。また、福祉関連の教育課程も設置し介護士へと進む人材の育成を行うとともに、看護学校等への進学を目指す生徒への学習指導に力を入れるなど、地域医療や福祉に貢献できる人材の育成にも一定数の成果を出してきました。さらに、地域の様々な職業の方と将来について語り合う対話集会を実施し、キャリア教育の推進を図るとともに、地域で生徒が貢献するボランティア活動や小中学校との連携を通じて、地域における高校生の活躍の場を広げてきました。これらの取組については、御浜町・紀宝町全戸に配付される広報誌とともに、コミュニティ通信「紀南の風」として年２～３回配付するとともに、地域の新聞社やケーブルテレビにも常に学校の話題を提供し、ニュースに取り上げてもらうなどして地域に積極的に情報発信しています。

そうした成果として、地域の方々からも紀南高校はよく頑張っているといった評価の声を聞くことも多く、特色ある取組に参加したいと希望して紀南高校を選択する中学生も一定数いることから、ある程度の入学者数を確保してきましたが、少子化が進行する中で、定員を超えるまでの入学者の増加にはつながっていない状況です。熊野市・南牟婁郡の中学生は、地元を離れる一定数を除けば、多くは古くからの伝統を持つ木本高校を目指す傾向があると考えられます。

紀南高校は現在１学年２学級規模の学校となり３年目を迎えました。この間、教員定数が１０名ほど減り、授業、校務分掌、部活動等の業務に困難が生じています。生徒の進路のニーズに応じた教育課程の実施に向け、単位制高校として多様な選択科目を設定していましたが、担当する教員が限られる状況もあり科目数を削減するなど対応をしています。「地域産業とみかん」のように特色ある設定科目では、体験活動の良さがうまく伝えられなかったこと、他にも多数ある選択科目が自分の進路に結び付けた選択には至らなかったこと、全体の生徒数も減少したことなどが影響し、選択生徒が激減するなど今後の開講が危ぶまれる状態となっています。部活動についても団体チームが組めない状況が生じ、削減などしています。今後少子化がさらに進む中で、入学者定員の減があれば現在の教育内容の維持が難しく、大幅な教育課程の改編や取組の削減を行わざるをえなくなり、特色ある教育活動の縮小は必至となります。

紀南地域の将来の生徒数については、最近の出生数を考えても厳しい状況といえます。高校だけでなく地域の子どもたちの学びをどうするのか、地域・市町はどう支援するのかを考えることが重要です。その上で、紀南地域全体の学校規模と配置について、今後のあり方を協議・検討する必要があると考えます。

令和３年度　紀南高校活性化プラン（第二次）に係る活動指標・成果指標について

＜活性化の方向性１＞　地域への理解を深め、課題解決に向かう姿勢を育む学習の推進

生徒が地域の一員として役立つことを実感し、自己肯定感・有用感を高め、積極的にコミュニケーションを図ることができるよう能力を育成するとともに、地域への理解を深め、地域への愛着を育むことができるよう、地域を学びの場とした学習を体系的に推進します

□活動指標

① 地域を扱った授業時間における地域の講師による授業が年間１５回以上
② 東紀州学におけるフィールドワークが年６回以上
③ 地域との合同避難訓練の回数が年１回以上
④ 地域イベントへの年間参加の延べ人数が１００人以上

□成果指標

① 生徒の希望職種での就労体験が８割以上
② 生徒へのアンケートで「地域への理解が深まった」等の回答が９割以上
③ 生徒へのアンケートで「この地域が好き」等の回答が２～３年次で９割以上
④ 地域の学習成果をまとめた冊子を年１回発行

＜活性化の方向性２＞　幅広い学力層の生徒の進路希望実現に向けた個に応じた指導

地元就職率の高い看護系への進学、地元企業をはじめとした就職など、幅広い学力層の生徒の大学・専門学校への進学希望や就職希望の実現を目指し、個々の生徒に応じた丁寧な進路指導の向上を図ります

□活動指標

① 進学希望者への課外補講を年間２００時間以上実施
② 地元商工会等と連携した企業説明会の実施または説明会への参加を年３回以上
③ 教員が授業研究を伴う研修に一人当たり年間５回以上参加

□成果指標

① 看護系進学希望者のうち８割以上の合格
② 生徒へのアンケートで、「授業がよくわかる」等の回答が８割以上
③ 国語・数学・英語がＤ３（ＧＴＺ）相当の生徒の割合を入学時から２年間で半減

＜活性化の方向性３＞　学校の魅力を広く発信

中学生が目的意識を持って、本校を志望することにつながるよう、生徒による学習成果を発表する機会を充実するとともに、進学指導や就職指導の魅力を広く地域に発信します

□活動指標

① 高校生による学習成果等の情報発信を実施
　○ 小中学校での発表（インターンシップ体験など）年４回以上
　○ 学習成果発表会（ＰＢＬ）年１回
② 紙媒体、ブログ等の発信　合計で年４０回以上
③ 「きなん俳句コンクール」の応募総数のべ５００句以上
④ 「孫ターン入学」のＰＲを３回以上
⑤ 高校教員による小中学校等での出前授業の実施を年１回以上

資料１０

部活動の現状と課題

【木本高校】

本校の教育活動において、部活動は大きな柱のひとつと捉えていますが、学級数減に伴う教員定数の減少により、従来の部活動数を維持することは不可能で、部活動数を削減せざるを得ない状況となっています。しかしながら、部員数が充当している部活動ばかりであったことから、近年の部員数の推移や実績等を総合的に判断して削減や統合を進めています。

令和２年度には、ソフトテニス部は男女別々の部活動であったものを統合して一つの部とするとともに、空手道部を廃部としました。また、文化系では、美術部と漫画研究部を統合し、自然科学部とＥＳＳを廃部としました。令和３年度は、柔道部と剣道部を統合して柔道・剣道部とし、文化系では茶道部と書道部を統合して、伝統文化部としました。更に、令和４年度は３年生の引退をもって、男子バレーボール部と女子バスケットボール部の廃部を予定しているため、両部は令和３年度より新入部員の募集を停止しており、文化系では、写真部の伝統文化部への統合を予定しています。

本校では、部顧問の担当を原則一人一部としているため、部員数の多い運動系の部活動も顧問数二人という現状です。どの部活動も活発に活動していますので、安易に複数部活動兼務とするのも、教員の負担増に繋がるものと予想されます。部活動指導を地域や外部指導者に委ねる方向も示されつつありますが、現時点では直接教員の負担減が具体的に進むには至っていません。今後の部活動の維持と教員の負担には大きな課題があると考えています。

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和元年度	１５部	２６４人	１０部	１９９人	５８０人	１５組
令和２年度	１３部	２２６人	７部	１６８人	５４５人	１４組
令和３年度	１２部	２４３人	６部	１６９人	５１５人	１３組

（参考）令和４年度：運動部数１２部、文化部数５部
令和５年度：運動部数１０部、文化部数５部　の予定

【紀南高校】

紀南高校では、運動部と文化部で毎年１部ずつ減少している状況で、学級減に伴う生徒数の減少は、活気ある部活動の制約をもたらしています。定員割れも続き、入部者の減少も深刻で、今後の部活動を維持していくことに大きな課題があります。

運動部では、特に団体競技で部員が集まらず、合同チームを結成しようにも、他校が遠方で編成が難しいため、令和元年度にサッカー部が、令和２年度には女子バレーボール部がやむを得ず廃部となりました。今年度も３年次生が引退すると、他校との合同チームを組まざるを得ない状態が続いています。野球部では、鳥羽高校、志摩高校、南伊勢高校４校合同でチームを組んで練習を行っていますが、他校に行くだけで

も時間がかかり、顧問の引率等働き方の面でも大きな課題となってます。男子バスケットボール部も今夏の大会で３年次生が引退すると単独チームが組めない状態で、全ての運動部において、各部の所属人数は、３学年併せても１１人以下となっています。

また、文化部においても、９部すべてが３学年併せて１１人以下の部員数で、ＥＳＳ部とワープロでは部員各１名、書道部も２名で存続している現状です。週１回だけ活動している部活動も多い状態ですが、生徒の欠席等で毎週活動できている訳ではありません。

そのような状況下で、今年度の１年次生は定員の９割の７２名が入学し、全体の約６０％にあたる４３名が部活動に加入してます。学校生活に意欲的な生徒が多いため、今後様々な場面で活躍してくれることを期待しています。

しかし、今後の部活動の維持と教員の負担には大きな課題があると言わざるを得ません。

	運動部数	運動部員数	文化部数	文化部員数	全校生徒数	全学級数
令和元年度	９部	７９人	１０部	８０人	２３６人	８組
令和２年度	８部	５８人	１０部	５２人	１９３人	７組
令和３年度	７部	５１人	９部	３６人	１７６人	６組

資料 11

令和３年度の協議について

１　協議の進め方

少子化の急激な進行とともに、予測することが困難であるほど社会情勢が大きく変化する中で、子どもたちを取り巻く教育的課題はより複雑化・多様化しています。さらに昨年来のコロナ禍により、学校のあり方や教育そのものの意義も問われている状況です。そのような中、これからの時代を生きていく高校生にどのような力を育み、本県の県立高校でどのような教育を進めるべきかなど、これからの三重の高校教育のあり方について検討していく必要があります。

こうした本県の県立高校の将来像については、「三重県教育改革推進会議」を中心に議論・整理していくとともに、既存の高校教育の枠にとらわれない幅広で多様な観点・角度から調査し考察を加えるため、昨年度より「県立高等学校みらいのあり方検討委員会」を設置して、検討を重ねてまいりました。今年度は次期「県立高等学校活性化計画」（令和４年度から５年間）の策定に向けて具体的な審議を進めています。

令和３年度の紀南地域の協議会においては、昨年度からの高校生に育みたい力や今後の地域の高校のあり方に関する協議を引継ぎつつ、紀南高校活性化協議会で行われた活性化の総括的な検証をふまえて、これからの紀南地域において、子どもたちの学習環境をよりよくするため、望ましい学習内容や規模と配置等について協議していきます。

２．これまでの協議と課題

※参考資料参照

（１）当協議会は、平成２４年度の協議会のまとめにおいて、「将来的に、地域状況を考慮し、紀南高校が１学年２学級、もしくは木本高校が１学年５学級を維持できないとき、両校の統合は避けられない」とし、平成２５～２７年度にはこのことを踏まえた協議を行ってきました。平成２８年度の協議においては、両校を存続させることを望む意見が改めて出されたこと、また平成２９年度を始期とする「県立高等学校活性化計画」において、「１学年２学級以下の高等学校において、協議会を設置し、地域と一体となった活性化に取り組む」との新たな方向性が示されたことにより、平成２９～令和２年度には、紀南地域の中学校卒業者の動向等を共有しながら、両校の活性化に向けた主な取組について協議してきました。

（２）木本高校は、サポート委員会（学校関係者評価委員会）を活用するなど地域や地元行政との連携を強化し、進学や部活動へのニーズや期待に応えることをはじめとした教育活動の充実に努めています。

（３）紀南高校は、上述の「県立高等学校活性化計画」に基づく活性化協議会を設置して、地域と一体となった活性化に取り組むとともに、令和元年度からは「地域課題解決型キャリア教育モデル構築事業」を実施して、地域と連携した学習活動を進めています。

（４）熊野市・南牟婁郡中学校から、大学進学や部活動を目的として、毎年 40～50 人ほどの中学生が、県内の地域外や和歌山県を中心とした県外の高校へ進学しています。

（5）両校が活性化を進めるなか、入学者選抜においては、地域の中学校卒業者が減少していることや県外や県内他地域の高校・高専への進学者の影響により、欠員を生じる状況にあります。特に令和７年度、および令和 12 年度の当地域の中学校卒業者数の減少を勘案すると、生徒の学びを保障するための紀南地域の高等学校のあり方について、協議を進めて方向性を示していく必要があります。

３．協議会の開催予定

（1）第１回協議会（８月２０日）
- 紀南地域の県立高等学校の今後のあり方について①
- その他

（2）第２回協議会（９月末頃）
- 紀南地域の県立高等学校の今後のあり方について②
- その他

（3）第３回協議会（11 月頃）
- 紀南地域の県立高等学校の今後のあり方について③
- その他

（4）第４回協議会（２月）
- 紀南地域の県立高等学校の今後のあり方について④
- 「協議のまとめ」の作成に向けて
- その他

（5）第５回協議会（３月）
- 「協議のまとめ」の確認と来年度の協議に向けて
- その他

資料12

東紀州地域　中学校卒業者数の推移と予測（含社会増減）

令和3年5月1日 教育政策課調べ

		H 30.3 卒業	H 31.3 卒業	R 2.3 卒業	R 3.3 卒業	R 4.3 現中3	R 5.3 現中２	R 6.3 現中１	R 7.3 現小６	R 8.3 現小５	R 9.3 現小４	R 10.3 現小３	R 11.3 現小２	R 12.3 現小１
尾鷲市	卒業者数	128	122	118	130	127	120	119	114	99	123	89	85	69
	前年度対比		−6	−4	12	−3	−7	−1	−5	−15	24	−34	−4	−16
	R3.3対比					−3	−10	−11	−16	−31	−7	−41	−45	−61
北牟婁郡	卒業者数	153	115	110	112	121	98	93	78	93	80	73	85	74
	前年度対比		−38	−5	2	9	−23	−5	−15	15	−13	−7	12	−11
	R3.3対比					9	−14	−19	−34	−19	−32	−39	−27	−38
小計	卒業者数	281	237	228	242	248	218	212	192	192	203	162	170	143
	前年度対比		−44	−9	14	6	−30	−6	−20	0	11	−41	8	−27
	R3.3対比					6	−24	−30	−50	−50	−39	−80	−72	−99
熊野市	卒業者数	145	132	113	117	120	102	111	97	101	105	106	123	98
	前年度対比		−13	−19	4	3	−18	9	−14	4	4	1	17	−25
	R3.3対比					3	−15	−6	−20	−16	−12	−11	6	−19
南牟婁郡	卒業者数	186	172	143	157	150	160	153	134	138	128	134	135	106
	前年度対比		−14	−29	14	−7	10	−7	−19	4	−10	6	1	−29
	R3.3対比					−7	3	−4	−23	−19	−29	−23	−22	−51
小計	卒業者数	331	304	256	274	270	262	264	231	239	233	240	258	204
	前年度対比		−27	−48	18	−4	−8	2	−33	8	−6	7	18	−54
	R3.3対比					−4	−12	−10	−43	−35	−41	−34	−16	−70
東紀州合計	卒業者数	612	541	484	516	518	480	476	423	431	436	402	428	347
	前年度対比		−71	−57	32	2	−38	−4	−53	8	5	−34	26	−81
	R3.3対比					2	−36	−40	−93	−85	−80	−114	−88	−169

≪参考≫

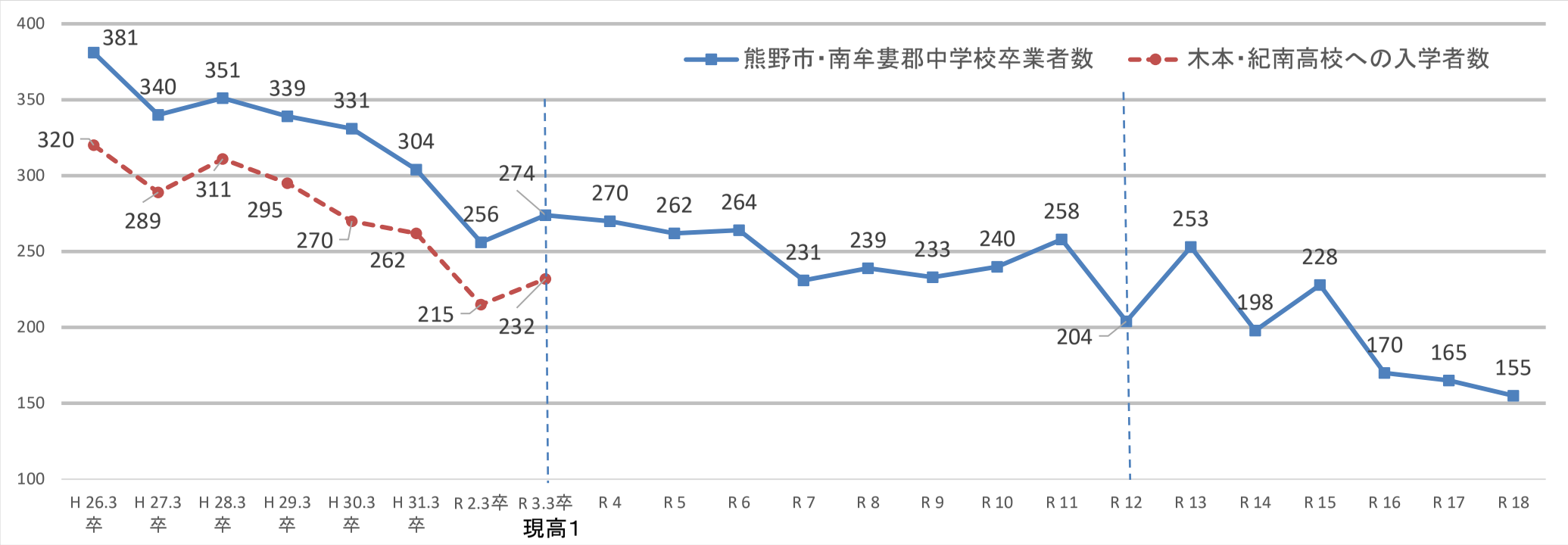
木本高校	募集定員	200	200	160	160	160
	欠　　員	10	0	2	0	—
紀南高校	募集定員	120	80	80	80	80
	欠　　員	40	18	23	8	—
学級数	木本・紀南	５・３	５・２	４・２	４・２	４・２

紀南地域の入学定員の推移予測	Ｒ４年度	Ｒ５年度	Ｒ６年度	Ｒ７年度	Ｒ８年度	Ｒ９年度	Ｒ10年度	Ｒ11年度	Ｒ12年度
	６学級	６学級程度	６学級程度	５学級程度	５学級程度	５学級程度	５学級程度	５学級程度	４学級程度

資料13

熊野市・南牟婁郡中学校卒業者数（予測）と木本・紀南両高等学校への入学者数

※R13年度以降は地域の出生数を記載



熊野市・南牟婁郡の出生数

	H26年度出生 現小1	H27年度出生 5～6才	H28年度出生 4～5才	H29年度出生 3～4才	H30年度出生 2～3才	R元年度出生 1～2才	R2年度出生 0～1才
熊野市	98	99	73	108	60	87	82
御浜町	47	52	42	45	39	25	20
紀宝町	67	102	83	75	71	53	53
合　計	212	253	198	228	170	165	155

1. 木本・紀南両高等学校への入学者人数は、熊野市・南牟婁郡中学校卒業者数と比較すると、地域外へ進学する生徒や就職する生徒等が一定存在することから、毎年40人～50人少ない状況です。この状況のまま推移すると、両校への入学者数は令和7年度には5学級規模、令和12年度には4学級規模となることが見込まれます。
2. 令和7年度に両校への入学者数が5学級規模となるとした場合、中学校卒業予定者の進路選択をふまえると、令和7年度以降の当地域における県立高等学校のあり方について協議を進め、方向性を示していく必要があります。

資料 14①

東紀州地域の高等学校への進学希望状況比較と入学者数（令和２年７月・１２月希望調査と令和３年度の入学者数）

〈全日制課程〉 R3.3卒

高等学校名	人数	R２入学定員	令和２年の希望調査と令和３年度の入学者数（人数） 各地域別の進学希望と入学人数 熊野市 ７月	熊野市 １２月	熊野市 入学数	御浜町 ７月	御浜町 １２月	御浜町 入学数	紀宝町 ７月	紀宝町 １２月	紀宝町 入学数	入学数小計		尾鷲市 ７月	尾鷲市 １２月	尾鷲市 入学数	紀北町 ７月	紀北町 １２月	紀北町 入学数	入学数小計	入学数合計
木本高校		160	79	72	65	51	40	39	49	44	40	144	210	8	9	9	7	4	5	14	158
紀南高校		80	15	17	24	10	14	16	20	23	26	66		0	1	2	0	0	2	4	70
尾鷲高校		200	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		102	92	90	65	68	70	160	160
東紀州地域の計		440	94	89	89	61	54	55	69	67	66	210		110	102	101	72	72	77	178	388
県内	管外県立高校		6	5	5	1	2	1	0	0	0	6	50	5	8	8	26	23	19	27	33
県内	管外私立高校		4	1	1	1	3	3	2	4	4	8		4	4	4	6	10	9	13	21
県内	管外高専		4	4	3	1	2	1	1	1	1	5		3	3	2	1	1	1	3	8
県外	県外高校・高専		5	10	11	1	5	6	14	14	14	31		7	5	5	1	0	0	5	36
県外	（うち和歌山県）※				(9)			(6)			(12)	(27)				(0)			(0)	(0)	(27)
その他（定時制/通信制/就職など）			6	8	8	0	0	0	4	4	6	14		1	8	10	6	6	6	16	30
回答・入学者数の計			119	117	117	65	66	66	90	90	91	274		130	130	130	112	112	112	242	516
卒業者数（人数）					117			66			91	274				130			112	242	516

※和歌山県への進学

（公）新宮高校１人
（公）熊野高校１人
（私）近大新宮高校７人

（私）近大新宮高校６人

（公）和歌山工業高専１人
（私）近大新宮高校１１人

＜参考＞　東紀州地域外の全日制高校・高専への進学者数とその理由

【調査対象】令和3年3月の中学校卒業者 【調査方法】教育政策課による各中学校（熊野市・御浜町・紀宝町）への聞き取り

		主たる進学理由 大学進学	部活動（*）	就職	その他
3市町合計	50	22	23	3	2
（うち近大新宮）	(24)	(18)	(6)	(0)	(0)

＊部活動の種類

野球、サッカー、ソフトテニス、バスケットボール、卓球、ソフトボール、ダンス

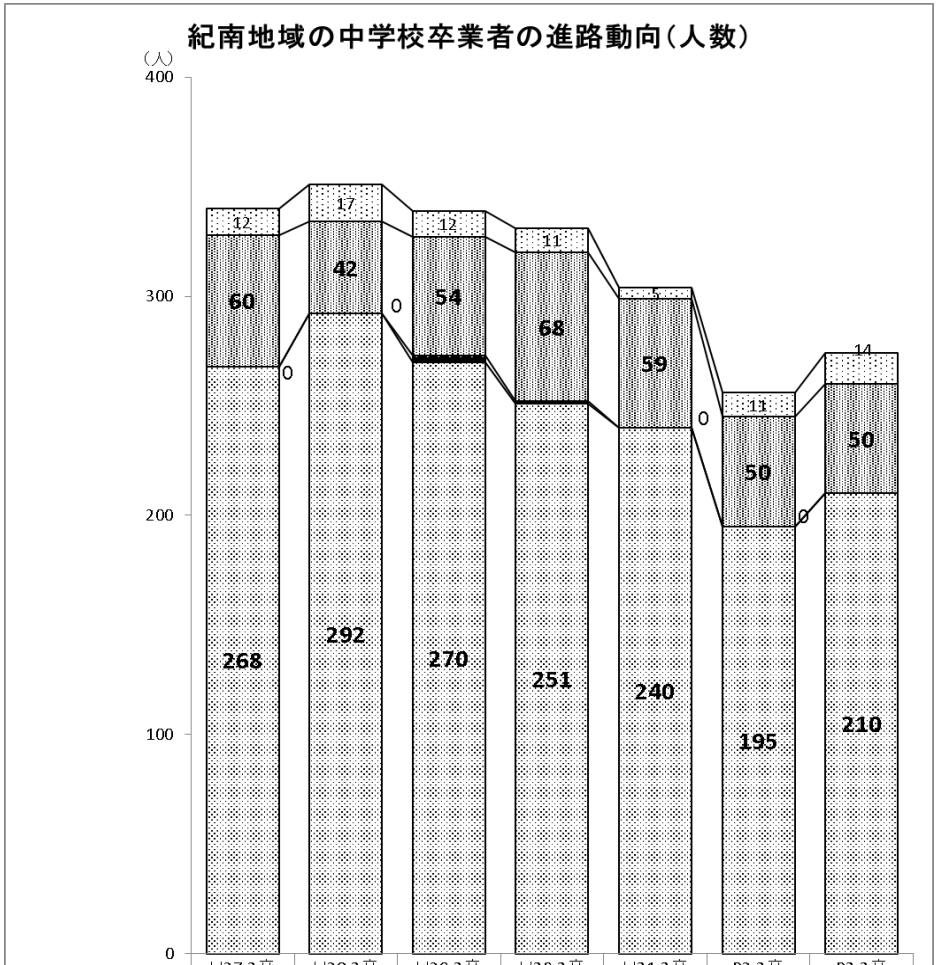
東紀州地域の高等学校への進学希望状況比較と入学者数（令和２年７月・１２月調査と令和３年度の入学者数）の地域別割合（%）

〈全日制課程〉 R3.3卒

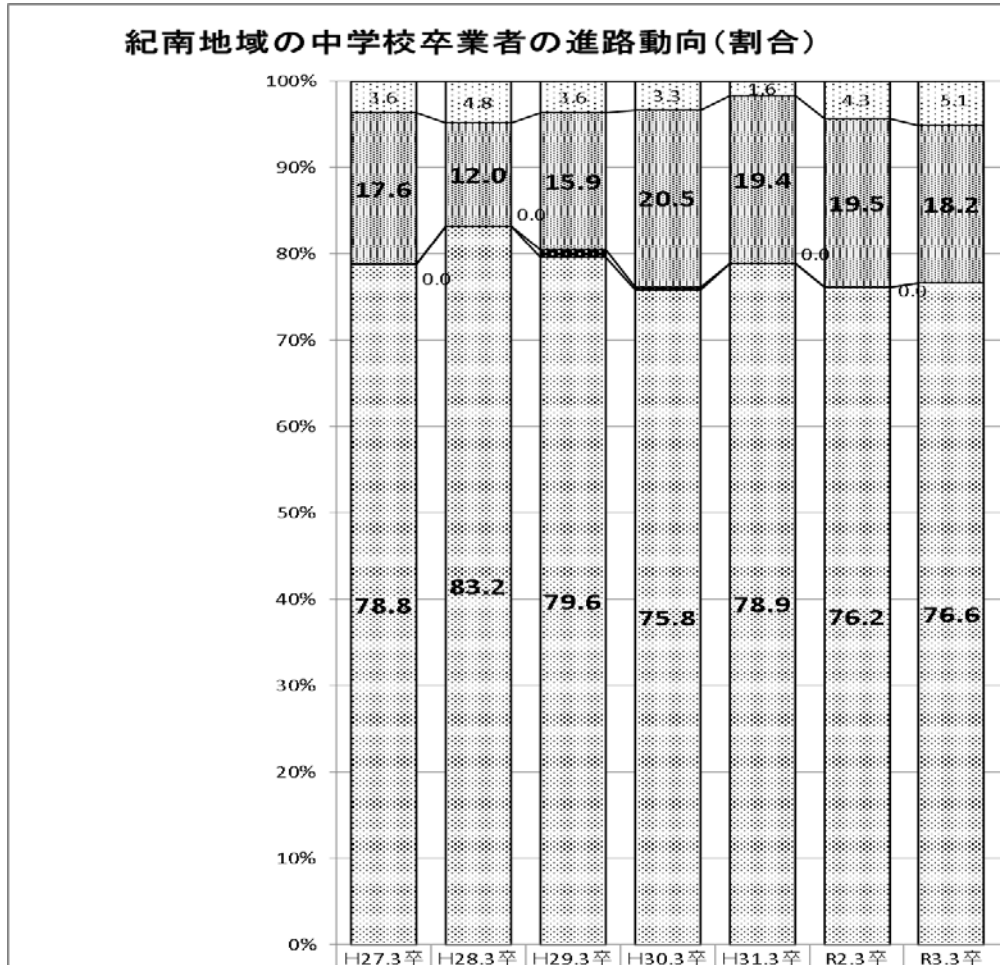
高等学校名	割合%	R２入学定員	令和２年の希望調査と令和３年度の入学者数の地域別卒業者数に対する割合（%）																		
			各地域別の進学希望と入学の割合																		
			熊野市			御浜町			紀宝町			入学数小計		尾鷲市			紀北町			入学数小計	入学数合計
			７月	１２月	入学数	７月	１２月	入学数	７月	１２月	入学数			７月	１２月	入学数	７月	１２月	入学数		
木本高校		160	66.4	61.5	55.6	78.5	60.6	59.1	54.4	48.9	44.0	52.6	76.6	6.2	6.9	6.9	6.3	3.6	4.5	5.8	30.6
紀南高校		80	12.6	14.5	20.5	15.4	21.2	24.2	22.2	25.6	28.6	24.1		0.0	0.8	1.5	0.0	0.0	1.8	1.7	13.6
尾鷲高校		200	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		78.5	70.8	69.2	58.0	60.7	62.5	66.1	31.0
東紀州地域の計		440	79.0	76.1	76.1	93.8	81.8	83.3	76.7	74.4	72.5	76.6		84.6	78.5	77.7	64.3	64.3	68.8	73.6	75.2
県内	管外県立高校		5.0	4.3	4.3	1.5	3.0	1.5	0.0	0.0	0.0	2.2	18.2	3.8	6.2	6.2	23.2	20.5	17.0	11.2	6.4
	管外私立高校		3.4	0.9	0.9	1.5	4.5	4.5	2.2	4.4	4.4	2.9		3.1	3.1	3.1	5.4	8.9	8.0	5.4	4.1
	管外高専		3.4	3.4	2.6	1.5	3.0	1.5	1.1	1.1	1.1	1.8		2.3	2.3	1.5	0.9	0.9	0.9	1.2	1.6
県外	県外高校・高専		4.2	8.5	9.4	1.5	7.6	9.1	15.6	15.6	15.4	11.3		5.4	3.8	3.8	0.9	0.0	0.0	2.1	7.0
	（うち和歌山県）※				7.7			9.1			13.2	9.9				0.0			0.0	0.0	5.2
その他（定時制/通信制/就職など）			5.0	6.8	6.8	0.0	0.0	0.0	4.4	4.4	6.6	5.1		0.8	6.2	7.7	5.4	5.4	5.4	6.6	5.8
回答・入学者数の割合の計			100	100	100	100	100	100	100	100	100	100		100	100	100	100	100	100	100	100
卒業者数（人数）					117			66			91	274				130			112	242	516

紀南地域の中学校卒業者の進路動向

資料14②



	H27.3卒	H28.3卒	H29.3卒	H30.3卒	H31.3卒	R2.3卒	R3.3卒
中学校卒業者数	340	351	339	331	304	256	274
その他（定・通・就など）	12	17	12	11	5	11	14
県内他地域 県外	60	42	54	68	59	50	50
尾鷲	0	0	3	1	0	0	0
木本・紀南	268	292	270	251	240	195	210



	H27.3卒	H28.3卒	H29.3卒	H30.3卒	H31.3卒	R2.3卒	R3.3卒
その他（定・通・就など）	3.6	4.8	3.6	3.3	1.6	4.3	5.1
県内他地域 県外	17.6	12.0	15.9	20.5	19.4	19.5	18.2
尾鷲	0.0	0.0	0.9	0.3	0.0	0.0	0.0
木本・紀南 尾鷲 県内他地域 県外その他（定・通・就など）	78.8	83.2	79.6	75.8	78.9	76.2	76.6

参考資料

平成２８年度協議のまとめ

平成２９年２月
紀南地域高等学校活性化推進協議会

１　平成２７年度までの経緯

（１）平成１６～１８年度

紀南地域では、少子化の進行等の社会状況の変化に対応するため、平成１６年度に「紀南地域高等学校再編活性化推進協議会」（学識経験者、教育関係者、地域関係者等から構成）が県教育委員会により設置され、木本高校・紀南高校のあり方について協議が行われました。そして、「木本高校で６学級、紀南高校で３学級が維持できなくなった場合、①２学級規模の分校方式の導入、又は②６～８学級規模の高校として統合することを検討する」とするとともに、木本高校、紀南高校それぞれの再編活性化方針がまとめられ、両校で活性化の取組が進められてきました。

（２）平成２４年度

平成２４年度には、さらなる少子化の進行や両校の欠員の状況等にともない、翌年度の木本高校の募集定員が１学級減の５学級となったことから、「紀南地域高等学校活性化推進協議会（以下「協議会」という。）」が設置され、両校の特色化・魅力化について協議するとともに、将来的なあり方について、次のとおりとりまとめました。

○　紀南高校は１学年２～３学級、木本高校は１学年５～６学級の規模の単独校として、それぞれが存続することが望ましい。
○　将来的に、地域状況を考慮し、紀南高校が１学年２学級、もしくは、木本高校が１学年５学級の維持ができないとき、両校の統合は避けられない。

（３）平成２５～２７年度

平成２５～２７年度は、平成２４年度のとりまとめをふまえ、当地域の中学校卒業者が地域の県立高校で学べるようにという視点からの両校の活性化、生徒の進路実現につながる「学力の向上」を核とした小・中・高連携について協議しました。

また、両校それぞれの存続が難しい場合に、統合して新たに設置する高校の学校像については、十分に時間をかけて協議する必要があるとの意見が出されたことを受け、平成２６年度からは、将来的に新たな高校を設置する場合の学校像についての協議を行い、その方向性をまとめました。

このまとめをもとに、「紀南地域新高等学校構想ワーキング会議」（両校教職員代表者で構成、平成２８年１月設置）で、具体的な検討を進め、平成２８年度の協議会では、その検討をふまえた協議を行うこととしました。

なお、将来的に新たな高校を設置する場合の設置場所については、各委員（所属団体を含む）への意見集約をふまえ、「現木本高校の校地」、「現紀南高校の校地」、「熊野市内の高台地域」、「御浜町内の高台地域」の４つについて、通学所要時間、年間交通費、部活動後の下校条件、デュアルシステムの取組、進路にかかる状況予想、生徒の活動、防災関係、地域振興の観点から検討を行いました。

県教育委員会では、既存の教育財産の活用が原則とされていますが、津波等防災面への配慮、いずれの校地を活用しても一部生徒が遠距離通学となること等から、

委員からは現在の両校の中間的な位置に設置することが望ましいとする意見が多数出されました。また、やむを得ず既存の教育財産を活用する場合には、津波等防災面での安全対策や、生徒の学習環境の一層の充実を図るために必要な改修・整備等を講じることが必要であるとの意見もありました。

２　当地域の県立高校を取り巻く状況

（１）中学校卒業者数の推移と予測

三重県の中学校卒業者数は平成３３年３月までの５年間で大きく減少することが見込まれています。

【三重県の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増）】

	H17.3 卒業		**H28.3 卒業**	H29.3 卒業		H33.3 卒業
中学校卒業者数	19,302 人		**17,848 人**	17,514 人		15,680 人
H28.3 対比	―――		―――	▲334 人		▲2,168 人

少子化の進行状況は地域ごとに異なっていますが、紀南地域においては平成３１年３月以降、２年連続して大きく減少することが見込まれています。

【紀南地域の中学校卒業者数の推移と予測（含社会増）】

	H17.3 卒業		**H28.3 卒業**	H29.3 卒業	H30.3 卒業	H31.3 卒業	H32.3 卒業	H33.3 卒業	H34.3 卒業	H35.3 卒業	H36.3 卒業	H37.3 卒業
中学校卒業者数	456 人		**351 人**	340 人	333 人	303 人	257 人	278 人	278 人	270 人	270 人	234 人
前年度対比	――		――	▲11 人	▲ 7 人	▲30 人	▲46 人	21 人	0 人	▲ 8 人	0 人	▲ 36人
H28.3 対比	――		――	▲11 人	▲18 人	▲48 人	▲94 人	▲73 人	▲73 人	▲81 人	▲81 人	▲117人
学級数 (*1)	10 学級		**8 学級**	8 学級	7~8 学級	6~7 学級	6 学級程度					5~6 学級

＊１：平成２９年３月以降は、中学校卒業者の進路選択状況が現在と大きく変わらない場合の予測

（２）県内他地域や県外の高校等への進学状況

中学校卒業者の一定数が、県内他地域や県外の高校等へ進学していますが、平成２８年度は減少しました。

平成２６年度（H26.3 卒業）　５９人（うち和歌山県の私立高校　２２人）
平成２７年度（H27.3 卒業）　６０人（うち和歌山県の私立高校　３０人）
平成２８年度（H28.3 卒業）　４２人（うち和歌山県の私立高校　１５人）

（３）小学校卒業者の進学状況

中学校入学時点で、小学校卒業者の一定数が和歌山県の私立中高一貫教育校に進学していますが、平成２８年度は減少しました。

平成２６年度（H26.3 卒業）　１６人
平成２７年度（H27.3 卒業）　１４人
平成２８年度（H28.3 卒業）　　７人

（４）県内他地域から紀南地域の高校への進学状況

紀北地域をはじめとする他地域の中学校を卒業し、当地域の県立高校に進学する生徒の数は、平成２０年度（H20.3 卒業）には５６人（うち紀北地域５１人）いましたが、近年は少なくなっています。

平成２６年度（H26.3 卒業）　　８人（うち紀北地域　　４人）

平成２７年度（H27.3 卒業）　２１人（うち紀北地域　１６人）
平成２８年度（H28.3 卒業）　１９人（うち紀北地域　１９人）

（５）木本高校（募集定員２００人）と紀南高校（募集定員１２０人）の欠員状況

平成２６年度（H26.3 卒業）	木本高校	０人	紀南高校	０人
平成２７年度（H27.3 卒業）	木本高校	１５人	紀南高校	１６人
平成２８年度（H28.3 卒業）	木本高校	０人	紀南高校	９人

３　平成２８年度の協議

平成２８年度は、当地域の中学校卒業者が地域の県立高校で学べるようにという視点から、両校の活性化に向けた取組について、引き続き協議を行いました。

また、当初、紀南地域新高等学校構想ワーキング会議での検討状況の報告をもとに、将来的に新たな高校を設置する場合の計画内容について協議を行うこととしていましたが、以下のような、委員から意見や県教育委員会から示された平成２９年度からの次期「県立高等学校活性化計画（仮称）」の策定に係る新たな方向性をふまえ、紀南地域の高等学校のあり方についての協議を行いました。

（委員からの意見）

○　両校を存続させるための方策についても協議していくことを望む。

（次期「県立高等学校活性化計画（仮称）」の策定に係る新たな方向性）

○　１学年２学級以下の高等学校について、地域の状況、学校・学科の特色、生徒の通学の実態等から、特に存続が必要と考えられる場合には、学校ごとに関係者で協議会を設置し、地域と一体となった活性化に取り組む。

○　１学年３学級の高等学校は、今後、中学校卒業者数の減少が予測されるなかで、学校の活力を維持していく観点から、状況に応じて、上記の２学級の学校と同様の協議会を設置し、２学級の学校に準じて活性化の取組を進める。

（１）木本高校・紀南高校の活性化に向けた取組について

両校では、これまでの取組を発展・充実させながら、特色化・魅力化による活性化を図っています。

木本高校では、平成２８年度から、三重大学教育学部の「三重県南部地域創生事業　東紀州サテライト」を活用した各種取組（大学教員による講座、遠隔授業等）により、進学指導の充実に取り組んでいるところです。

紀南高校では、地域住民や保護者が一定の権限を持って学校運営に参画する学校運営協議会が、学校との連携のもと、より主体的な学校支援の取組の充実を図り、生徒にとっての魅力の向上に努めているところです。

（委員からの主な意見）

○　進学指導や部活動、インターンシップ等、両校それぞれが特色を生かしながら、生徒の意欲を高めるよい実践に取り組まれている。

○　両校がそれぞれの特色を明確にしていく方が、子どもたちの学校選択のうえでもよいのではないか。

○　紀南高校での基礎学力の定着・向上に対する取組、木本高校での進学指導の取組は、生徒の実態に応じた進路保障の取組であり、両校の特色と言える。

○　家庭訪問や中学校との連携で把握した生徒の状況を校内で共有するなど、き

め細かな指導が行われている。

○　将来、公務員や教員として地元で活躍する人材の育成も大切である。

○　高校卒業後あるいは将来的に地域を担いたいという思いを生徒に育むことは、高校による何よりの地域貢献である。小中学校の段階から地元への愛着を育む学習を積み上げ、高校につなげていくことが必要である。

○　高校での学習を充実させるためにも、小中学校において学力向上にしっかりと取り組んでいくことが大切である。

○　木本高校の生徒による木本小学校での外国語活動の学習支援は、英語で表現する楽しさを高校生とともに味わえたこと、高校生の姿が小学生の将来モデルとなったこと等、有意義な取組であった。

○　学校運営協議会で取り組んでいる生徒との「対話集会」では、「１年程経ってみて、紀南高校に来てよかった」との感想を聞くことが多いので、良さを知ってもらうことで、紀南高校を選ぶ生徒が増えるようＰＲしていきたい。

○　紀南高校では、基礎学力の定着・向上に注力しており、素晴らしい取組であるが、中学生にとっての紀南高校の魅力ではないのではないか。木本高校と同様に、進学や就職ができることを魅力としてＰＲしていくべきではないか。

○　木本高校では、生徒の自己実現に向けて多様なコース設置のもとに進路指導に努め、実績をあげていることをさらにＰＲしていくことが大切である。

○　部活動によっては、専門的な指導ができる教員がいるので、その資源を活用したＰＲをすることで、他地域への流出を止めていくことも必要である。

（２）紀南地域の高等学校のあり方について

県教育委員会から示された平成２９年度からの次期「県立高等学校活性化計画（仮称）」の方向性をふまえ、両校の魅力を高めるための活性化方策等についての協議を行いました。

（委員からの主な意見）

○　地域住民や県市町の行政も一丸となって両校を支援し、活性化を図っていくための具体的な議論が必要である。生徒にとって魅力のない高校となってしまうのであれば存続させる意味がない。

○　１学年２学級の小規模校となった場合、現状と同じ取組を進めるだけでは活性化を図れない。どのような高校としていくのかを明確にする必要がある。

○　生徒の求める教育の実現に向け、両校の特色に応じた支援に地域全体で取り組んでいくこと、県・市町・小中高等学校が協働して取り組んでいくことが大切である。

○　地域の活性化には地域の将来を担う人材育成が大切であり、高校の存在そのものが地域の活性化につながるものである。

○　市町には、進学に関わる支援、就労や産業の担い手育成に関わる支援等を期待したい。

○　学校所在地の市町と在校生が居住している市町が協力・連携し、両校生徒へのサポートを期待したい。

○　両校ともこの地域の子どもたちにとって必要な高校である。両校の魅力のさらなる向上に向け、地元市町としても、両校のニーズに応じて可能な支援を検討していく必要がある。

○　両校の活性化に向けた取組に関わり、地域や各団体として、どのような支援が可能なのか示してもらいたい。

○　地域の産業界として、インターンシップや体験活動等の取組に対して、両校のニーズに応じた協力をしていきたい。

○　地域の将来を考えると、生徒の地域への愛着を育てる必要があり、地域の産業界、ＮＰＯ、住民が生徒とかかわり合う機会づくりも大切である。

○　地域で育った高校生が、卒業後に地域から必要とされる人材であると実感できるよう、高校での教育と地域産業界からのＰＲの両面が大切である。

○　両校の生徒が他地域の高校生とも交流する機会を地域の事業所や市町がつくっていくことも活性化につながる取組となるのではないか。

○　三重大学教育学部が検討している南部地域からの推薦入試制度は、地域の担い手育成も視野に入れたものであり、三重大学教育学部との連携を進めている木本高校の魅力化に生かせるものである。生徒がこの制度を利用しやすくなるよう、市町からも何らかの支援を考えてもらいたい。

○　両校が存続することが望ましいが、小規模化により、進学指導や部活動が難しくなるのであれば、統合に向けた議論を進めるしかない。

４　今後に向けて

平成２９年度以降、木本高校、紀南高校のさらなる活性化に向け、学校ごとに次のような取組を進めることが必要です。

・　木本高校は、サポート委員会（学校関係者評価委員会）を活用するなど地域や地元行政との連携を強化し、引き続き、進学や部活動へのニーズや期待に十分応えることをはじめとした教育活動の充実に努める。

・　紀南高校は、学校運営協議会制度を土台としながら、次期「県立高等学校活性化計画（仮称）」の方向性として示されている「学校ごとの協議会」を設置し、地域や地元行政と一体となった教育活動のさらなる充実を図る。

また、当協議会においては、両校の活性化に向けた取組状況を共有し、両校の教育活動の改善・充実に向けた意見交流を図るとともに、平成３７年度以降の中学校卒業者数のさらなる減少を見据え、当地域における生徒の学びを保障するための高等学校のあり方について、協議していく必要があります。